京都出土中国産陶磁器の形・質・割合とその背景（１）

－平安時代前・中期の文化人が憧れたものは何か―

赤松　佳奈

１　はじめに

横田賢次郎氏・森田勉氏が「大宰府出土の輸入中国陶磁器について－型式分類と編年を中心として－」[1]を発表してから約40年，冒頭には「比較的良く編年がなされている大宰府跡の土師器を中心として陶磁器の編年を行うこととする。」という基本姿勢が明示されている。

対して，消費地・京都では，堀内明博氏[2]・前川要氏[3]・小森俊寛氏[4]による論考はあるものの輸入陶磁器だけを体系だって整理した論考は未だ見ない。それは多種多様な遺物が膨大な量で出土する都市遺跡，消費地遺跡故の難しさに起因している。しかし，京都では1996年以降基準としてきた土師器編年があり[5]，さらに2019年には平尾政幸氏によって，蓄積された問題を再検討した改訂版が出されたばかりである。

京都市内で調査が開始されて約50年，発掘累計数は3000件以上，出土遺物は20万箱以上に及ぶ。刊行された報告書も800冊以上となり，報告資料のみを収集しても，統計学的な信頼度を担保できる数に達している。他の器種においても，整理する条件は整っている。

現時点での京都・輸入陶磁器研究にとって最優先課題は，まず各時代に何がどれくらい出土するのかという実態を明らかにする事である。そこで本稿では平安時代前・中期出土中国産陶磁器の器形種類と量の把握を第１の目標とし，次に土師器編年を軸にすることによって時期毎の様相を明らかにし他地域と比較可能な資料を提示することを目指した。この上で，多量にある器形については型式学的な変化について考察するよう努めた。その結果，９・10世紀の様相とその中には中国の紀年銘墓資料と比較可能な高品質のものが一定量含まれている事が分かった。あわせて大消費地である京都の特性を活かし，平安時代前・中期の高級食器である緑釉陶器を含めた土器様相の中に中国産陶磁器を位置づけた時，とりかかった当初には思いもよらなかった結論が導き出され，そのエッセンスを副題とした。それではまず，京都出土の中国産陶磁器の整理から順を追って述べていく。

２　京都出土の中国産陶磁器

対象とする時期と資料

今回対象とする時期は８世紀末から11世紀の初頭まで，京都の土師器編年で言えば１期に当たる１Ｂ～３Ｂ段階（780～990年頃）に一部３Ｃ・４Ａ段階を加えたおよそ11世紀前葉までとする（図１）[7]。

中国では唐後半に成立した文化が五代に

引き継がれ，新興の宋が文化を確立するまでに当たる。

輸入陶磁史から見た当該期は，越州窯系青磁と邢州・定窯系白磁に代表され[8]，中でも越州窯系青磁の出土量が多い事は全国的な現象と捉えられよう。共伴する土師器の時期を基準に段階毎の様相を追いかけた時にも転換は認識でき，検討時期を決めるに当たっては青磁主流の時期から白磁主流に変わる11世紀代を目安の１つとした。

出土遺物の数量把握については基本的に報告書掲載遺物を対象としたが，補助的に未報告資料も使用する。資料収集は本来悉皆的に行うべきであるが，力が及ばず精査できなかった報告書も多い。ここでは実物の確認が容易な文化財保護課・京都市埋蔵文化財研究所による調査と平安京右京域で当該時期の遺構が比較的よく残っている調査報告書を中心に，87件の調査から出土した586点（細片であっても１点と数えた）の輸入陶磁器を対象とした。

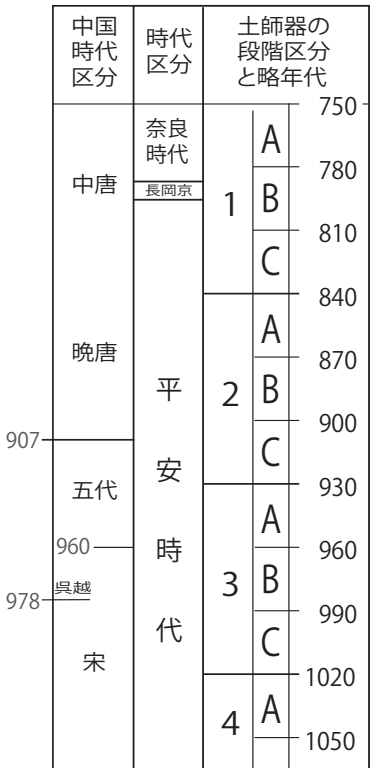


図１　京都出土土師器の時期区分と年代観
平尾2019より引用・追記

なお収集に当たっては包含層出土のものや，新しい時代の遺構への混入品も数に含めた。これは越州窯系青磁や邢州・定窯系白磁は特徴的であり，生産・輸入時期もある程度絞れる事から抽出が可能である事が理由として大きいが，古い遺構ほど攪乱を受ける都市遺跡の特徴を加味した上で，平安京の全体像を統計的に可視化できないかと考えたためである。

出土器種と器形の分類

出土器種には，唐三彩，絞胎陶器，長沙窯磁（長沙は広義の青磁だが本稿では長沙窯磁or系），越州窯系青磁（以下青磁），邢・定窯白磁，それに10世紀代からは産地不明の白磁が見られる（以下両者をあわせて白磁）。

器形には多様な種類がある。器形名称とその細分は器種にかかわらず統一したものを使用する（図２）。

供膳具には椀，杯，鉢，皿，托があり卓上で使用するものに水注，唾壺がある。

貯蔵具やその他には壺，合子，香炉，灯明皿，鉢，枕がある。

形態が多様な器形（椀・皿・杯・托）については稜椀・段皿といった既知の分類名称に加えて記号による細分を使用する。

細分は各器形とも体部形態を基準とし，高台，口縁端部形状をより下位の基準として進める。輪花意匠のものは記号末尾にRを付す。

椀（稜椀，椀Ⅰ～Ⅷ）＋輪花R

稜椀　体部に稜をもつ。

椀Ⅰ　体部が弱い弧を描きながら真っすぐに立ち上がる。他と比較して器高に対して口径が小さく筒状を呈する。

椀Ⅱ　体部が弧を描きながら立ち上がり口縁部にむけて内弯気味に続く。

椀Ⅲ　斜め方向直線的に体部が立ち上がる。時期が降るとやや丸みを帯びる。

椀Ⅳ　底部から強い弧を描きながら体部が立ち上がり口縁部にむけて外反する。

椀Ⅴ　体部が角をなして立ち上がり，外反気味に開きながら口縁部に続く。

椀Ⅵ　体部が角をなして立ち上がる。腰部が折れる。

椀Ⅶ　平坦な底部からやや丸みを帯びてに立ち上がり外反気味に口縁部に続く。

椀Ⅷ　体部全体で花型を表現する。花弁に沿って口縁部から体部にかけ屈曲する。

椀Ⅱ・Ⅲ・Ⅳは高台形態→高台形態の細部・口縁端部を基準にさらに細分する。

椀ⅡはA・Bの2つに分かれ，Bはさらに口縁部で分類する。

椀ⅡA：蛇の目高台。

椀ⅡB：輪高台。

ⅡB1　直口口縁。

ⅡB2　玉縁状口縁。

椀Ⅲは３つに分かれ，さらに高台の細部形状・口縁部形状によって各々細分する。

椀ⅢA：蛇の目高台。

ⅢA1：直口口縁。

ⅢA2：玉縁状口縁。

椀ⅢB：輪高台。目安は底径に対し高台幅が20％未満のもの。

Ba：高台幅が標準的～広いもの。目安は底径に対して高台幅が20％未満８％以上。

Ba1：直口口縁。

Ba2：玉縁状口縁。

Bb：高台幅が細いもの。目安は底径に対して高台幅が８％未満。

椀ⅢC：平高台

Ca：底部の接地面が広いもの・弱く外反するもの。

Cb：平高台で高台部が体部下端より外にあり，底部内反りの大きいもの。

椀Ⅳは全て輪高台形状のため，分類記号の都合上B（輪高台）として高台幅と断面形状を基準に細分する。

椀ⅣBa：輪高台の幅が標準的～広いもの。目安は底径に対して高台幅が８％以上。断面形状は方形か撥形が多い。

Bb：輪高台の幅が細いもの。目安は底径に対して高台幅が８％未満。断面形状は長方形あるいはU字型，U字型は時期が降がると斜めに踏ん張る形が現れる。

杯（小杯・杯ⅠR・ⅡR）

小杯：口径が10㎝以下のもの。

杯は平高台で現状では輪花がつく。

杯ⅠR：底部が丸く，体部が強く弧を描いて立ち上がり口縁部にむけて強く外反する。９世紀代は椀Ⅳによく似る。

杯ⅡR：底部が平らで体部が角をなして立ちあがり口縁部にむけて外反する。

皿（皿Ⅰ～Ⅲ，段皿）＋R

皿Ⅰ：体部が角をなして立ちあがり，斜

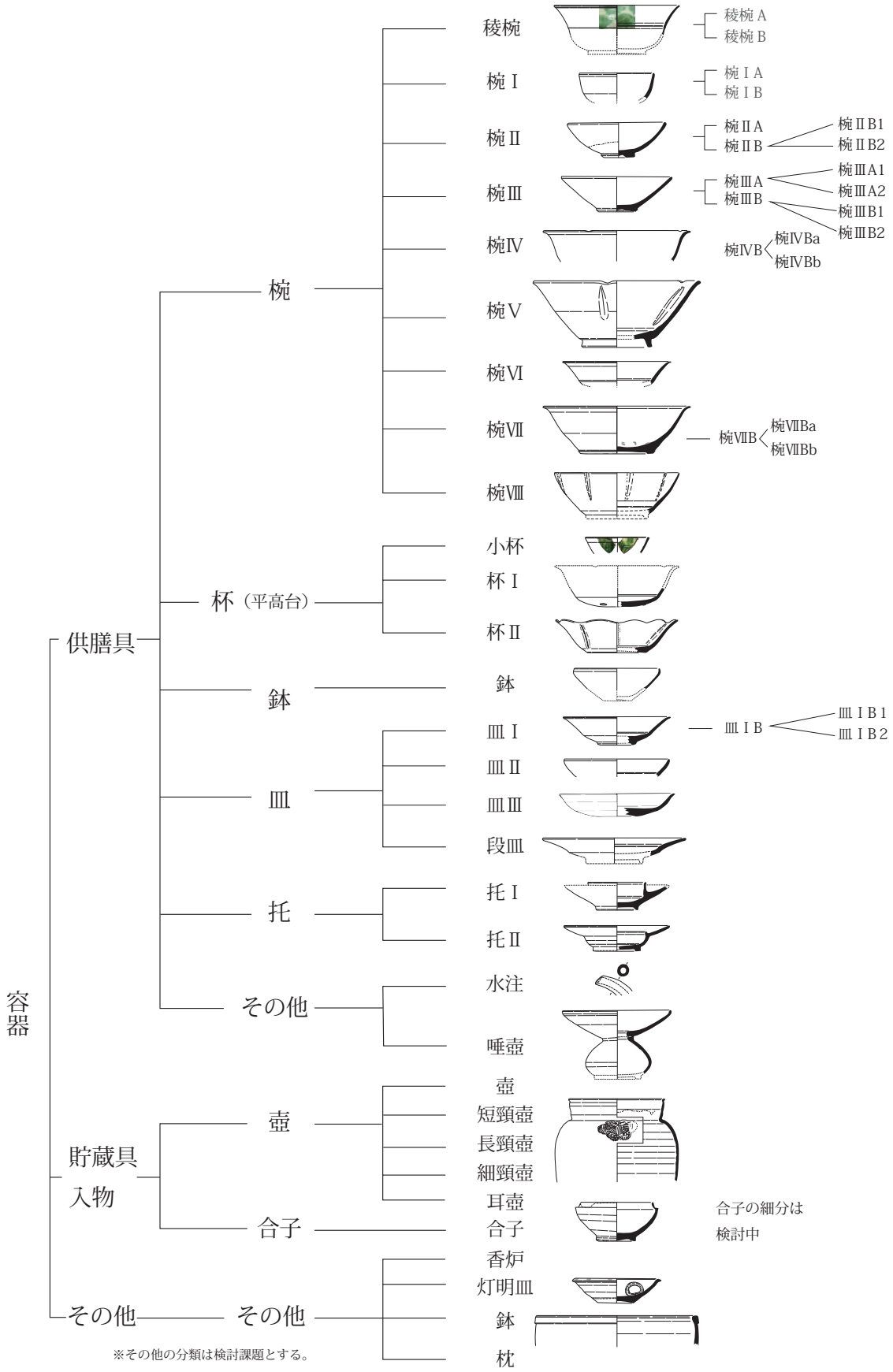


図２　出土器形の種類と形態分類（1：８）

め方向に真っすぐあるいはやや外反気味に伸びる。高台形状でA・Bに分け，Bはさらに口縁部形状で２つに細分する。

皿Ⅰの細分は以下のとおりである。

皿ⅠA：蛇の目高台。

ⅠB：輪高台。

ⅠB１：直口口縁。

ⅠB２：玉縁状口縁。

皿ⅠBa：輪高台の幅が標準的～広いもの。目安は底径に対し高台幅が６%以上。

ⅠBb：輪高台の幅が細いもの。目安は底径に対し高台幅が６％未満。

皿Ⅱ：体部が角をなして立ちあがり口縁部にむけて内弯する。底部が遺存していないが中国の類例から輪高台と推定される。

皿Ⅲ：底部からやや弧を描いて立ち上がり口縁部にむけて外反する。

托（托Ⅰ・Ⅱ）＋R

托Ⅰ：受け部が皿部より高いもの。

托Ⅱ：受け部が皿部より低いもの。

以上，将来的に細分あるいは統合する場合には体部：ローマ数字，底部形状：アルファベット大文字，その細分：アルファベット小文字，口縁端部形状：アラビア数字の基準で記号をふり，必要に応じ再検討する。

各器種の割合と器種別概要（図３）

点数による各器種の割合は唐三彩，絞胎陶器，長沙窯系が合わせて８％，青磁62％，白磁30％である。器形の種類は総じて椀類が目立つ。以下，器種毎に出土状況を概説する。

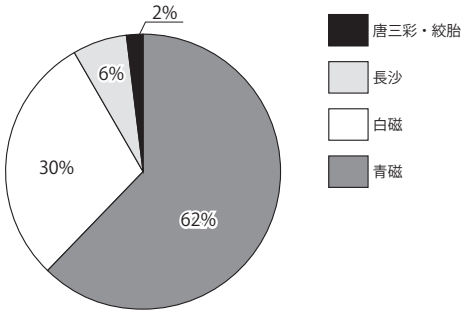


図３　各器種の割合

唐三彩と長沙窯系（図29）

唐三彩系の中国産陶器には二彩・三彩と絞胎陶器がある。三彩には枕，壺があり，二彩は小杯，鉢，稜椀，水注がある。絞胎陶器はいずれも細片である。枕と壺がある。全体量が少ないため詳細は不明だが，現段階では寺院周辺の遺跡から出土する事が多い。10世紀後半の土師器と共に出土する場合もあり伝世品だけではなく平安時代にも輸入されていたと考えられる。

長沙窯系の磁器には水注を含む壺類が多いが椀，皿もある。９世紀代の遺構からの出土が多い。壺類は主に黄釉褐彩でまれに白釉緑彩もある。褐釉単色の壺も１点ある。成勝寺跡出土の黄釉褐彩壺は水注ではなく双耳壺である。史跡・名勝嵐山から出土した椀・皿は2A段階古相の土師器に共伴して出土した。椀ⅡAと皿ⅠAが各１点である。京都出土の蛇の目高台の器形としては古い方に属す。

青磁

青磁は基本的に越州窯系で精製品と粗製品とがある（図４）。ここでは調整が丁寧で

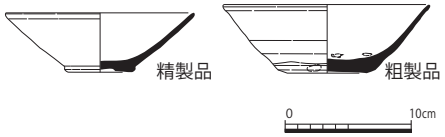


図４　青磁椀の精製品と粗製品

総釉のものを精製品，ケズリの調整が簡易で基本的には外面下部が露胎のものを粗製品とする。

精製品には椀Ⅰ・ⅡA・ⅢA・ⅢB(R)・Ⅳ（R)・Ⅴ（R)，大椀，椀蓋，杯ⅠR・ⅡR，皿Ⅰ（R)・Ⅱ・Ⅲ，段皿，托Ⅰ，鉢，唾壺，水注，合子，細頸壺，長頸壺，短頸壺，壺蓋，香炉がある。粗製品には，椀ⅢC・Ⅶ（R)，壺，鉢，灯明皿がある。

精製品の器形・形態と数量（図５）

現在出土が確認できた青磁精製品の椀はⅠ～Ⅴがある。中国陶磁史からみた器形成立の背景に沿って群別すると，

イ:隋代からの伝統的器形椀Ⅰ，計４点。

ロ：中唐に成立した蛇の目高台椀系で椀ⅡA・ⅢA・ⅢB。

蛇の目高台であるⅢAが型式変化し輪高台ⅢBになる（詳細後述)。京都では底部まである確実な出土資料を欠くが，中国の出土例では青磁椀ⅡAも時代が降ると輪高台ⅡBに型式変化する。

この他，椀ⅢBには口径23㎝大の椀（大椀）がある。形態は椀ⅢBで仮に椀とするが鉢の可能性もある。

椀Ⅱ４点，椀Ⅲ126点（底部無49点，A40点，B37点（B内R9点)），計130点。大椀４点。

ハ：盛・中唐に成立した同時代金属器写し系の椀Ⅳ，Ⅴ。

時代が降るにつれ輪高台が細くなる傾向にある。椀ⅣBaが型式変化してⅣBbになる。しかし全てBb（細高台）になるわけで

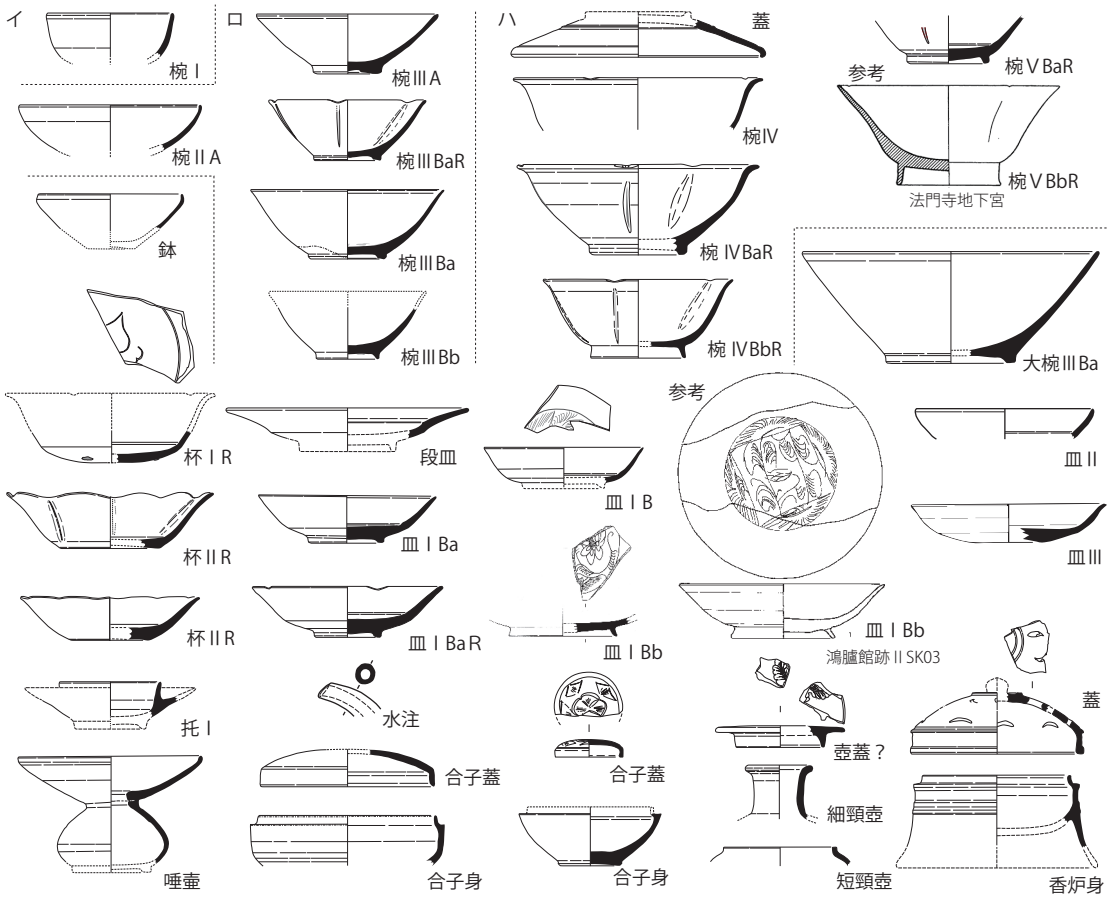


図５　出土青磁精製品の器形と細分（1：6)

はない。Ⅴは出土数が少なく型式変化は現段階では不明であるが，ⅣBbはⅣとⅤが収斂したものとして現段階では考えている（図11）。出土量が増えればⅤの型式変化による細分が可能かも知れない。

椀Ⅳは56点，Ⅴは8点ある。ほかにⅣに伴う蓋が1点出土している。計65点。

椀の合計は203点。

杯（図５・６）は現在のところ輪花意匠のあるものしか出土していない。杯ⅠRは椀Ⅳと類似性が高い。10世紀代になると杯の主流はⅡになると想定される。ⅠR4点，杯ⅡR4点ある。計8点。

皿（図５・６）はほとんどが皿Ⅰで皿Ⅱ・Ⅲ，段皿は各1点である。皿Ⅰには同形態で輪花意匠の皿ⅠRもある。変化の方向性は時代が降ると法量が縮小し薄手になる。10世紀のものには見込みに陰刻のあるものもある。基本的に輪高台で10世紀後葉に細高台の皿ⅠBbが少量見え始める。また，現段階の皿Ⅰは見込の広さに差がある２つの系統を含む。将来的に細分が必要かもしれない。皿Ⅰは23点，皿Ⅱは1点，皿Ⅲは1点を確認した。ほかに段皿が1点ある。計26点。

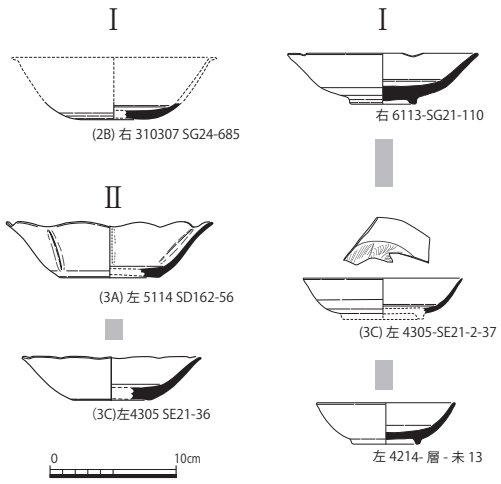


図６　杯・皿の変化（1：6）

表１　青磁精製品の器形別割合

器形	数量	割合		器形	数量	割合
椀Ⅰ	4	2%		大椀	4	1.3%
椀Ⅱ	4	2%		細高台＊	12	3.9%
椀Ⅲ	126	64%		托	2	0.6%
椀Ⅳ	57	28%	蓋含む	鉢	4	1.3%
椀Ⅴ	8	4%		水注	11	3.6%
小計	199	100%	64.4%	唾壺	4	1.3%
杯Ⅰ	4	50%		供膳具合計	270	87.4%
杯Ⅱ	4	50%		合子	14	4.5%
小計	8	100%	2.6%	香炉	4	1.3%
皿Ⅰ	23	88%		壺	21	6.8%
皿Ⅱ	1	4%		その他計	39	12.6%
皿Ⅲ	1	4%				
段皿	1	4%		総計	309	100%
小計	26	100%	8.4%			

＊11Ｃ前葉出土のもの

青磁の托は托Ⅰのみで２点確認した。

鉢には供膳具と火鉢（粗製）がある。供膳具の鉢は口径が13㎝～15㎝大のもので底部の残存例が無いが中国の出土例（図14-19）では平底である。細片では椀Ⅱと区別がつきにくいものの，口縁部が強く内湾するものは鉢の可能性が高い。この青磁鉢を模した緑釉陶器素地が灰方窯跡[9]（図７）から出土しており，輸入されていた事の傍証としたい。

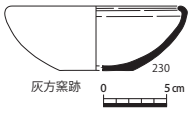


図７　緑釉陶器素地の鉢

その他に，唾壺が4点，水注が11点ある。

壺類は細頸壺，長頸壺，短頸壺，壺蓋があり計21点。他に合子14点，香炉3点がある。

精製品の合計は309点。精：粗の比は85：15である。

粗製品の器形・形態と数量

粗製品は大宰府跡・鴻臚館跡と比べて京都に運ばれた器形の種類が少ない。椀ⅢC・Ⅶ，壺，灯明皿がある。

椀ⅢCは底部形態によって細分した。

Ca：底部の接地面が広いもの・弱

く反るもの。25点。

Cb：平高台で高台部が体部下端より外に張り出し，底部内反りの大きいもの。11点。

椀Ⅶ：平らな底部からやや直線的に立ち上がり外反気味に口縁に続く。18点。

椀Ⅶは現時点では椀ⅢCaの流れを組むと考えている輪高台の椀ⅦBaのみ確認した。椀ⅦBaは平坦な高台の端部に低い輪高台がつく。10世紀代からみえる器形で，出土が少量のため現段階では予察として椀ⅢCaの系統としておく。精製品の蛇の目高台椀が輪高台化する影響，あるいは器形の主流が椀ⅣBbに移った事による影響により，高台をもち口縁部が外反する器形に変化したと推測している。なお，京都では出土事例を確認できなかったが，博多・鴻臚館跡から椀ⅢCbと底部の特徴が類似する椀ⅦBbが出土している（図８）。

細分すると次のようなる。

椀ⅦBa：底部が平らで外端に輪高台がつく。

Bb：底部が強い内反で底部外端が輪高台状を呈する。

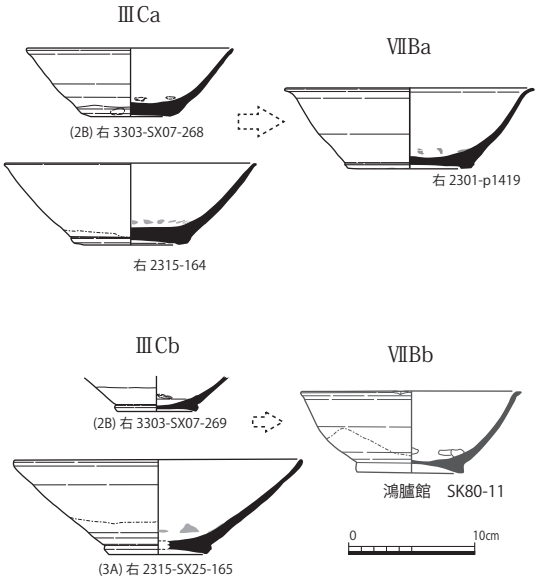


図８　粗製椀の細分と変化（予察）(1：6)

灯明皿は１点出土している。口縁端部上端にカイメがつく。

壺は外面下半露胎で粗製椀と胎土・釉調が良く似たものが１点出土している。胴部までの破片資料である。

鉢は体部外面が露胎で火鉢の類と考えられるものが１点ある。

粗製品は計57点。

表２　青磁粗製品の器形別割合

器形	数量	割合		器形	数量	割合
椀ⅢCa	25	46%		灯明皿	1	1.8%
椀ⅢCb	11	20%		壺	1	1.8%
椀Ⅶ	18	33%		鉢	1	1.8%
小計	54	100%	94.7%	総計	57	100%

白磁（図９）

白磁は現時点で椀，皿，托，唾壺，壺蓋が確認できた。生産地中国では他にも器形の種類があり，青磁と類似した器形も知られる事から将来的には種類が増えると予想される。

椀にはⅠ～Ⅵ，Ⅷがあり，椀Ⅱ・Ⅳには輪花意匠のものもある。青磁と同じ系統で分けると，

イ：隋代からの伝統的な器形で椀Ⅰ。椀Ⅰはすべて細片である。計２点。

ロ：中唐に成立した蛇の目高台椀系で椀Ⅲ。白磁椀Ⅲも時期が降がると蛇の目高台から輪高台へ大局的には変化する。型式変化については後述する。椀Ⅲ 87点（底部無43点，A 29点，B 12点，細分不明３点）。

ハ：盛・中唐に成立した同時代金属器写

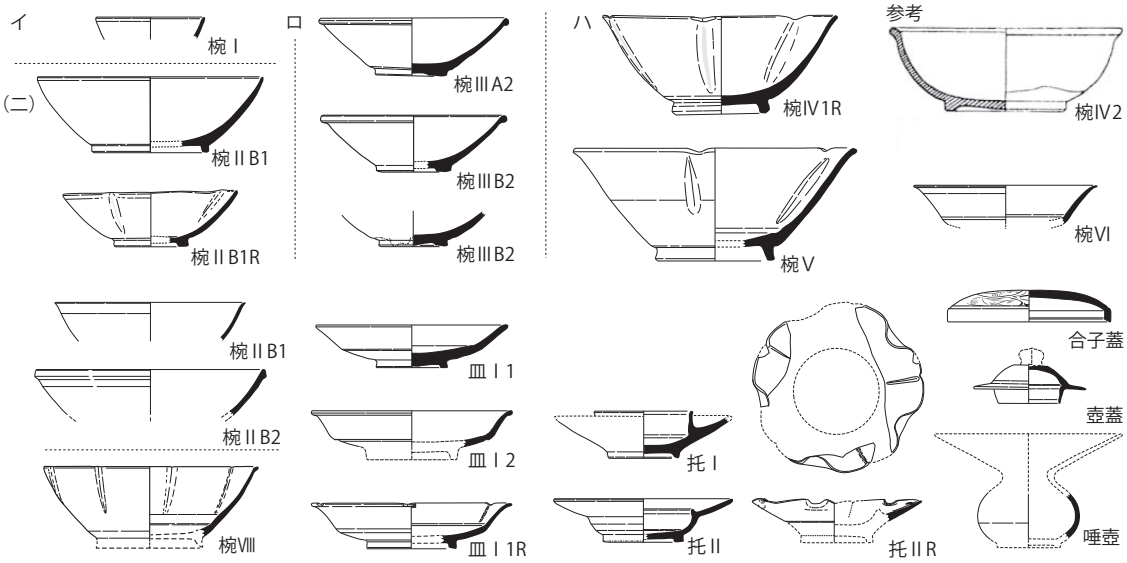


図９　出土白磁の器形と細分（1：6）

しの輪高台椀系で椀Ⅳ，Ⅴ，Ⅵ。

椀Ⅳは 13 点，椀Ⅴは 12 点，椀Ⅳ・Ⅴ不明は３点，椀Ⅵは２点で計 30 点ある。

ニ：イとハの要素をもつ器形で椀Ⅱ。

ニは予察として提示する。白磁に特異な現象か，あるいは越を除く青磁にも捉えられるかもしれない。

イに属する椀Ⅰは，中国では唐代を通して存在する椀で祖形は南北朝以前に遡り[10]，広く使用された形態である。口径が器高より 1.5 倍以上広い椀は初唐からあるが，盛・中唐に盛行し，中・晩唐に主流となった。この過程で椀Ⅰから派生した形態が椀Ⅱだと捉えており，青磁は椀Ⅲ，白磁は椀Ⅳと親和性が高いようにみえる。

表３　白磁の器形別割合

器形	数量	割合		器形	数量	割合
椀Ⅰ	2	1%		皿	14	8.1%
椀Ⅱ	7	5%		托	4	2.3%
椀Ⅲ	87	62%		唾壺	1	0.6%
椀Ⅳ	13	9%		壺	6	3.5%
椀Ⅴ	12	9%		合子	1	0.6%
椀Ⅳ・Ⅴ	3	2%		不明	7	4.0%
椀Ⅵ	2	1%		総計	173	100%
椀新（Ⅷ含）	14	10%				
小計	140	100%	80.9%			

椀Ⅱは７点（内Ｒ１点）ある。

10世紀後半以降は産地未確定の白磁（精製品）が増え，形態の基本が椀Ⅱになる（図12）。口縁部が直口あるいは外反の椀Ⅱ１と玉縁状の椀Ⅱ２がある。

椀Ⅱ１は５点（内Ｒ１点）。

椀Ⅱ２は８点。

宋代に盛行する椀Ⅷは 11 世紀初頭の資料を１点確認した。

白磁の皿は現段階で確認したものは皿Ⅰのみで，基本的に輪高台（Ｂ）である。口縁部形態が２種ある。輪花もある。

皿ⅠＢ１：直口口縁。９点。

皿ⅠＢ２：玉縁状口縁。３点

底部のみ２点，計 11 点。

白磁の輪花意匠は内型を用いて施される事が多く，内型で整形された輪花は外面が瓜破状を呈しない。

托，托Ⅰ・Ⅱがある。托Ⅱには輪花意匠のものがある。いずれも少数である。托Ⅰ１点，托Ⅱ ３点（内R1点）

その他に唾壺１点，壺が６点，合子蓋１

点が確認できた。他に白磁には体部片などで器形が不明な破片が7点ある。

白磁は合計173点。

青磁・白磁の段階別出土傾向と様相

出土資料を概観すると，青磁・白磁の器形種類と形態および長沙窯系の椀・皿には共通性がある事がわかった。ただしこの共通性は9世紀代～10世紀前葉までのもので，10世紀後半になると両者は乖離し始める。再び共通性が見え始めるのは宋代に流行する器形（京都では10世紀末頃から出土，この点は別稿で詳述する。）が出土するようになってからである。

次に出土量について考えたい。1B～2A段階（780-870年頃）の土師器と共伴する輸入陶磁器の出土例はごく少量しかない。しかし2B段階（870-900年頃）には数が増え本検討中最多量となる。次の2C段階は2B段階に比べてやや減少する。ただし時期別出土量は共伴資料が整っている遺構数に左右されるため将来的には見解が変わるかもしれない。

続く3A段階（930-960年頃）は減少期である。共伴土師器による検討だけでなく，青磁・白磁の型式学的な知見を含めて考えた時，2C段階の末～3A段階の前半は明瞭ではないが供給停滞期の可能性がある。時期別出土量も減るが空白期と言えるほど激減するわけではない。しかし3A段階に共伴する資料は型式学的には2C段階に位置づけても大過ないものが多くあり，新しい要素が他段階に比べて少ない。

そもそも本稿で提示する年代観は廃棄年代である。京都出土資料は，墓や埋納遺構など特定用途の遺構から出土したものを除けば一定期間使用した後に捨てられたものと言える。土師器を年代の軸にする優位はこの点にもあって，「清浄」である事を価値の一部とする土師器皿は出土状況からも使い捨てられた事が明らかであるため生産後短期間の内に廃棄されたと想定できる。これに対し輸入陶磁器のような奢侈品は保持期間，つまり生産から廃棄までの時間幅が長く変動的である事は現在ある伝世品の存在からも想定されるとおりである。

供給が停滞すれば，既にあるものを保持する時間が長くなる可能性は十分に考えられ，3A段階出土資料の中には，中国の紀年銘墓出土資料と比較した時に，生産年代との差が60年以上になると想定されるようなものもある[11]。

続く3B段階（960-990年頃）は3A段階に比べ出土量が増える。しかし9世紀代ほど多くない。この時期の椀は青磁・白磁とも蛇の目高台だったものが輪高台化している。青磁は椀Ⅲと椀Ⅳの形態が近似する（詳細については後述）。白磁は精製品であるが産地未確定の資料が増え，全体的に薄手化する。椀の形態はⅡになり，最も実用的な形に戻ったような印象を受ける。

なお，この出土量に対する見解は京都独自のものである。京都で出土量が減る時期の青磁は博多・鴻臚館跡[12]などで多量に出土している。

椀の型式変化

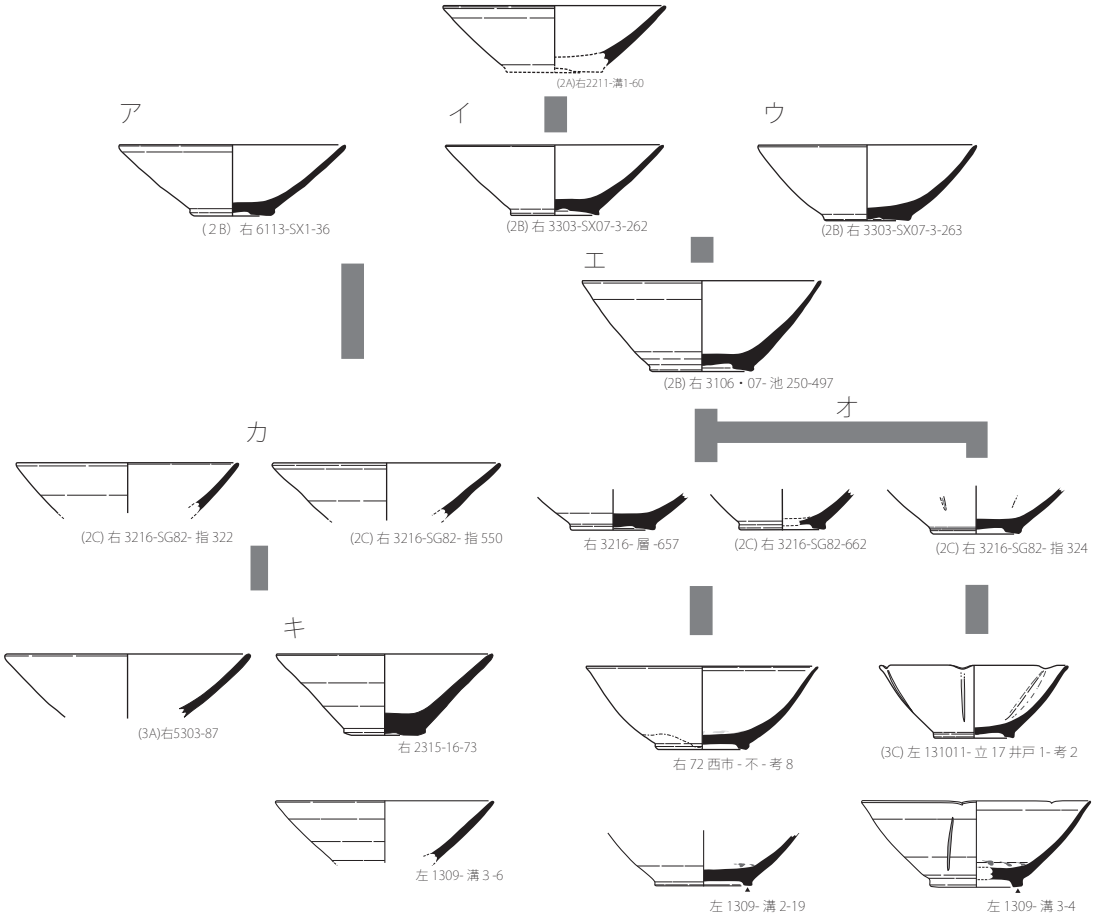
青磁

青磁椀のうち椀Ⅲは100点以上，椀Ⅳ・Ⅴは50点以上の個体が確認できたため，ある程度型式学的な変化が看取された。

椀Ⅲ（図10）　変化の大きな流れは，①

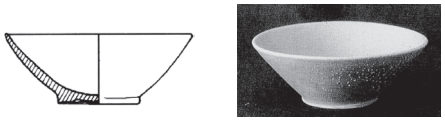
蛇の目高台の幅が段階的に狭くなり輪高台化する事，②体部にやや丸みを帯びる事，③輪花椀が登場する事，そして，④調整は簡略化されるものの基本形態が大きく変化しないグループがある事，の４点である。

亀井明徳氏は，唐代磁器の高台は平高台から発展的に蛇の目高台，輪高台へと変わると考え，９世紀後半には蛇の目高台から輪高台に変化したと指摘した[13]。2000年には森達也氏がこれを更新させて，青磁椀には当初から輪高台と蛇の目高台の２系統がある事を示した[14]。これについては中国

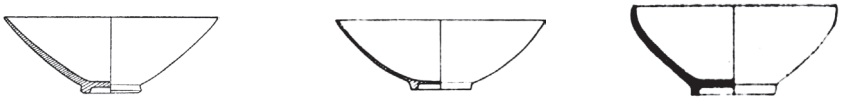


※あくまで型式変化の推移であって実際には前後の段階のものが共伴して出土する。

参考　五代呉越国　康陵（939 年）　出土遺物



参考　中国紀年銘墓にみる斗傘椀



遼韓佚墓（統和 15 年 997，同 29 年 1011）　陳国公主墓（開泰 9 年 1018）　内蒙古通遼県二林場遼墓（10ｃ末～ 11ｃ初頭）

中国出土品：縮尺不定

図10　型式学的な観点から見た青磁椀Ⅲの推移

の上林湖越窯跡でも認識されている[15]。

京都で椀ⅢAが量的に出土し始める2B段階（870-900年頃）の資料を見ると，

ア：体部が直線的で蛇の目高台下端面の接地面が広いもの。

イ：体部が直線的で蛇の目高台下端面の接地面が外端のみのもの（内反り高台の中央部を抉り蛇の目高台にしたもの）。

ウ：体部にやや丸みをもち蛇の目高台下端面の接地面が広いもの。

といった形態差が見られる。またこの段階で１点だが，

エ：蛇の目高台の幅がやや狭いもの。

がある。

続く２C段階には高台幅が確実に狭く輪高台と呼べる椀ⅢBが現れ（後述のオ），この体部がやや丸みをもつ事から，ⅢAのうち体部にやや丸みが帯びる「ウ」・「エ」がⅢBに型式変化していくと考えている。

しかし一方で椀ⅢBが出土した同じ遺構（右京三条二坊十六町跡SG82　2C段階）から，体部に丸みをもたない直線的な椀（底部を欠く）も出土している。直線的な体部の椀（カ）は次の3A（930-960年頃）以降も残る。つまり２C段階以降の椀ⅢAは

オ：体部に丸みをもち蛇の目高台の幅が狭くなって輪高台化したもの。

カ：体部が直線的なままで高台形状が蛇の目高台である可能性のあるものの２つに分かれたと解釈できる。

10世紀以降の主流はオで，3B段階（960-990年頃）まではカに比して調整が丁寧である。またオに輪花椀が現れる。

輪花は元をたどれば金属器の意匠で，胴部が凹む瓜破と口縁部の小さな刻みは可逆性の低い金属器を成形する上での技法上の工夫であったと考えられている[16]。陶磁器には製作上の必要性がなく，したがって盛・中唐代の陶磁器につく輪花意匠は金属器模倣である事を意味していた。このため日常の器から派生した椀Ⅲには，基本的には輪花がついていなかった。

しかし，晩唐から五代にかけて青磁は椀全体，とくに晩唐の主流器形であった椀ⅢとⅣ・Ⅴの特徴が収斂していく。この過程で元の意味が忘れられ，輪花椀ⅢBRが作られるようになったと推測される。

椀Ⅳ・Ⅴ（図 11）

椀Ⅲから輪花意匠のつく椀ⅢBRが分派する背景には，金属器写の椀Ⅳ・Ⅴの影響が考えられるが，さらにその背景には素材を越えた唐代容器の共通性，金属器を範とした類似デザインの流行があったと推定される。このデザインの類似性は中・晩唐代の磁器では輪花意匠の形をとって椀，皿，杯，高足杯，托，水注，壺などに現れた。

椀Ⅳ・Ⅴは，口縁部の残る資料の多くが輪花意匠をもち，高台も金属器と同じ輪高台を基本としている。椀Ⅳの成立はおそらく盛唐で，体部形態の類似性から初期のモデルは金属器の有蓋椀であると想定されるが，９世紀前葉には輪花意匠をもつ椀が主流となる。日本・中国ともに出土数が少ないため成立時期については将来の課題であるが，その中からより「花」の意匠が強くなった椀Ⅴや京都では出土例が無いが海棠型の椀・杯などが作られるようになったのではなかろうか。これら金属器写しの椀の京都での確実な初現は2B段階で，右京三

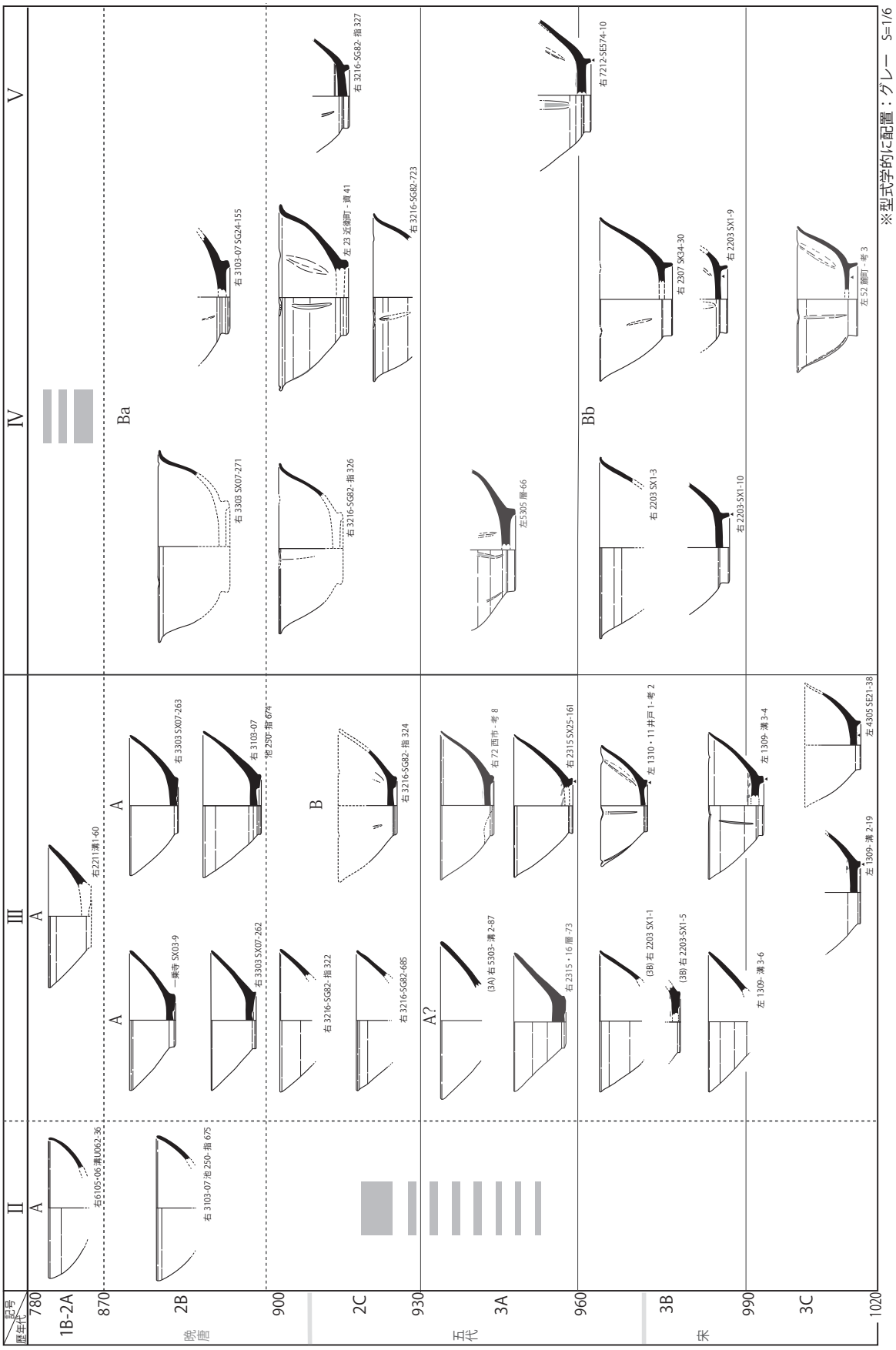


図11　越州窯青磁椀の変化と廃棄年代

条三坊跡SX07から椀Ⅳ Baが７点出土している。体部が角をなす椀Ⅴ Baは２C段階からみえる。ただし，１C段階（810-840年頃）の土師器に共伴する猿投窯産の緑釉陶器に椀Ⅳを模倣した輪花椀がある事から金属器写しの系統も９世紀の初頭に輸入されていたと推測される。

これらの系統は3A段階の良好な資料が無く詳細を追えていないが，10世紀初頭までは調整が簡略化する方向で型式変化し，五代後半に，京都では10世紀中頃以降出土する高台が細くてやや高く体部が緩い弧を描く椀（Ⅳ Bb）に変化する。現時点では２つの金属器写し系椀Ⅳ・Ⅴが収斂されたものと推測しており[17]，時代が降るにつれて形態の特徴である強い腰の張り，角張った器形といった要素が薄れ，体部の弧は緩くなり口縁部の外反も弱くなる傾向にある。また図11にみえるように10世紀後半以降の出土資料は，椀ⅢBと椀Ⅳ Bbの形態が近似する。蛇の目高台系の椀Ⅲと金属器写し系の椀Ⅳ・Ⅴの特徴もまた収斂したと考えており，生産の縮小が予想される。この後10世紀末から11世紀の初頭に出土する椀・皿は，細い輪高台が主流で斜め方向に踏ん張るものが多くなりメアトは高台内面につく。

白磁（図12）

白磁の椀Ⅲは型式変化が不明瞭である。亀井氏の指摘どおり[18]，大局的にみれば蛇の目高台が輪高台化する点は青磁と同様の変化であるが，青磁のように形態全体が変化するわけではない。時代が降るとやや調整が簡易になるも明瞭な変化ではなく，高台幅を確認しなければA・Bの区別がつかない。ここでは底径に対する高台幅が20％未満になれば一応輪高台と考えているが，初現期の2B段階（870-900年頃）にすでに椀ⅢBがあり，逆に３A段階にも椀ⅢAは出土する。３B段階の資料で区別のつかないものがある事から，100年以上も型式変化が不明瞭な状態が続く。

これには２つの原因が考えられる。1つめは生産地中国に型式変化を留めるなんらかの規制が働いていた事，２つめは日本側の事情で古い形のものを好んで輸入していた，あるいは昔手に入れたものを長く持っていた事で，この２つの要因によって京都出土の白磁椀Ⅲはこのような特異な見え方をしていると予想している。前者は椀Ⅲの本質と唐代容器の特徴を考える上で重要なため項を改めて詳述する。

この他の変化には，少量だが２C段階に典型的な邢州・定窯系の白磁ではない玉縁の幅がやや大きい椀Ⅲが現れる事が挙げられる。白磁椀は10世紀後半になると，邢州・定窯系の白磁ではなく精製品で産地が未確定のものが主となり，型式変化が追えなくなる。11世紀以降に続く玉縁状口縁と直口口縁の形態が椀Ⅱになるのは，邢州・定窯系ではなく産地が地方窯になったことに起因する可能性があり，生産地中国の研究進展を待ちたい。

金属器写しの椀Ⅳ・Ⅴ・Ⅵは型式変化が追える程の量がまだない。しかし白磁にも大きな系統として金属器写しの輪花椀が存在する事は注目に値する。中国でやや遅れて成立するためか，京都に多量にもたらされた時期が遅れるためかは不明であるが，白磁は青磁に比べ椀Ⅴが多い。また全体的

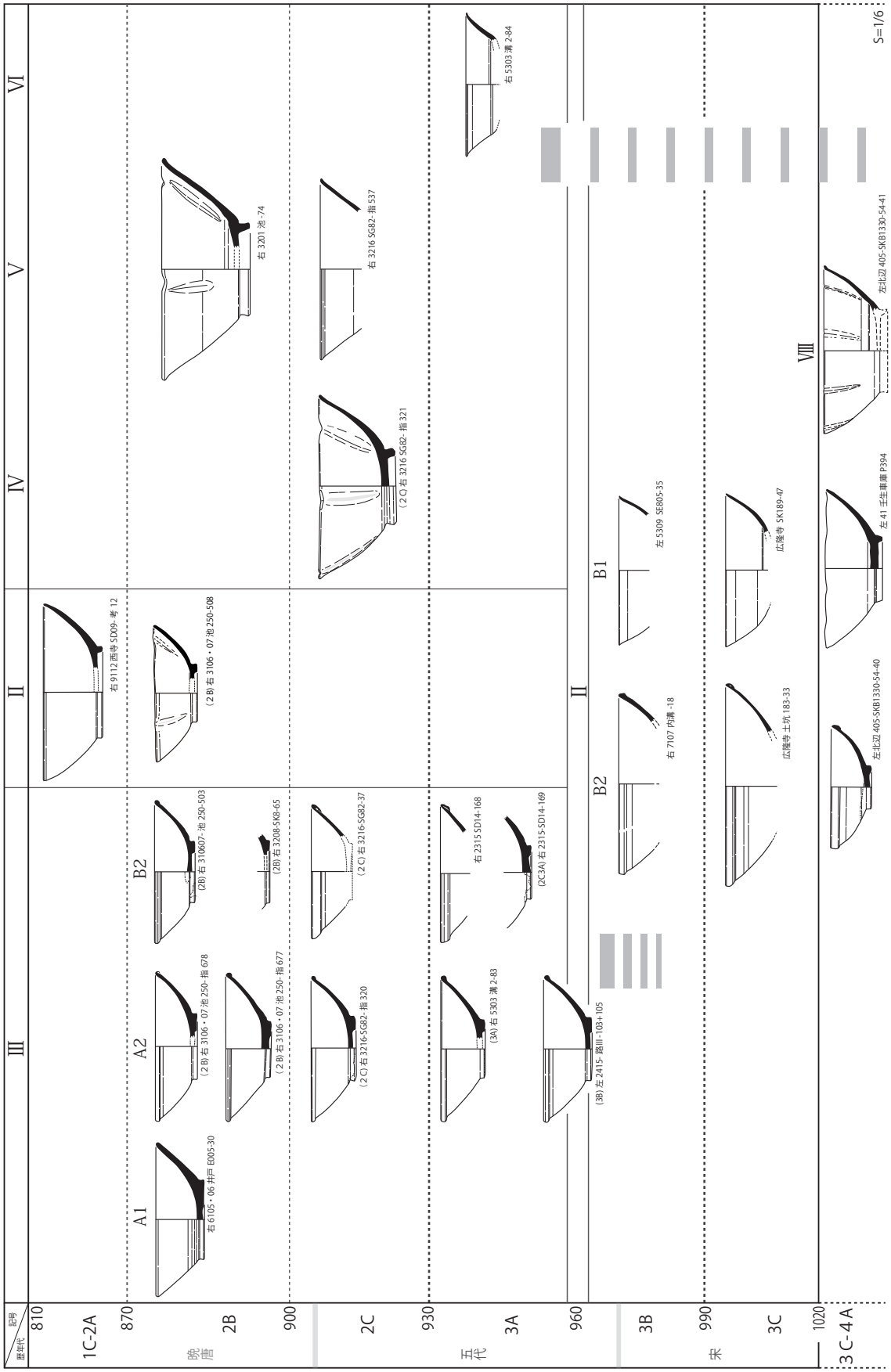


図12　白磁椀の変化と廃棄年代

に時期が降ると薄手化し，やや外反気味で細い口縁端部形状になる。Ⅴは法量の縮小傾向がみえる。

小結

以上，青磁・白磁を中心に京都出土資料を各要素に分けて整理した。では実際の遺構からどのような共伴関係で出土するのか例示し，京都出土資料についてのまとめとしよう。

図13は2B段階の遺構，右京三条三坊三町跡ＳＸ０７出土の中国産磁器と緑釉陶器の一部を抜粋したものである。青磁には椀が多く，特に椀Ⅲが目立つが輪花意匠の器形も少量含まれる。

生産地中国の様相については次に詳述するが，椀Ⅲと金属器写しの椀Ⅳ・Ⅴは中・晩唐代に成立した椀の２大系統であり，青磁・白磁とも大きくみれば形態・意匠に共通性がある。当該期の輸入陶磁器は椀Ⅲが量的に目立つ存在だが，青磁を模倣した精製品の緑釉陶器を生産した猿投窯の初期製品には椀Ⅳを写した器形が多い。初期の優品が出土した右京三条三坊五町跡ＳＤ19や冷然院跡（１Ｃ段階）出土の陰刻花文の椀は，調整・釉調とも別格といえる丁寧な作りである[19]。また，東海の緑釉陶器・灰釉陶器で10世紀以降主流となっていく深椀は，本稿でいう椀ⅣBbをモデルにしている[20]。

９世紀代の青磁精製品の椀Ⅲ・Ⅳはいずれも体部外面を丁寧に削り，椀Ⅳは内面の丁寧な調整で深い腰の丸みを作りだしている。両者を比べると，法量が大きい事もあり，後者の方が調整が丁寧で釉調も美しいものが多い。この両者の質の差，もう少し

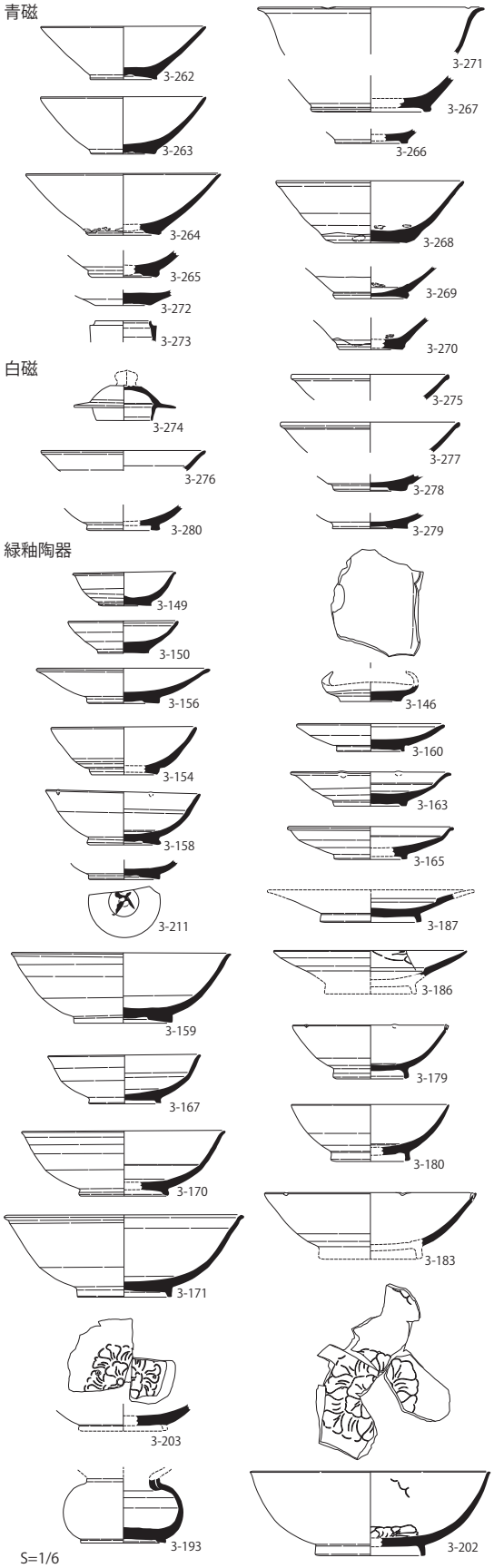


図13　右京三条三坊三町跡ＳＸ07出土
中国産磁器・緑釉陶器（報右3303より抜粋）

踏み込めば唐代文化の中での価値の差は，反比例の関係で出土量の差となってあらわれている。緑釉陶器の優品を生産している猿投窯が金属器写し系の青磁椀の動きに敏感であるのは必然といえよう。

土師器を除く平安時代前・中期の供膳具の様相は輸入陶磁器のみならず緑釉陶器，灰釉陶器，須恵器，黒色土器などを構成要素としているが，京都で出土する青磁・白磁が，盛唐の容器様相中の西域器物写しのような異国情緒を感じさせないのは，唐文化への憧れによって成立した日本の器種・器形と輸入陶磁器の選択的受容によって，平安時代前期の土器様相が東アジア文化共通の雰囲気をもっていたからではなかろうか。そのあたりの背景を探るため，次に同時代の中国の様相についてみてみよう。

3　唐・五代の中国産磁器の様相

中・晩唐に活躍した陸羽の『茶経』「四之器」[21]には，陶磁器生産地として越州，鼎州，婺州，岳州，寿州，洪州，邢州の名が挙がる。これらのうち鼎州窯を除く各窯はそれぞれ比定される窯址が発見されており，中国考古学の進展にともなって製品の内容がわかるようになった。

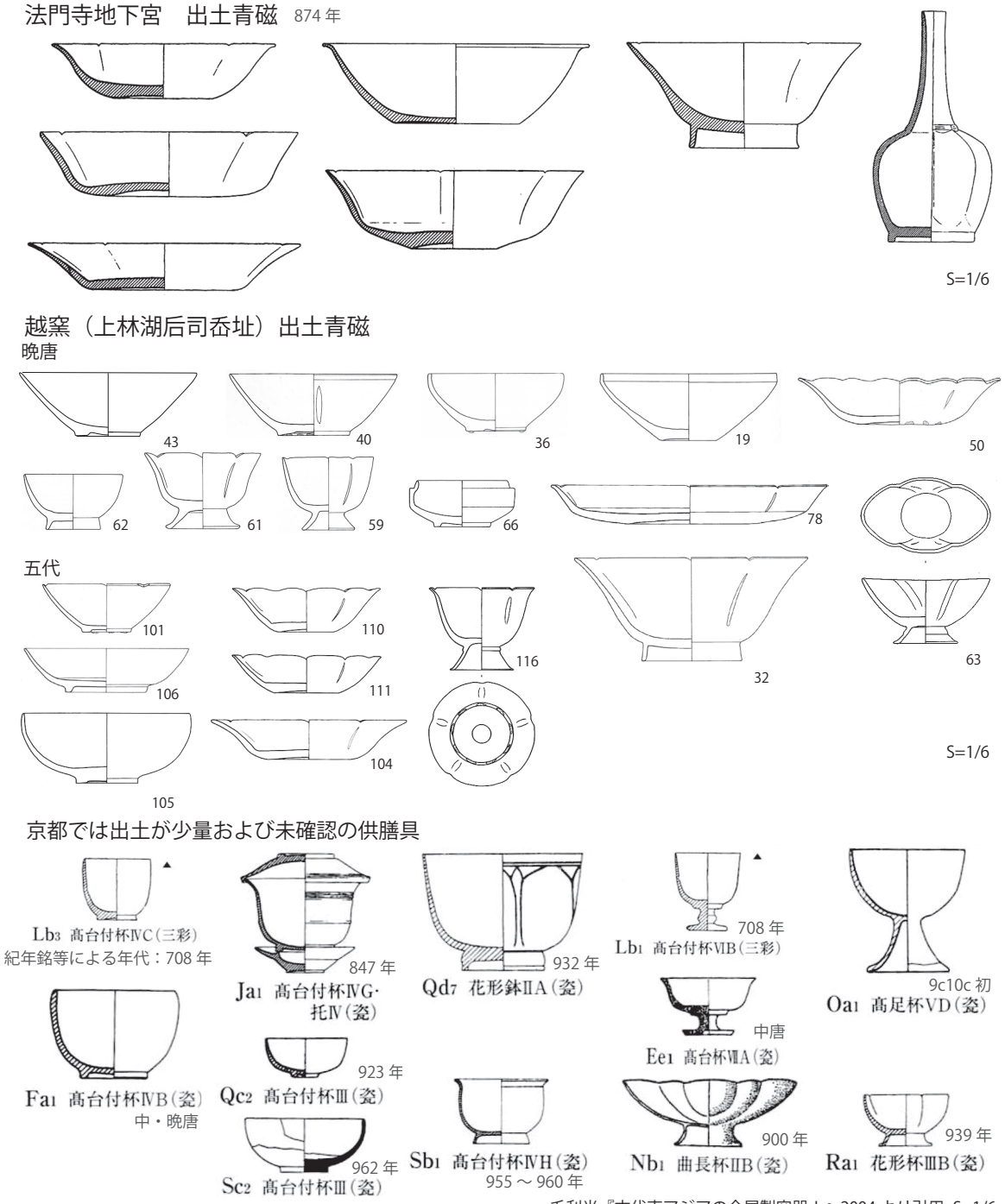
「中晩唐の中国陶磁」については今井敦氏による的確な論考[22]があり，この時期に中国の南北各地に数多くの窯が興った事，中晩唐の間に邢州窯の白磁，越州窯の青磁が，宋磁に直接連なる新たな表現内容をもった様式として完成された事，この２窯を除く茶経に記された唐代の窯は黄色味の強い青磁を焼いており唐代末には廃れていった事，などの重要な指摘が述べられている。

中国の出土資料で特に重要なものには「秘色」青磁の美しさを世間に知らしめた法門寺地下宮出土資料や越州窯出土資料（図14）[23]，邢州窯出土資料[24]などのほか紀年銘のある墓誌と共に墓から出土した陶磁器があり，記録を残すような階級の人々が各時代にどのような器を使っていたかが明らかになっている。

古代東アジアの容器の全様については毛利光俊彦氏による優れた研究[25]があり，中国編は殷周から五代・十国まで，金属器を中心として体系的にまとめられているため，隋・唐代がどのような連続性の中にあったかを知る事ができる。この論考では陶・瓷器が金属器を考察する補助として使われており，視点を変えれば陶・瓷器と金属製容器の相補関係は漢代に遡り，瓷器が誕生した頃から成り立っていたと言える。

これらの先行研究から，初唐から盛唐の器は南朝・隋以来の伝統的な形態と構成を基本的には踏襲していた事がわかる。盛唐までの紀年銘墓には本稿で椀Ⅰとした筒型の椀（盞）が副葬されている事が多い[26]。

椀Ⅰは日本では出土量が限られるため印象が薄いが，唐代の中国においては最も日常的な器であり，副葬品としても多様された伝統的な供膳具である。数が多いため形態・変化も多様で，高台形状は平高台と輪高台があり，托を伴う事もある（図14-Ja_1）。また，椀Ⅰとは別に初唐には器高に比して口径の大きい椀が知られる[27]。このような日常的な供膳具の流れを組んで盛唐末から中唐にかけて蛇の目高台椀のⅡ



毛利光『古代東アジアの金属製容器Ⅰ』2004 より引用　S=1/6

出典

Lb　河南李帰厚墓　『偃師杏園唐墓』中国社会科学院考古研究所 2001（『中国田野考古報告集』考古学専刊　丁種第 64 号）

Fa　陝西青竜寺　翟春玲　王長啓「青龍寺遺跡出土“盈”字款珍貴白瓷器」『考古與文物』1997-6　西安市文物保護考古研究所 1997

Ja　河南穆峵墓　『偃師杏園唐墓』中国社会科学院考古研究所 2001（『中国田野考古報告集』考古学専刊　丁種第 64 号）

Qc　河北王処直墓　「河北曲陽五代壁画墓発掘簡報」『文物』1996-9　河北省文物研究所　保定市文物管理處　曲陽県文物管理所 1996

Sc　江蘇李璟陵　『南京二陵』南京博物院 1957

Qd　福建王審知墓「唐末五代閩王王審知夫婦墓清理簡報」『文物』1991-5　福建省博物館　福州市文物管理委員会　1991

Sb　河南洛陽王墓　「洛陽発現一座后周墓」『文物』1995-8　洛陽市文物工作隊 1995

Ee　河北邢窯　「河北省内丘県邢窯調査簡報」『文物』1987-9　内丘県文物保管所 1987

Nb　浙江省銭寛墓「浙江臨安晚唐銭寛墓出土天文圖及“官”字款白瓷」『文物』1979-12　浙江省博物館　杭州市文官会 1979

Oa　江蘇鎮江　「江蘇鎮江唐墓」『考古』1985-2　鎮江市博物館 1985

Ra　浙江康陵　「浙江臨安五代呉越国安康陵発掘簡報」『文物』2000-1　杭州市文物考古所　臨安市文物館 2000

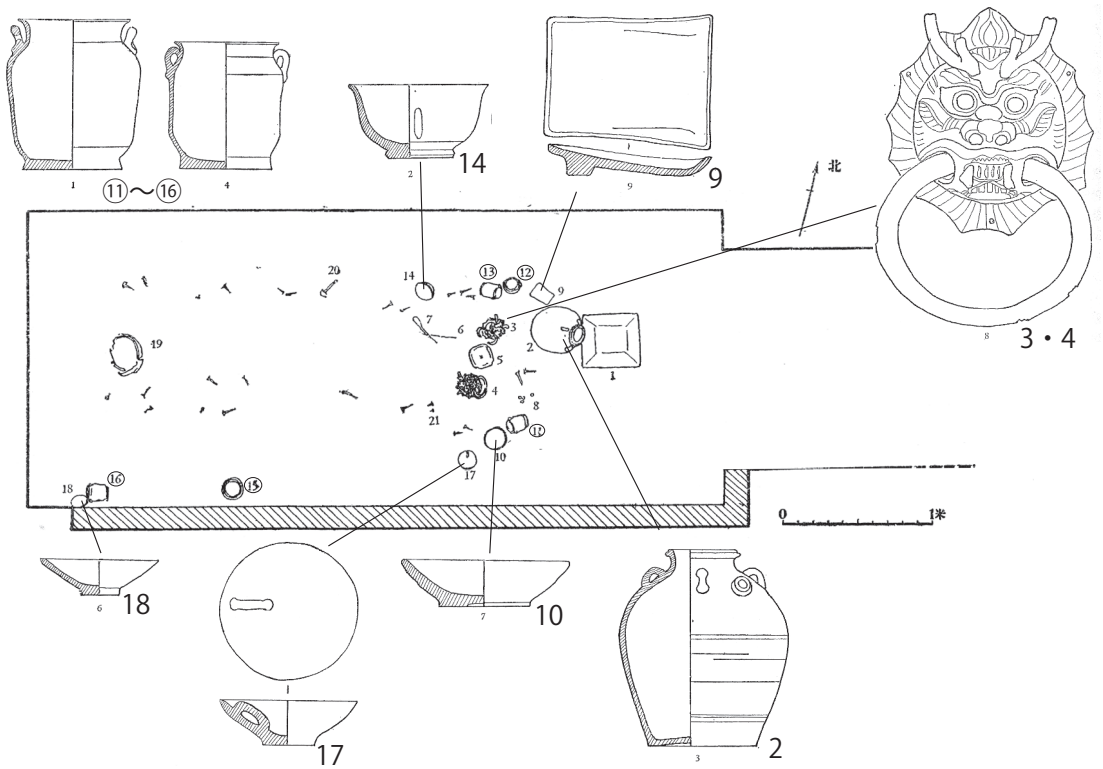
図14　中国出土　唐・五代の青磁・白磁

Ａ・ⅢＡは成立したと推測される。ただし，蛇の目高台は中・晩唐のみ盛行した特異な高台形状であり，この椀の普及には喫茶の流行と習慣化を含めた生活様式の変化があったと考えられよう[28]。喫茶が南から北へ広がったのも盛唐の頃と考えられている[29]。

一方，椀Ⅳ・Ⅴは形態の特徴から盛・中唐の金属器を写したものである事は明らかである。磁器が手本とした金属器の１つに華麗な花文をもつ鍍金銀器があり，輪花はその特徴として写されたものだった。初期の金属器写しの青磁輪花椀には陰刻花文のあるものがあり,その影響下でつくられた９世紀代の日本の緑釉陶器もまた陰刻花文をもつ[30]。初め輪花と陰刻花文は鍍金銀器の特徴を表現する意匠として一揃えであったが，写されて間もなくそれぞれ独立した付加価値となっていく。金属器の模倣から始まった形態とデザインは陶磁器のもつ特性と制作技術の中でやがて再構築され中唐の器形に大きな影響を与えた[31]。この中で輪花は晩唐には意匠の主流となって椀，皿，杯，高足杯，托，水注，壺などに付加される。そしてその共通性は青磁・白磁を越えて確認されるのである。

晩唐の容器様相の中で重要な位置を占めた輪花意匠の器形は京都でも珍重され，数量は多くないが椀，皿，杯，托などが出土している（図５・９）。

ただし，中国で流行したものの中には管見におよぶ限り京都では出土が確認できないものがある。その代表例が輪花意匠の高足杯（図14の越窯59・61）や海棠型杯（図14の越窯63）である。高足杯は晩唐・五代の墓や層位的に発掘された都市遺跡と



図一　墓葬平面図

1.墓志 2.青瓷瓮 3、4.銅鋪首 5.銅镜 6.銅箸 7.銅匙 8.銅钱 9.陶砚 10.白瓷瓮 11—13、15、16.青瓷罐
14.青瓷碗 17青釉灯 18.青瓷小碗 19銅盆 20.铁棺钉 21.小铁棺钉

図15　湖南省益陽県鄧俊墓（763年）平面図と出土遺物（『考古』5　科学出版社1981より引用・改変）

して著名な和義路遺跡などから出土しており，越州窯跡からも多数出土する点から中国ではありふれた器形と評価できる。この祖形は盛唐に流行した西域器物模倣の高足杯（図14のLb_1）で，口径の小さいものは用途が酒器と推定されている[32]。

加えて京都で出土が少ない資料に先述の伝統的な供膳具である椀Ⅰがある。

図15は墓誌の内容から西暦763年埋葬と推定される湖南省益陽県鄧俊墓の出土遺物を平面図に配置したものである[33]。供膳具様相の過渡期にあたる時代の墓で，椀Ⅰのほか椀Ⅲの祖形が出土するが両者の出土位置には特に区別がみえない。

しかし会昌二年（842）の墓誌をもつ安徽巣湖市環城郷伍府墓（図16）[34]まで降ると様子が変化する。墓は盗掘を受けており副葬品は散乱していたようだが瓷器10点，陶器3点，石硯1点，銅銭63枚，鉄の灯盞1点が残っていた。墓は前室と短い羨道，玄室（后室）からなり，副葬品は原位置を失っているもののいくつかにまとまる。玄室には多く陶磁器が残されていた。中央付近の3点の長沙窯水注の（M2-9～11）の近くには蛇の目高台の白磁椀（M2-12，椀ⅢA2）3点が出土した。また前室か

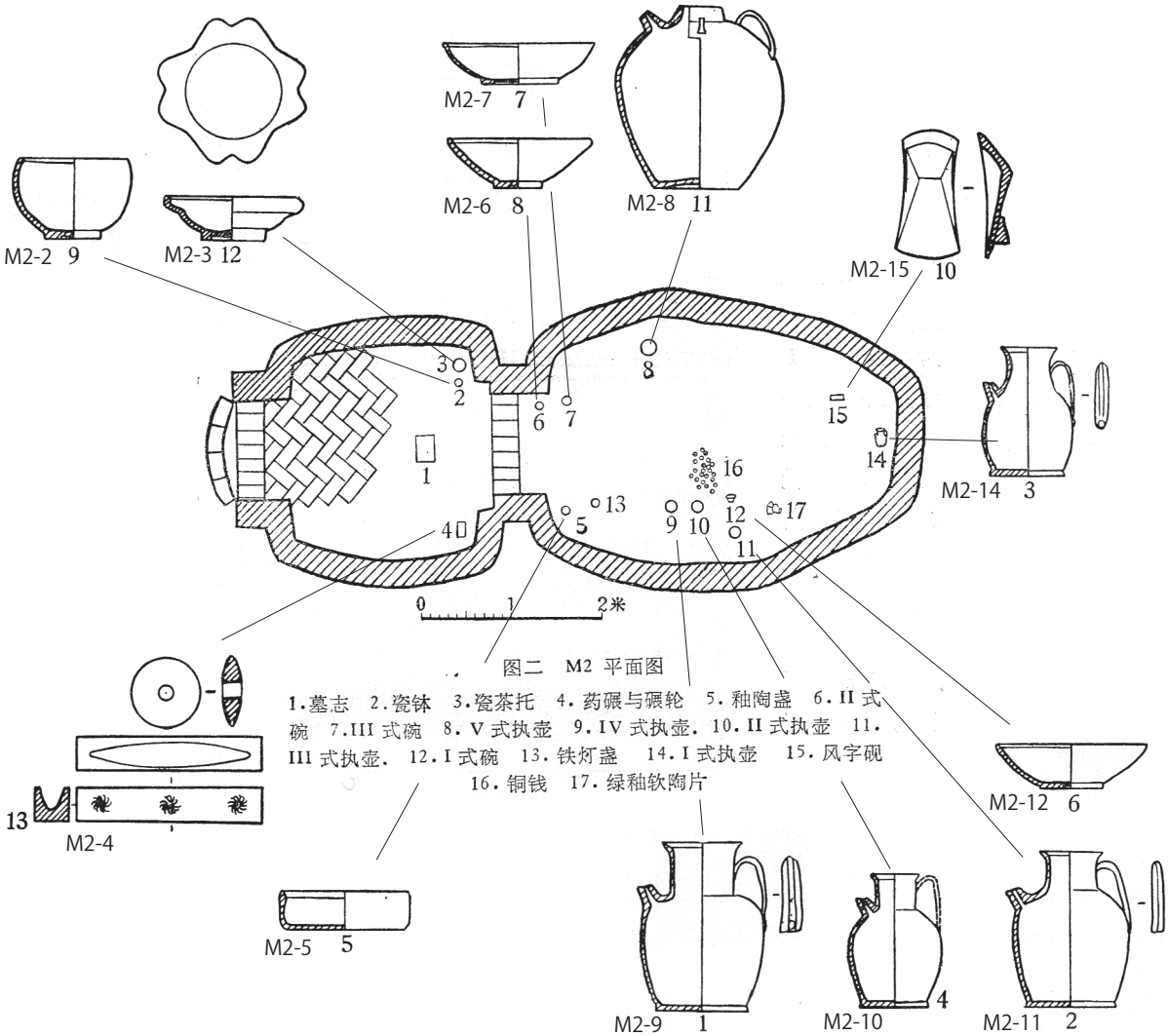


図16　安徽巣湖市環城郷伍府墓（842年）平面図と出土遺物　（『考古』6科学出版社1988より引用・改変）

らは黄釉磁丸椀（椀Ⅰ）と托が出土している。盗掘は受けているが，ある程度まとまりがみえる事から原位置からかけ離れているとは考えられず，前室にあった伝統的な丸椀・托，玄室にあった蛇の目高台椀と水注の組み合わせは葬送における役割が異なる可能性がある。

以上のように同時代中国の様相と比較すると京都で出土する器形の種類は限定的であり，改めてみると，京都では中国で出土例の多い明器・隋以来の伝統的な器形・酒器はほとんどなく，少量の仏具と多数を占める椀Ⅲ・鍍金銀器模倣の器形が目立つ。「唐物」の全てを選択なく受容・珍重したというよりは，京都側の「好み」がある程度反映されていたと考える方が自然ではなかろうか。

蛇の目高台椀と喫茶の流行

では京都で最も好まれたものは何か。それは全資料に対し43％[35]の割合を占める蛇の目高台系の椀Ⅲである。

青磁の蛇の目高台椀については，法門寺地下宮出土の同形状ガラス椀・托が，宮入口に立てられていた奉納台帳といえる石碑「監送真身使隨真身供養道具及恩賜金銀宝器衣物帳」に「瑠璃茶碗柘子一副」と書かれている事などを根拠に，用途は「茶碗」と推定される[36]。白磁についても同様で王莉英・穆青氏は「蛇の目高台の椀は茶の飲用器として唐代に広く流行し‘茶盞’と呼ばれた。食器の椀に比べ、茶盞は小ぶりで丁寧に作られ、器身は直線的に大きく開き口縁を大小さまざまな玉縁形に仕上げた例も多い」[37]と述べる。李肇の『国史補』には「内邱瓷甌，端渓紫硯，天下貴賤無く之を通用す」と記されており，唐代に内邱瓷甌－邢州窯産白磁椀の評判が高かった事が伺われる。

図17「唐人宮楽図」[38]は作者・制作年代ともに不詳であるが，描かれた女性の風俗

図17　唐人宮楽図（蔵：故宮博物院　ウィキペディア・コモンズよりパブリックドメインを使用）

から唐代の軸図と考えられている。絵の中で女性たちは机を囲み音楽を奏でながら卓上の食器類で飲食をする。卓中央には青磁大椀，それと高足の金属製容器がみえる。銘々の前には漆器，金属器，青磁椀があり，卓の左端には青磁の中椀もある。中央の大椀には柄杓が入っており，広口の青磁椀から小振りの青磁椀に移して飲んでいる物は「茶」であろう[39]。制作年代不詳ではあるが，唐代喫茶の風景を今に伝える絵画といえよう。また，女性の前に描かれた漆器と金属器の海棠型杯は良く似た意匠である。少なくともこの絵を見るかぎり，デザインが共通した食器は，同じ卓上で使用され，楽や喫茶の補助具として全体で一つの雰囲気を成立させている。唐代の瓷器はこのような文化行為が盛んに行われた時代に，実用的な器形と美しい釉薬を成立・発展させた器といえよう。そして宮廷でも嗜まれた「喫茶」はただの流行に留まらず，以後多様性を増しながら中国に根付いた。

椀Ⅲの法量と形態からみえるもの

中国・日本で流行した「茶碗」と比定される蛇の目高台椀（椀ⅢＡ）は，同時期の輪花椀などと比べると法量が小さく，青磁・白磁ともよく似た法量分布をしめす。本稿で扱う出土資料の口径は（精製品青磁・白磁の椀Ⅲ　図18）[40]，両者とも14.8cm付近に分布が集中した。この傾向は出土地域にかかわらず認められる。図19は9世紀代の輸入陶磁器と国産施釉陶器の法量を比較するため堀内明博氏が作成したもので[41]，資料として集められた輸入陶磁器は全国出土の蛇の目高台椀である。数値を見ると青磁・白磁とも口径15㎝・器高5㎝に分布が集中する。

この両データから推測されるのは，口径14.8～15.0㎝，器高5㎝が，青磁・白磁ともに，蛇の目高台椀の目指した基本的な法量という事，口径14.8㎝というのは，尺度を唐の小尺（1尺29.6㎝）とした時の5寸に当たる事から「茶椀」に必要な口径は5寸という事である。

この点については史料からも追認できる。『延喜式巻二十三民部省』[42]には尾張・長門の2国に対して国家に納めるべき緑釉陶器の品目・数量・規格を記した条項があり「茶碗」の記載がある（図20）。延喜式が編纂されはじめた延喜5年（905）には尾張・長門の二国での緑釉陶器生産はほぼ終焉している事から，この条項は『弘仁式』あるいは『貞観式』から引き継がれたと考えられている[43]。

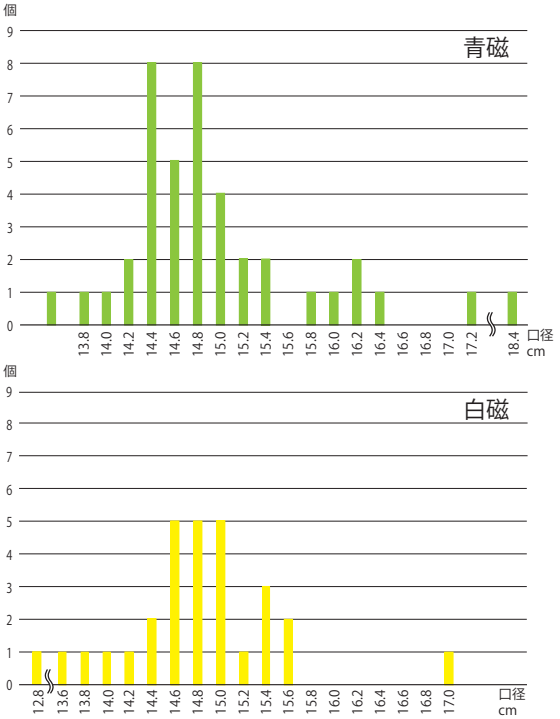


図18　青磁・白磁　椀Ⅲの口径分布

当該条文の内容は，

年料雑器

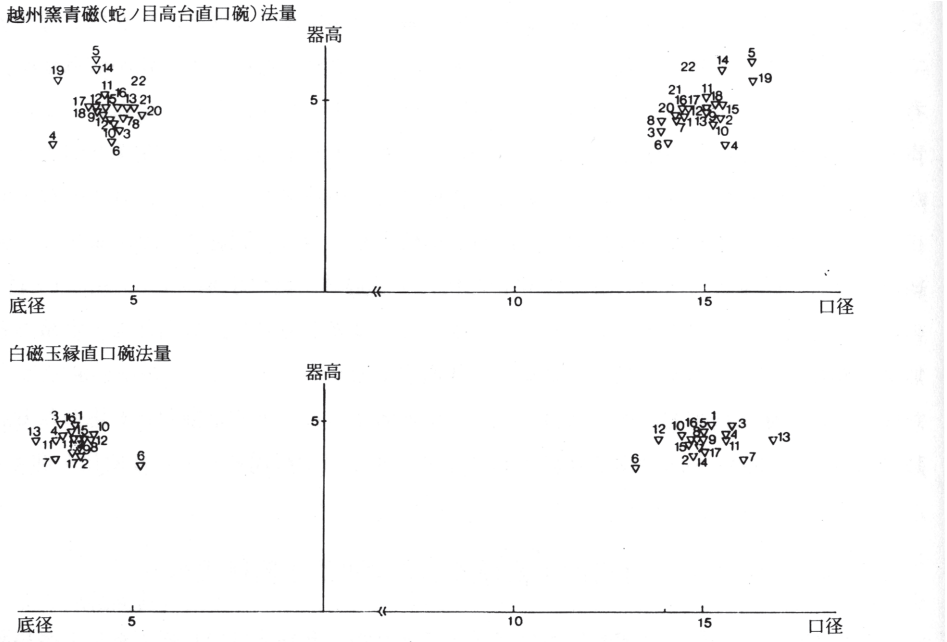
尾張国瓷器、大椀五合径各九寸五分中椀五口径各七寸小椀径各六寸茶碗廿口径各五寸盞五口径各四寸七分中擎子十口径各五寸小擎子五口径各四寸五分花盤十口径各五寸五分花形鹽杯十口径各三寸瓶十口大四口小六口

長門国瓷器、大椀五合径各九寸五分中椀十口径各七寸小椀十五口径各六寸茶碗廿口径各五寸花盤卅口径各五寸五分花形鹽杯十口径各三寸瓶十口大四口小六口

右両国所進年料雑器、並依前件，其用度皆用正税，

というもので，「茶碗」は納入数20口，口径は「5寸」と記される。

高橋照彦氏は口径5寸，約15㎝に一致する事から緑釉陶器の蛇の目高台椀を「茶碗」と比定した[44]が，青磁を模倣して生産



9世紀における白磁法量の変遷

越州窯青磁（蛇ノ目高台直口碗）法量一覧表

①深草古墓（火葬墓）	京都市伏見区深草
②右京三条二坊八町	京都市中京区西ノ京原町
③左京八条三坊七町	京都市下京区塩小路通新町東入
④長岡京右京四条四坊	京都府長岡京市長法寺芝端
⑤薬師寺西僧房	奈良市西ノ京
⑥東大寺	奈良市雑司町
⑦平城京東三坊大路東側溝	奈良市北新町
⑧平城京東三坊大路東側溝	奈良市北新町
⑨秋根遺跡	山口県下関市秋根
⑩秋根遺跡	山口県下関市秋根
⑪十郎川遺跡	福岡市西区十郎川団地
⑫多々良込田遺跡	福岡市博多区多の津
⑬多々良込田遺跡	福岡市博多区多の津
⑭多々良込田遺跡	福岡市博多区多の津
⑮大宰府学校院東南部	太宰府市大字観世音寺字学業院
⑯大宰府右郭六条二坊	太宰府市大字観世音寺字大楠
⑰観世音寺僧房	太宰府市大字観世音寺字山ノ井
⑱池ノ上墳墓群23号火葬墓	福岡県甘木市大字提字池ノ上
⑲西谷火葬墓第1号火葬墓	福岡県久留米市山本町
⑳下中杖遺跡	佐賀県神崎郡三国町大字豆田
㉑下中杖遺跡	佐賀県神崎郡三国町大字豆田
㉒鮑田国府跡	熊本県熊本市二本木

白磁玉縁直口碗法量一覧表

①西寺	京都市南区唐橋西寺町
②西寺	京都市南区唐橋西寺町
③西寺	京都市南区唐橋西寺町
④平安京右京六条二坊	京都市中京区壬生東高田町
⑤広隆寺	京都市右京区太秦東峰ノ岡町
⑥長岡京右京二条二坊	京都府長岡市今里
⑦延暦寺西塔地区	滋賀県大津市延暦寺
⑧薬師寺西僧房	奈良市西ノ京
⑨薬師寺西僧房	奈良市西ノ京（薬師寺蔵）
⑩中宮寺	奈良県生駒郡斑鳩町法隆寺
⑪多々良込田	福岡市東区多の津
⑫多々良込田	福岡市東区多の津
⑬大宰府観世音寺	太宰府市大字観世音寺字山ノ井
⑭大宰府右郭六条二坊	太宰府市大字観世音寺字大楠
⑮下中杖遺跡	佐賀県神崎郡三国町大字豆田
⑯下中杖遺跡	佐賀県神崎郡三国町大字豆田
⑰麦ノ浦遺跡	鹿児島県川内市高城町麦ノ浦

図19　9世紀における白磁法量の変遷

（「第1章　平安京の土器・陶磁器」『平安京出土土器の研究』図80より抜粋）

が始まった緑釉陶器の茶椀が「5寸」と決められているのは偶然のはずがなく，まさに「茶碗」の在り方を当時の人々が知っていたからと言えよう。

ところで，陸羽（733～803）が著した『茶経』は唐代喫茶流行の火付け役と評価され，同時代人である封演も『封氏聞見記』[45]に「楚人陸鴻漸為《茶論》、説茶之功效並煎茶炙茶之法、造茶具二十四事、以“都統籠”貯之。遠近傾慕、好事者家藏一副。有常伯熊者、又因鴻漸之論廣潤色之。於是茶道大行、王公朝士無不飲者。」と記すほどであった。

その『茶経』「四ノ器」には「風爐　筥　炭檛　火筴　鍑　交床　夾　紙囊　碾　羅合　則　水方　漉水囊　瓢　竹筴　鹺簋　塾盂　盌　畚　札　滌方　滓方　巾　具列　都籃」という24種の道具が挙げられ，本文には各道具の使い方，材質による良し悪しや寸法などが記載されている。陶磁研究でよく引用される「盌」の項は越州窯と他窯を比較した内容が特徴で，

「盌　盌は越州が上品。鼎州は次品。婺州は次品。岳州は次品。寿州・洪州は次品。ある人は邢州を越州の上に処くが、決してそうではない。もし邢州の磁器が銀に似ているとするならば、越州の磁器は玉に似ている。邢州のものが越州のものに及ばない第一点である。もし邢州の磁器が雪に似ているとするならば、越州の磁器は氷に似ている。邢州のものが越州のものに及ばない第二点である。邢州の磁器は白く、茶の色は丹い。越州の磁器は青く、茶の色は緑になる。邢州のものが越州のものに及ばない第三点である。晋の杜毓の「荈の賦」に、「器は択び陶は揀び、東甌より出づ」と謂っている。甌（甌は盌の意）とは越の事である。甌は越州が上品。口唇が巻らず、底が巻って浅く、半升以下しか受らない。越州の磁器、岳州の磁器はみな青い。青ければ茶がよく見え、茶は白紅色になる。邢州の磁器は白い。茶の色は紅くなる。寿州の磁器は黄色い。茶の色は紫になる。洪州の磁器は褐色、茶の色は黒くなる。すべて茶に宜しくない。」という内容となる[46]。様々な比喩で越州窯の優位性を説くが，形についてはわずかな記載しかない。「口唇が巻らず、底が巻って浅く、半升以下しか受らない」の部分である。甌を別の器形とする解釈もあるが[47]，道具をふく「巾」まで規定した陸羽が形態の差異を無視して複数器形をまとめて書くとは考え難く，ここでは布目潮渢氏の訳文のとおり「甌は盌の意」と読む。

質感や色については細かく記述するにも拘わらず，形と大きさについての記述がほとんど無いのは「口唇が巻らず」以外比較の必要が無かったためだろうか。他の器物では寸法の記載がある場合もあるが「盌」文中には口径の記載が無い。しかし「半升以下しか受らない」とは書かれている。厳密ではないが，椀を直径15㎝，高さ5㎝の円錐だと仮定すれば容量は0.294ℓであり唐代1升（0.6ℓ）の半分以下である。

また「盌」の次に記載のある「畚」は，椀入れの事で「畚は白蒲を（円形に）捲いて編み、盌十個を貯れる事ができる。或いは筥（丸籠）を用いる。紙包みの場合は剡紙で四角に袋型に縫い、これも十個入れである」とされる。10個をセットで「畚」に

器種	口径（cm）	尾張
大椀	九寸五分　（28.5）	5合
中椀	七寸　（21.0）	5口
小椀	六寸　（18.0）	X
茶椀	五寸　（15.0）	20口
盞	四寸七分　（14.1）	5口
中擎子	五寸　（15.0）	10口
小擎子	四寸五分　（13.5）	5口
花盤	五寸五分　（16.5）	10口
花形塩杯	三寸　（9.0）	10口
瓶	大	4口
瓶	小	6口
計		80＋X

延喜民部省式による尾張の
貢納品目と数量

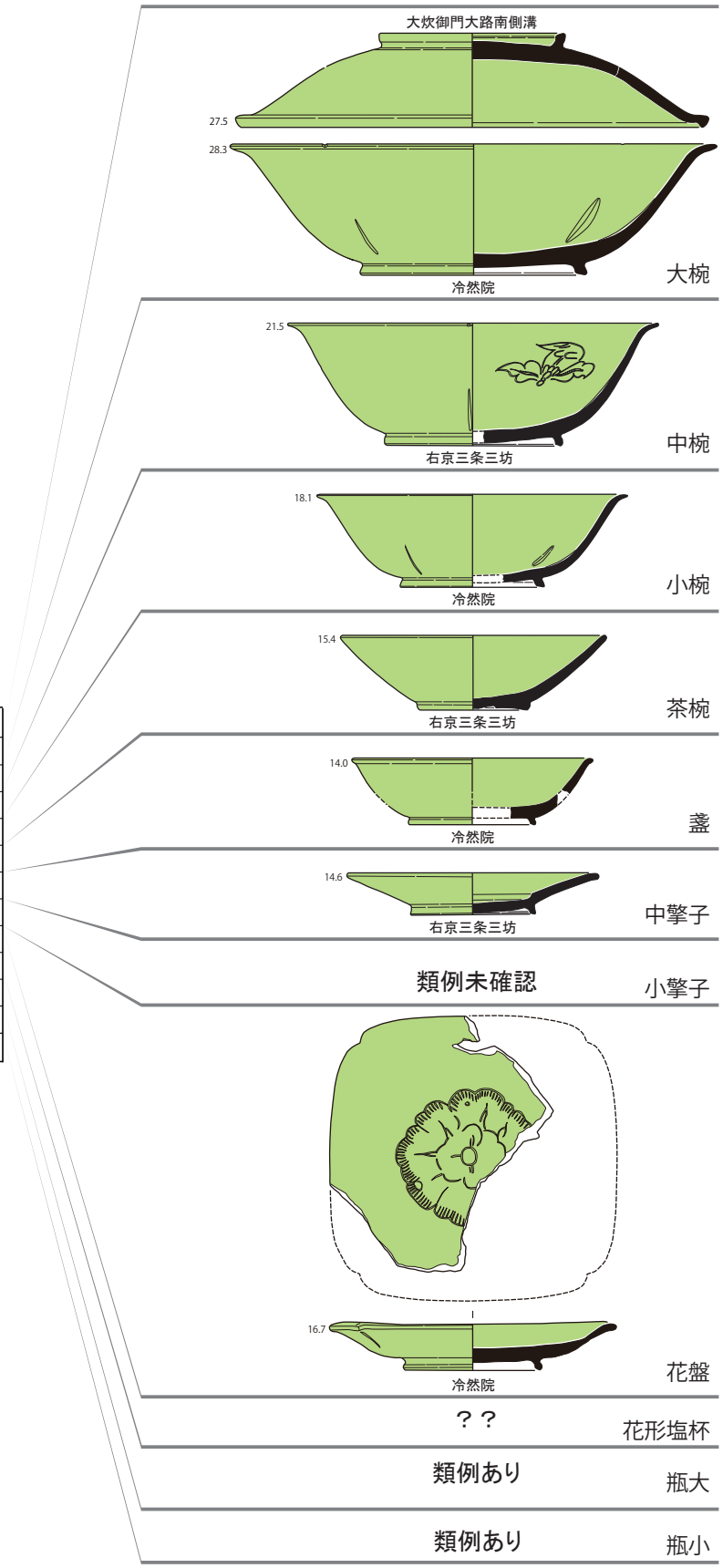


図20　延喜式民部省式に対応する平安時代初期猿投窯産緑釉陶器
（平成27年度京都市埋蔵文化財出土遺物文化財指定準備業務報告書より転載）

入れるならば重ねていたと推測され，大きさは同じと考える方が自然だろう。

他に「五之煮」には「およそ水一升を煮かし、五盌に酌み分ける〔盌数は少なくても三盌まで。多くても五盌まで。もし人数が多く十人になれば、風炉を二個に増やす。〕熱いうちにつづけて飲む（後略）」と記載があり，細かな決まりがあった事がわかる。この作法に則ってお茶を入れる風景を想像する時，使用する椀は同じ形で同じ大きさが望ましいように思う。

蛇足ながら延喜式の規定では緑釉陶器の「茶碗」は必要数20口，納入個数が10の単位であるのは『茶経』に基づいている可能性がある。

ここで書かれた「茶碗」は本稿の分類では椀ⅢAあるはⅡAである。そして，陸羽の『茶経』成書以後に形が定まったと推測される[48] 椀ⅢAは型式変化の速度が遅いという特徴がある。特に白磁は10世紀になっても高台幅が細くなりきらず形態も変化が少なく10世紀前半に廃棄されたものと9世紀代のものは混ざれば識別できない。口径も「5寸」を基準にほぼ一定である。青磁は高台形状が輪高台化するが一方でより古い特徴である直線的な体部の椀ⅢA系が在り続ける。青磁・白磁とも，法量が不定になった事が出土資料からみえるのは3B段階（10世紀後葉）である。以上の観点より少なくとも唐代の蛇の目高台椀には大きさや形に対するなんらかの制約があったと考えられる。

ところで，9世紀代に日本で「喫茶」を愛好した事で知られる人物と言えば嵯峨天皇とその周辺の人々である。この頃の記載としてよく知られるのは，唐からの帰国僧である永忠が近江梵釈寺付近で嵯峨天皇に茶を献じた『日本後期』弘仁6年（815）の記事[49]である。梵釈寺の所在地は滋賀県大津市志賀里付近の山中にあった崇福寺の近隣に比定され，当時は山岳寺院の趣を留めていたのであろう。陸羽は『茶経』「九之略」にて野寺山園での喫茶において省略できる器具を挙げており，想像を逞しくすれば，近江での茶はこの野寺山園での喫茶の趣が再現された可能性もある。

一方，布目氏は同「九之略」末文の「ただ城邑の中、王公の門、二十四器、一を闕けば、茶は廃す。」の結びから「「四之器」の茶器こそ陸羽茶道の眼目なのである。」と述べ「茶器の素材・寸法の指定は、これを循守して飲茶を行う事によって、陸羽の茶道が完成するよう考察されたものである。この点において、法門寺出土の皇帝用銀製茶器は基礎的に飲茶について『茶経』と同一機能をもちながら、陸羽茶道とは異なったものとする立場もはっきり認識しておかねばならない」と指摘する[50]。

この指摘は日本の「喫茶」にとっても重要で，「唐人宮楽図」の大椀から柄杓で汲み分けるような唐宮廷の茶は，野寺山園での「喫茶」を嗜んだ嵯峨天皇がもう一方で愛した唐風「喫茶」の在り方だったとも考えられよう。なぜなら青磁大椀写しの猿投窯産緑釉陶器が嵯峨上皇後院期の冷然院北築地内溝跡から出土しているのである（図20大椀）。

椀Ⅲは時期が下がるにつれて前節で記したように形態変化するが，9世紀の前葉から約200年間継続的に輸入された器であ

る。今回対象とした全資料に対する比は43％，日本においても平安時代前・中期の文化に「喫茶」が与えた影響は軽いものとは思えない。

茶椀が普及した背景に『茶経』の存在が伺える。機能は形態に制約を与え，用途は意匠の共通性を生み出す。晩唐代にあったであろう様々な「喫茶」の作法こそが，白磁椀Ⅲの型式変化を最小限に留めた力ではなかったか。また椀Ⅲに比べると数が少ないが，金属器写しの青磁が緑釉陶器に与えた影響は大きい。

4　まとめ

本稿では，最新の土師器編年による年代観という明確な手がかりをもとに，可能な限りの中国産陶磁資料を集成し，椀の型式変化と廃棄年代を明らかにすることができた。

また，年代別の分析には使用できないが，包含層出土資料や混入品についても分析の対象とした。これは，当該期の中国産陶磁器は生産地が限られていると言われ，釉調・胎土の特徴による抽出が可能なためである。これにより，11世紀以降に比べて年代観のわかる一括資料が少ないため全体像が明らかになりにくい９・10世紀の様相を捉えることができた。対象とした87件の調査には多量の中国産陶磁器を一括廃棄した遺構は無く，１点から数十点の出土遺物を集めた586点を基礎資料とした。結果的に，京内各所における約50年間の調査成果から集成した資料は統計学でいう無作為抽出のサンプルと評価でき，今後数が増加しても，大きな比率，例えば椀の圧倒的優勢，中でも椀Ⅲが多数を占める傾向に変化は無いと思える。

時期別の型式変化と数量，多様な器形種類と偏った割合がみえた事で，中国の様相との差異に気づき，唐代流行の中でも「喫茶」と鍍金銀器写しの器を好んだ京都の「憧れ」がみえた。

さらに圧倒的に多数を占める椀Ⅲの変化に注目すべき特徴がある事を見出しその背景として中国における喫茶文化の成立にきわめて強い影響をうけて起きた特異な動きがある事もまた明らかにできたのではないかと思う。

こうした動きはわが国での陶器生産において緑釉陶器の本格的生産にも影響を及ぼしている。嵯峨・淳和朝の緑釉陶器は金属器写しの青磁にも影響を受けており，当時の皇族や貴族階級の人々が喫茶を含む唐文化に強い憧れをもち，深い見識をもっていた事がわかる。

こうした分析は，土師器編年という安定した手がかりをもとに多量の中国産陶磁のみならず緑釉陶器・灰釉陶器といった他器種の高級食器についてもあわせて対象とする事ではじめて可能となるものであり，京都というフィールドでこそ明らかにできることではなかろうか。消費地視点からの陶磁器研究は少ない。われわれのフィールドには取り組むべき事がまだ沢山ある。そこに少しでも貢献できていければそれが本稿の意義である。

執筆にあたっては下記の方々にお世話になった。（敬称略，五十音順）
上村和直，大立目一，奥井智子，尾野善裕，児玉光代，近藤奈央，佐藤　隆，津田京美，西大篠哲，新田和央，平尾政幸，尾藤徳行，水橋公江，村野正景，吉川義彦，吉本健吾
特に新田氏，平尾氏，吉川氏には構想段階から相談にのって頂いた。分類構造の階層性については吉川氏と，具体的な階層・構造や陶磁器様相については平尾氏と議論を重ねた。また平尾氏と京都市埋蔵文化財研究所から図データを提供頂いた。末尾になりますが，記して感謝申し上げます。

註

1）横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について－型式分類と編年を中心として－」『九州歴史資料館研究論集』4，九州歴史資料館，1978年。

2）堀内明博「第１章　平安京の土器・陶磁器」『平安京出土土器の研究』古代学研究所研究報告第４集，財団法人古代学協会，1994年。

3）前川　要「平安時代における施釉陶磁器の様式論的研究―様式の形成とその歴史的背景―」『古代文化』第41巻第８・10号，1989年。

4）小森俊寛「輸入陶磁器と国産施釉陶器」古代の土器研究会第3回シンポジウム『古代の土器研究－律令的土器様式の西東３－』古代の土器研究会，1994年。

5）小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第３号，財団法人京都市埋蔵文化財研究所，1996年。

6）平尾政幸「土師器再考」『洛史』研究紀要第12号，公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所，2019年。

7）京都の土師器皿は，奈良時代から引き継いだ椀・杯・皿などの供膳具が10世紀を通して「皿」形化し，以後，政権・文化・社会の変化に関わらず使用され続けた特殊な土器である。1000年の連続性は京都の生活文化と密接な関わりがあり，形態が漸移的に変わるため年代の物差しとなるばかりでなく，新しい形態・系統の成立は生活様式の変化に関連していると考えられる。このため，本稿では輸入陶磁器の廃棄年代を決めるだけではなく，その背景にある時代のまとまりを含めた輸入陶磁器の整理・分類の軸としても土師器皿による時期区分を使用する。

8）本稿で使用する産地名称は広義のもので，厳密な産地については京都出土遺物から言及できるものではないため意見を持たず，研究史上の用語として便宜上必要な場合に名詞として使用する。

9）『灰方窯跡・灰方の塚跡・南春日町片山遺跡・勝持寺旧境内』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2010-8，財団法人京都市埋蔵文化財研究所，2010年。

10）毛利光俊彦『古代東アジアの金属製容器Ⅰ』奈良文化財研究所資料68，独立行政法人奈良文化財研究所，2004年。
今井敦『中国の陶磁』第４巻　青磁，平凡社，1997年。

11）例えば左京五条一坊十四町跡SD162から出土した青磁杯ⅡR。共伴土師器の年代観は3A段階最新相（口径分布では3Aだが形態に3Bの要素が見え始めている）で廃棄年代は10世紀の中頃である。この杯と型式学的な距離の近いものが大中七年（853）の紀年銘をもつ浙江省海寧市徐歩橋唐墓から出土している。中国陶瓷全集４『越窯』美乃美，1981年。

12）例えば鴻臚館跡ＳＫ56　福岡市『鴻臚館跡Ⅰ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第270集，福岡市教育委員会，1991年。

13）亀井明徳「唐代玉璧高台の出現と消滅時期の考察」『貿易陶磁研究』№13，貿易陶磁研究会，1993年。

14）森達也「唐代晩期越州窯青磁碗の二つの系譜－玉璧高台碗と輪高台碗―」『金大考古』第

34号，金沢大学考古学研究室，2000年。

15）『上林湖越窯』古陶磁学術研究基金会叢書　慈溪市博物館・謝純竜編，科学出版社，2002年。

16）王莉英・穆青著（富田哲雄訳）『定窯瓷』鑑賞と鑑定，中国名窯名瓷シリーズ6，二玄社，2009年。

17）器高差によりプロポーションの異なる同時期の個体がある事を考えると将来的に数量が増えれば細分も可能になるかもしれない。

18）前掲13）

19）平尾政幸「冷然院北内溝出土土器群の特質」『平成27年度　京都市埋蔵文化財出土遺物文化財指定準備業務報告書』平安京左京二条二坊「冷然（泉）院」出土品，京都市文化市民局，2016年。

20）尾野善裕「古代尾張における施釉陶器生産と歴史的背景」『新修名古屋市史』資料編　考古２，2013年。

21）『茶経』（758～761年間に成書。）　布目潮渢『茶経全訳注』　講談社学術文庫，2012年。

22）今井敦「中晩唐の中国陶磁」『東京国立博物館紀要』31，1996年。

23）『法门寺考古发掘报告』陝西省考古研究院，法门寺博物馆，宝鸡市文物局，扶风县博物馆著，文物出版社，2007年。
『秘色越器』上林湖后岙窑址出土唐五代秘色瓷器　浙江省文物考古研究所，慈溪市文物管理委員会办公室編著，文物出版社，2017年。

24）『唐磁』白磁・青磁・三彩，根津美術館，1988年／『初期白磁』常盤山文庫中国陶磁研究会会報7，2018年などに集成されている。

25）前掲10），『古代東アジアの金属製容器Ⅱ』奈良文化財研究所資料69，独立行政法人奈良文化財研究所，2005年。

26）前掲13），『初期白磁』常盤山文庫中国陶磁研究会会報7，2018年などに集成されている。

27）「広東電白唐代許夫人墓」（661年）の椀　広東省博物館　茂名市博物館　電白県博物館「広東電白唐代許夫人墓」『文物』1990-7，1990年などの出土例がある。

28）唐代の土器様相から生活様式の変化が推測できるほどの大きな変化が最初にみえるのは盛唐で，西域器物の模倣品が盛行したことを契機に伝統的な器形からの転換がおこった。中唐代には水注は実用的なデザインとなって椀Ⅲとともに副葬品に用いられる。卓上では食物残滓を入れたと推測される唾壺は9世紀代には液体を受ける形に変化した。初期白磁の変化をまとめた佐藤サアラ氏は初期白磁の流れから脱皮し実用的な器形が主流になる時期を8世紀中頃としている。佐藤サアラ「初期白磁―白磁の始まりとその展開」『初期白磁』常盤山文庫中国陶磁研究会会報7，2018年。

『古代東アジアの金属製容器Ⅰ』より引用

29）岡崎敬「隋・唐の文化と陶磁」『世界陶磁全集11　隋・唐』小学館，1976年。

30）平尾政幸「緑釉陶器の変質と波及」古代の土器研究会第３回シンポジウム『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東　施釉陶器－』古代土器研究会，1994年。

31）張東「唐代金銀器対陶瓷造型影響問題的再思考」『上海博物館集刊』第8期，上海書画出版，2000年。

32）前掲10）毛利光文献。

33）益陽県文化館「湖南省益陽県鄧俊墓」『考古』５　1981-4，科学出版社，1981年。

34）巣湖地区文物管理所「安徽巣湖市環城郷伍府墓」『考古』1988-6，1988年。

35）粗製品青磁椀ⅢＣは精製品の代用品と考えているため数に含めた。精製品青磁椀Ⅲ，粗製品青磁椀Ⅲ，白磁椀Ⅲ　計249点/586点。

36）高橋忠彦「唐代の喫茶と法門寺出土の茶具」『中国の正倉院　法門寺地下宮殿の秘宝「皇帝からの贈り物」』展図録，新潟県立近代美術館ほか，1999年。
37）前掲16）
38）国立故宮博物院蔵　国立故宮博物院ＨＰ「國寶的形成」展示解説によれば落款は無いが絵と描かれた風俗などから唐代中晩期の屏風絵が掛け軸になったものと考えらえている。
39）前掲38）解説も喫茶としている。
40）椀ⅢＢＲ，ⅢＢbは「茶碗」ではない可能性もあるため計測から外した。
41）前掲2）
42）国史大系編集会『新訂増補　国史大系　延喜式　中篇』吉川弘文館，1972年。
43）平尾政幸「平安時代の緑釉陶器生産に関するいくつかの問題」『古代の土器研究会　平安時代の緑釉陶器－生産地の様相を中心に－』古代の土器研究会，2003年。
44）高橋照彦「平安初期における鉛釉陶器生産の変質」『史林』第77巻6号，史学研究会，1994年。
45）『封氏聞見記』巻六生活・遊戯の33飲茶
46）前掲21）『茶経』訳文は全て布目潮渢氏の訳を引用。
47）水上和則『茶文化史にそった中国茶碗の考古学』勉誠出版，2009年。
48）蛇の目高台の椀は椀ⅡＡ・ⅢＡで，椀ⅡＡは長沙・越州窯青磁に，椀ⅢＡは越州窯青磁，邢・定窯白磁にある。椀ⅢＡは中国の紀年銘資料から類推すると8世紀の第４四半期頃に形態が安定したと思われる。水上氏は前掲47）で『茶経』が広く普及したのは印刷技術の発明と関係があるとみており興味深い指摘である。
49）国史大系編集会『新訂増補　国史大系　日本後紀』吉川弘文館，1972年。
50）前掲21）

図の引用文献（京都市内の報告書を除く）

図５：法門寺地下宮：註23）
鴻臚館跡ⅡSK03：山崎純男『鴻臚館跡Ⅱ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第315集，福岡市教育委員会，1992年。
図８：鴻臚館ＳＫ80-11　福岡市『鴻臚館跡Ⅰ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第270集，福岡市教育委員会，1991年。
図９：鄭州市文物工作隊「鄭州地区発現的幾座唐墓」『文物』1995-５，1995年。
図10：五代呉越国康陵：杭州市文物考古所，臨安市文物館「浙江臨安五代呉越国康陵発掘簡報」『文物』2002-2。
遼韓佚墓：北京市文物考古隊「遼韓佚墓発掘報告」『考古学報』1984-3。
陳国公主墓：内蒙古自治区文物考古研究所　哲里木盟博物館『陳国公主墓』文物出版社，1993年。
内蒙古通遼県二林場遼墓：朝陽地区博物館「遼寧朝陽姑営子遼耿氏墓発掘報告」『考古学集刊』３　中国社会科学出版社，1983年。
図13：『平安京右京三条三坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第10冊，財団法人京都市埋蔵文化財研究所，1990年。
図14：越窯（上林湖）：註22）
法門寺地下宮：註21）
他：註32）引用文献は図中に記載。
図15：註33）
図16：註34）
図20：『平成27年度　京都市埋蔵文化財出土遺物文化財指定準備業務報告書』平安京左京二条二坊「冷然（泉）院」出土品　京都市文化市民局，2016年。

赤松（あかまつ）　佳奈（かな）（文化財保護課　文化財保護技師（埋蔵文化財担当））

表４　出土資料一覧表（１）

青磁

№	遺跡名	出土地点	掲載番号	器形	分類	備考	口径	時期	報告書索引	調査記号等
1	右京三条一坊三町（右京職）跡	SX283	図 15-91	椀	Ⅰ？	細片	—		右 3103a	
2	右京三条二坊八町跡	層　2-2	未 84	椀	Ⅰ	細片	—	2B	右 3208a	HKRI
3	右京六条一坊五・六町跡	層	図 34-37	椀	Ⅰ		—		右 6105	HKXF002
4	右京六条一坊十一・十四町跡	層	未報告　P 7	椀	Ⅰ？	細片	—		右 6111b	XF0 1 1
5	右京五条三坊二町跡	SD1	図 48-47	椀	Ⅱ		17	1B	右 5302	HKQG
6	右京三条二坊八町跡	層	平尾 12	椀	Ⅱ		16.2		右 3208b	HKRP
7	右京三条一坊六・七町	池 250	図版 48-498	椀	Ⅱ		15		右 3106a	百花亭
8	右京六条一坊五・六町跡	溝 U062	図 34-36	椀	Ⅱ	細片	14.6	1C	右 6105	HKXF002
9	平安宮　中和院跡	層	図版 2-7	椀	ⅢR	細片	15	2C	宮 a	
10	平安宮跡内裏蘭林坊跡		第 25 図 -3	椀	Ⅲ 1	細片 n	—		宮 b	
11	左京一条三坊九町（土御門烏丸内裏）跡	溝 2	第 39 図 -19	椀	Ⅲ B	n	—		左 1309	KBS 京都
12	左京一条三坊九町（土御門烏丸内裏）跡	溝 3	第 40 図 -4	椀	Ⅲ B1R	n	15		左 1309	KBS 京都
13	左京一条三坊九町（土御門烏丸内裏）跡	溝 3	第 40 図 -5	椀	Ⅲ 1R	n	14.8		左 1309	KBS 京都
14	左京一条三坊九町（土御門烏丸内裏）跡	溝 3	第 40 図 -6	椀	Ⅲ 1		14.8		左 1309	KBS 京都
15	左京一条三坊九町（土御門烏丸内裏）跡	溝 3	第 40 図 -7	椀	Ⅲ 1		14.2		左 1309	KBS 京都
16	左京一条三坊十・十一町跡	立 17- 井戸 1	考古資料館　2	椀	Ⅲ B1R	n		3C	左 1310	烏丸線Ⅲ
17	左京二条四坊十五町跡・東京極大路	路面Ⅲ	図 21-106	椀	Ⅲ B	n		3BC	左 2415	
18	左京三条三坊十二町跡	灰色粘質土	第 8 図 -10	椀	Ⅲ BR	n	底部		左 3312	三条西殿跡
19	左京三条三坊十二町跡	灰色粘質土	第 8 図 -11	椀	Ⅲ BR	n	底部		左 3312	三条西殿跡
20	左京四条一坊跡	層	考古資料館　4	椀	Ⅲ A1		14.8		左 41XX	中・壬生朱雀町
21	左京四条二坊十四町跡	SE3444	図 50-58	椀	Ⅲ 1		—	2C	左 4214	
22	左京四条二坊十四町跡	SD3330	図 52-116	椀	Ⅲ 1		—	3A	左 4214	
23	左京四条二坊十四町跡	層　未報告	15	椀	Ⅲ 1				左 4214	
24	左京四条二坊十四町跡	層　未報告	16	椀	Ⅲ 1				左 4214	
25	左京四条二坊十四町跡	層　未報告	17	椀	Ⅲ 1				左 4214	
26	左京四条二坊十四町跡	層　未報告	18	椀	Ⅲ 1				左 4214	
27	左京四条二坊十四町跡	層　未報告	19	椀	Ⅲ 1				左 4214	
28	左京四条二坊十四町跡	層　未報告	20	椀	Ⅲ 1				左 4214	
29	左京四条二坊十四町跡	層　未報告	22	椀	Ⅲ 1R	n	直椀		左 4214	
30	左京四条二坊十四町跡	層　未報告	32	椀	Ⅲ A				左 4214	
31	左京四条二坊十四町跡	層　未報告	33	椀	Ⅲ A				左 4214	
32	左京四条二坊十四町跡	層　未報告	34	椀	Ⅲ A				左 4214	
33	左京四条二坊十四町跡	層　未報告	35	椀	Ⅲ B				左 4214	
34	左京四条二坊十四町跡	層　未報告	36	椀	Ⅲ B				左 4214	
35	左京四条二坊十四町跡	層　未報告	41	椀	Ⅲ B				左 4214	
36	左京四条三坊五町跡	ＳＥ 21	38	椀	Ⅲ B	n	底部	３Ｃ	左 4305	
37	左京五条三坊十一町跡	SD17　混入	図 11-78	椀	Ⅲ A		底部	4A	左 5311	
38	左京六条一坊一町跡	SK82	未報告　P 3	椀	Ⅲ A		底部		左 6101	HKHK005
39	左京八条三坊七町跡	SD29A	図 11-66	椀	Ⅲ A1		15.2	1 C2A	左 8307	
40	左京八条三坊七町跡	SD29B	図 12-88	椀	Ⅲ A		底部	2AB	左 8307	
41	右京一条二坊四町跡	SD20B	図 7-2	椀	Ⅲ 1	細片	16.2		右 1204	
42	右京一条三坊十二町跡	層	図 18-182	椀	Ⅲ B		底部		右 1312	
43	右京二条二坊三町跡	SX1	図 32-1	椀	Ⅲ 1		—	3B	右 2203	
44	右京二条二坊三町跡	SX1	図 32-5	椀	Ⅲ A	内面メアト	—	3B	右 2203	
45	右京二条二坊三町跡	SX1	図 32-7	椀	Ⅲ B	n	—	3B	右 2203	
46	右京二条二坊十一町跡	溝 1	図版 10-60	椀	Ⅲ 1		14.8	2A	右 2211	
47	右京二条三坊七町	SD10	22	椀	Ⅲ A	細片	底部		右 2307	HKNR
48	右京二条三坊七町	SK34	29	椀	Ⅲ B	n	底部	3B	右 2307	HKNR
49	右京二条三坊七町	礫層	24	椀	Ⅲ B	細片 n	底部		右 2307	HKNR
50	右京二条三坊八町	層	図 77-194	椀	Ⅲ A		底部		右 2308	花大
51	右京二条三坊十五町跡	SE10 中層	157	椀	Ⅲ A		底部		右 2315	HKIM
52	右京二条三坊十五町跡	SX25	161	椀	Ⅲ B1	n	14.8	2C3A	右 2315a	HKIM
53	右京二条三坊十五・十六町跡	溝 201	図 27-73	椀	Ⅲ A1		14.3		右 2315 b	
54	右京二条三坊十五・十六町跡	溝 613	図 27-74	椀	Ⅲ A		底部		右 2315 b	
55	右京二条三坊十五・十六町跡	溝 411	図 27-80	椀	Ⅲ 1		—		右 2315 b	
56	右京三条一坊三町（右京職）跡	SX283	図 15-78	椀	Ⅲ A1		15.4		右 3103a	
57	右京三条一坊三町（右京職）跡	SX283	図 15-79	椀	Ⅲ 1		15		右 3103a	
58	右京三条一坊三町（右京職）跡	SX283	図 15-80	椀	Ⅲ A		底部		右 3103a	
59	右京三条一坊三町（右京職）跡	SX283	図 15-82	椀	Ⅲ 1		14.4		右 3103a	
60	右京三条一坊三町（右京職）跡	SX283	図 15-83	椀	Ⅲ B	n	底部		右 3103a	
61	右京三条一坊三町（右京職）跡	SX283	図 15-86	椀	Ⅲ 1	細片 n	—		右 3103a	
62	右京三条一坊三町（右京職）跡	SX283	図 15-88	椀	Ⅲ 1	細片	—		右 3103a	
63	右京三条一坊三町（右京職）跡	SX283	図 15-87	椀	Ⅲ 1	細片 n	—		右 3103a	
64	右京三条一坊三町（右京職）跡	SX283	図 15-90	椀	Ⅲ 1	細片	—		右 3103a	
65	右京三条一坊三・六・七町跡	SG24 新	図 25-154	椀	Ⅲ 1		14.4		右 3103 b	
66	右京三条一坊三・六・七町跡	SG24 新	図 25-157	椀	Ⅲ A	細片	底部		右 3103 b	
67	右京三条一坊六・七町	池 250	図版 48-497	椀	Ⅲ A1		15.1	2B	右 3106a	百花亭
68	右京三条一坊十・十五町跡	整地層	図 11-50	椀	Ⅲ B	n	底部	2C3A	右 3110	
69	右京三条二坊八町跡	SK8	74	椀	Ⅲ A1		15.2	2B	右 3208a	HKRI
70	右京三条二坊八町跡	SK8	75	椀	Ⅲ 1		14.4	2B	右 3208a	HKRI
71	右京三条二坊八町跡	層　47-5	82	椀	Ⅲ 1		16.3		右 3208a	HKRI
72	右京三条二坊八町跡	層　47-5	83	椀	Ⅲ 1		—		右 3208a	HKRI
73	右京三条二坊八町跡	SD4	85	椀	Ⅲ 1		—		右 3208a	HKRI
74	右京三条二坊八町跡	層　33-1	86	椀	Ⅲ A		底部		右 3208a	HKRI
75	右京三条二坊八町跡	層	未報告 11	椀	Ⅲ 1		15.8		右 3208b	HKRP
76	右京三条二坊十六町跡	井戸 2	図版 29-419	椀	Ⅲ 1		14.4		右 3216	HKRA　斎宮
77	右京三条二坊十六町跡	井戸 2	図版 29-420	椀	Ⅲ A		底部		右 3216	HKRA　斎宮
78	右京三条二坊十六町跡	SG82	指 322	椀	Ⅲ 1		14.8	2C	右 3216	HKRA　斎宮
79	右京三条二坊十六町跡	SG82	指 323	椀	Ⅲ A		底部	2C	右 3216	HKRA　斎宮

凡例：遺跡名の「平安京」は省略した。出土地点の「層」は包含層，混入，表採等を含む。分類記号のアルファベットは底部，数字は口縁部が残存する事を示す。

表５　出土資料一覧表（２）

№	遺跡名	出土地点	掲載番号	器形	分類	備考	口径	時期	報告書索引	調査記号等
80	右京三条二坊十六町跡	SG82	指 324	椀	Ⅲ BR	n	—	2C	右 3216	HKRA　斎宮
81	右京三条二坊十六町跡	SG82	指 325	椀	Ⅲ BR		18.4	2C	右 3216	HKRA　斎宮
82	右京三条二坊十六町跡	SG82	550	椀	Ⅲ 1		15.2	2C	右 3216	HKRA　斎宮
83	右京三条二坊十六町跡	SG82	662	椀	Ⅲ B		底部	2C	右 3216	HKRA　斎宮
84	右京三条二坊十六町跡	SG82	663	椀	Ⅲ B		底部	2C	右 3216	HKRA　斎宮
85	右京三条二坊十六町跡	SG82	664	椀	Ⅲ B		底部	2C	右 3216	HKRA　斎宮
86	右京三条二坊十六町跡	SG82	685	椀	Ⅲ 1		14.5	2C	右 3216	HKRA　斎宮
87	右京三条二坊十六町跡	SG82	773	椀	Ⅲ B		底部	2C	右 3216	HKRA　斎宮
88	右京三条二坊十六町跡	層	651	椀	Ⅲ B		底部		右 3216	HKRA　斎宮
89	右京三条二坊十六町跡	層	655	椀	Ⅲ B		底部		右 3216	HKRA　斎宮
90	右京三条二坊十六町跡	層	657	椀	Ⅲ A		底部		右 3216	HKRA　斎宮
91	右京三条二坊十六町跡	層	686	椀	Ⅲ 1	細片	—		右 3216	HKRA　斎宮
92	右京三条二坊十六町跡	SD1	689	椀	Ⅲ 1		15		右 3216	HKRA　斎宮
93	右京三条二坊十六町跡	SE547	694	椀	Ⅲ 1		14.8		右 3216	HKRA　斎宮
94	右京三条三坊三町跡	SX07	3-262	椀	Ⅲ A1		14.5	2B	右 3303a	HKCF2
95	右京三条三坊三町跡	SX07	3-263	椀	Ⅲ A1		14.5	2B	右 3303a	HKCF2
96	右京三条三坊三町跡	SX07	3-264	椀	Ⅲ A1		17.1	2B	右 3303a	HKCF2
97	右京三条三坊三町跡	SX07	3-265	椀	Ⅲ A		底部	2B	右 3303a	HKCF2
98	右京三条三坊三町跡	SX07	3-272	椀	Ⅲ A		底部	2B	右 3303a	HKCF2
99	右京三条三坊五町跡	古混（溝 801）	図 33-75	椀	Ⅲ B		—		右 3305	
100	右京四条一坊九町跡	層　　78HK-CZ	163525-3	椀	Ⅲ A1		15		右 4109	朱１・２次
101	右京四条二坊四町跡	層	図 19-91	椀	Ⅲ A		底部		右 4204	
102	右京四条二坊四町跡	層	図 19-92	椀	Ⅲ 1		14.8		右 4204	
103	右京四条二坊十三町跡（淳和院）	層	図 16-410	椀	Ⅲ 1	細片	—		右 4213	
104	右京四条二坊十六町跡	不明　未報告	13-2	椀	Ⅲ B		—		右 4216	88HK-RM
105	右京四条二坊十六町跡	不明　未報告	21-7	椀	Ⅲ 1	細片	—		右 4216	88HK-RM
106	右京四条二坊十六町跡	不明　未報告	22-8	椀	Ⅲ B		—		右 4216	88HK-RM
107	右京四条二坊十六町跡	不明　未報告	23-1	椀	Ⅲ 1	細片	—		右 4216	88HK-RM
108	右京四条二坊十六町跡	不明　未報告	28-5	椀	Ⅲ 1	細片	—		右 4216	88HK-RM
109	右京四条二坊十六町跡	不明　未報告	28-5	椀	Ⅲ 1	細片	—		右 4216	88HK-RM
110	右京四条二坊十六町跡	不明　未報告	33-3	椀	Ⅲ B		—		右 4216	88HK-RM
111	右京四条二坊十六町跡	不明　未報告	36	椀	Ⅲ 1	細片	—		右 4216	88HK-RM
112	右京五条三坊三町跡	溝２	図 18-85	椀	Ⅲ 1	細片	15.4	3A	右 5303	HKQP
113	右京五条三坊三町跡	溝２	図 18-87	椀	Ⅲ 1	細片	16.2	3A	右 5303	HKQP
114	右京六条一坊三町跡	２区４層	未報告 P2	椀	Ⅲ B	n	底部		右 6103	XF018
115	右京六条一坊十三町跡	SX1	図 41-36	椀	Ⅲ A1		14.9	2B	右 6113a	
116	右京六条一坊五・六町跡	井戸 E005	図 34-34	椀	Ⅲ A1		14.6	2B	右 6105	HKXF002
117	右京六条一坊六町跡	SX68 裏込	未報告 P ４	椀	Ⅲ A		底部		右 6106	XF019
118	右京六条一坊十一町跡	十一町整地層	図 98-375	椀	Ⅲ B ?		—		右 6111a	
119	右京六条一坊十一・十四町跡	撹乱	未報告　P ５	椀	Ⅲ A		底部		右 6111b	XF0 １ １
120	右京六条一坊十四町跡	SD02B	未報告　P1	椀	Ⅲ 1	細片	底部		右 6114a	XF010
121	右京六条一坊十四町跡	層	未報告　P9	椀	Ⅲ 1	細片	13.8		右 6114a	XF010
122	右京六条一坊十四町跡	層	未報告　P11	椀	Ⅲ A		底部		右 6114a	XF010
123	右京六条二坊三町跡	池 239	図 22-106	椀	Ⅲ 1		15.9	2BC	右 6203	
124	右京六条三坊二町　西院遺跡	溝 68（第４層）	図 27-158	椀	Ⅲ A1		14.4	2C?	右 6302	
125	右京七条一坊十四町	SE56	131	椀	Ⅲ 1		14.4	3A ?	右 7114a	97HKNJ2
126	右京七條二坊（西市）跡		考古資料館　8	椀	Ⅲ B1	n	15.4		右 72XX	HKNE
127	右京七条一坊十五町跡	溝５	図 18-38	椀	Ⅲ A		底部		右 7115	
128	右京九条一坊十二・十三町（西寺）跡	層	第 18 図 -17	椀	Ⅲ B1		【15.4】		右 9112a	
129	右京九条一坊十二・十三町（西寺）跡	層	第 18 図 -21	椀	Ⅲ 1		14.6		右 9112a	
130	右京九条二坊四町跡	層	図 4-7	椀	Ⅲ B1		14.8		右 9204	洛陽高校　HKRK02
131	一乗寺向畑町遺跡	SX03	図 8-9	椀	Ⅲ A1		14.4	2B	一条寺	86KS-IJ
132	仁和寺旧境内	SD34	図 18-67	椀	Ⅲ 1		14.8	3AB	仁和寺	
133	仁和寺旧境内	層	図 18-115	椀	Ⅲ A		底部		仁和寺	
134	仁和寺旧境内	層	117　図版 34	椀	Ⅲ A	細片	底部		仁和寺	
135	平安宮内酒殿・釜所・侍従所跡	—	163525-1	大椀	Ⅲ B1		23.6		宮 c	ＨＫＺＮ
136	左京六条一坊三・六町跡	SK02（古混）	考古資料館　7	大椀	Ⅲ B1		23.6		左 6103	HKGK
137	左京六条一坊六町跡		図 105-3	大椀	Ⅲ B1		24.8		左 6106	
138	仁和寺旧境内	SK47	図 118-90	大椀	Ⅲ B1		22		仁和寺	
139	平安宮跡内裏蘭林坊跡	層	第 25 図 -2	椀	Ⅲ Ca		18.1		宮 b	
140	平安宮西限跡	隍 23	19-34	椀	Ⅲ Ca1		17.8	2C	宮 d	HKLM
141	左京二条四坊十五町跡・東京極大路	路面Ⅲ	図 21-107	椀	Ⅲ Ca		底部	3BC	左 2415	
142	左京四条二坊十四町跡	層他　未報告	45	椀	Ⅲ Ca		—		左 4214	
143	右京一条三坊十三町・二条三坊十六町跡	古混	図７-49	椀	Ⅲ Cb		底部		右 1313	
144	右京一条三坊十三町・二条三坊十六町跡	古混	図７-50	椀	Ⅲ Ca		底部		右 1313	
145	右京一条三坊十三町・二条三坊十六町跡	古混	図７-54	椀	Ⅲ Ca		底部		右 1313	
146	右京二条三坊七町跡	SD10	25	椀	Ⅲ Ca		底部		右 2307	HKNR
147	右京二条三坊七町跡	SK04	26	椀	Ⅲ Ca		底部		右 2307	HKNR
148	右京二条三坊七町跡	SD02	図 46-73	椀	Ⅲ Ca		—	3BC	右 2308	花大
149	右京二条三坊七町跡		図 77-193	椀	Ⅲ Ca		—		右 2308	花大
150	右京二条三坊十五町跡	SE10 上層	164	椀	Ⅲ Ca1		20		右 2315a	HKIM
151	右京二条三坊十五町跡	SX25	165	椀	Ⅲ Cb 1		23	2C3A	右 2315a	HKIM
152	右京二条三坊十五・十六町跡	溝 102	図 27-82	椀	Ⅲ Ca		底部		右 2315b	
153	右京二条三坊十五・十六町跡	溝 109	図 27-83	椀	Ⅲ Ca		底部		右 2315b	
154	右京二条三坊十五・十六町跡	溝 111 上層	図 27-84	椀	Ⅲ Ca		底部		右 2315b	
155	右京二条三坊十五・十六町跡	溝 111 上層	図 27-85	椀	Ⅲ Ca		15.6		右 2315b	
156	右京三条一坊十・十五町跡	層	158744-14	椀	Ⅲ Ca		15.5		右 3110	ＨＫＵＵ００５
157	右京三条二坊八町跡	SK8	69・70	椀	Ⅲ Cb		15.5	2B	右 3208a	HKRI
158	右京三条二坊八町跡	SD73 第２層	94	椀	Ⅲ Ca		底部		右 3208a	HKRI
159	右京三条二坊八町跡	層 18-3	93	椀	Ⅲ Cb		底部		右 3208a	HKRI
160	右京三条二坊八町跡	層	未報告 07	椀	Ⅲ Ca		底部		右 3208b	HKRP
161	右京三条二坊八町跡	層	未報告 08	椀	Ⅲ Cb		底部		右 3208b	HKRP

表6　出土資料一覧表（3）

№	遺跡名	出土地点	掲載番号	器形	分類	備考	口径	時期	報告書索引	調査記号等
162	右京三条二坊八町跡	層	未報告 09	椀	Ⅲ Cb		底部		右 3208b	HKRP
163	右京三条二坊十六町跡	層	677	椀	Ⅲ Cb		底部		右 3216	HKRA　斎宮
164	右京三条二坊十六町跡	層	674	椀	Ⅲ Cb		底部		右 3216	HKRA　斎宮
165	右京三条二坊十六町跡	SG82	328	椀	Ⅲ Ca		底部	2C	右 3216	HKRA　斎宮
166	右京三条三坊三町跡	SX07	3-268	椀	Ⅲ Ca		16.5	2B	右 3303a	HKCF2
167	右京三条三坊三町跡	SX07	3-269	椀	Ⅲ Cb		底部	2B	右 3303a	HKCF2
168	右京三条三坊三町跡	SX07	3-270	椀	Ⅲ Ca		底部	2B	右 3303a	HKCF2
169	右京四条二坊跡	RHAW33	考古資料館　5	椀	Ⅲ Ca		18.8		右 42XX	中・壬生仙念町
170	左京四条二坊十四町跡	層他　未報告	44	椀	Ⅲ Cb		—		右 4214	
171	右京六条一坊五・六町跡	層	図 34-44	椀	Ⅲ Ca		底部		右 6105	HKXF002
172	右京七条一坊十四町跡	層	163525-2	椀	Ⅲ Ca		22		右 7114b	HKNJ
173	右京九条一坊十二・十三町（西寺）跡	層	第 18 図 -16	椀	Ⅲ Cb		20.4		右 9112a	
174	仁和寺旧境内	図 18-49		椀	Ⅲ C?		—		仁和寺	
175	左京一条三坊九町（土御門烏丸内裏）跡	溝 2	第 39 図 -20	椀	Ⅶ Ba		—		左 1309	KBS 京都
176	左京四条二坊十四町跡	層他　未報告	46	椀	Ⅶ Ba		底部		左 4214	
177	左京六条一坊一町跡	SD １１４	未報告　P 6	椀	Ⅶ Ba		底部		左 6101	HKHK005
178	右京一条三坊十三町・二条三坊十六町跡	古混	図 7 -53	椀	Ⅶ Ba		底部		右 1313	
179	右京二条二坊三町跡	SX1	図 32-6	椀	Ⅶ Ba		—	3B	右 2203	HKIA
180	右京二条三坊一町跡	p1419	特 4	椀	Ⅶ Ba1		—		右 2301	ＨＫＩＫ
181	右京二条三坊七町跡	SD02	図 46-72	椀	Ⅶ Ba		—	3BC	右 2308	花大
182	右京二条三坊七町跡	層	図 77-191	椀	—		—		右 2308	花大
183	右京二条三坊十五町跡	SD23	162	椀	Ⅶ?		—		右 2315a	HKIM
184	右京二条三坊十五・十六町跡	溝 111 上層	図 27-86	椀	Ⅶ Ba		底部		右 2315b	
185	右京三条一坊三町（右京職）跡	SX283	図 15-84	椀	Ⅶ Ba		底部		右 3103a	
186	右京三条二坊八町跡	層 80-4	90	椀	Ⅶ Ba		底部	2B	右 3208a	HKRI
187	右京三条二坊八町跡	層 42-3	91	椀	Ⅶ Ba		底部	2B	右 3208a	HKRI
188	右京三条二坊十四町跡	溝 46	図 16-28	椀	Ⅶ BaR		9.6	—	右 3214	
189	右京四条二坊十六町跡	層　未報告	29-1	椀	Ⅶ Ba		底部		右 4216	88HK-RM
190	右京五条三坊三町跡	溝 2	図 18-86	椀か	—		底部	3A	右 5303	HKQP
191	右京六条一坊十四町跡	層	未報告　P12	椀	Ⅶ Ba		底部		右 6114a	XF010
192	右京九条二坊四町跡	溝	図 4-5	椀	?		底部		右 9204	洛陽高校 HKRK
193	右京六条一坊十三町跡	SD20	未報告　109	椀蓋	Ⅳ		—	2C	右 6113b	XF12
194	左京一条三坊九町（土御門烏丸内裏）跡	溝 3	第 40 図 -9	椀	—		底部	3A-B	左 1309	KBS 京都
195	左京二条三坊跡		158744-1	椀	Ⅳ BAR		19.2		左 23XX	室町出水上近衛町
196	左京二条四坊十五町・東京極大路跡	溝 290	図 20-50	椀	Ⅳ BA		底部	3C	左 2415	東京極大路
197	左京三条三坊四町跡	Sx51		椀	Ⅳ BB		底部	3C4A	左 3304	18 H 462
198	左京四条一坊二町跡	岬 848 土留外側構築土	図 49-351	椀	Ⅳ BB		底部		左 4102	
199	左京四条二坊十四町跡	層他　未報告	23	椀	Ⅳ？ R		—		左 4214	
200	左京四条二坊十四町跡	層他　未報告	38	椀	Ⅳ BB		—		左 4214	
201	左京四条二坊十四町跡	層他　未報告	39	椀	Ⅴ Ba	5	—		左 4214	
202	左京四条二坊十四町跡	層他　未報告	40	椀	Ⅳ BB		—		左 4214	
203	左京四条二坊十四町跡	層他　未報告	42	椀	Ⅳ BB		—		左 4214	
204	左京四条二坊十四町跡	層他　未報告	43	椀	Ⅳ BB		—		左 4214	
205	左京五条三坊五町跡	層	図 19-66	椀	Ⅳ BAR		底部		左 5305	
206	左京五条二坊跡	81BBHL61-SE1	考古資料館　3	椀	Ⅳ BB		15		左 52XX	下・麓町
207	右京一条三坊十三町・二条三坊十六町跡	古混	図 7 -51	椀	Ⅳ BA		底部		右 1313	
208	右京二条二坊三町跡	SX1	図 32-3	椀	Ⅳ		—	3B	右 2203	HKIA
209	右京二条二坊三町跡	SX1	図 32-9	椀	Ⅳ BB		—	3B	右 2203	HKIA
210	右京二条二坊三町跡	SX1	図 32-10	椀	Ⅳ BB		—	3B	右 2203	HKIA
211	右京二条三坊七町跡	SK34	28	椀	Ⅳ？ R	細片	—	3B	右 2307	HKNR
212	右京二条三坊七町跡	SK34	30	椀	Ⅳ BBR		16.8	3B	右 2307	HKNR
213	右京二条三坊七町跡	SX07	29	椀	Ⅳ BA	細片	底部		右 2307	HKNR
214	右京二条三坊七町跡	層	図 77-192	椀	Ⅳ BAR		—		右 2308	花大
215	右京二条三坊十五町跡	包含層	163	椀	Ⅳ R		17.6		右 2315a	HKIM
216	右京二条三坊十五・十六町跡	溝 108	図 27-75	椀	Ⅳ BA		底部		右 2315b	
217	右京二条三坊十五・十六町跡	溝 107	図 27-76	椀	Ⅳ BA		底部		右 2315b	
218	右京二条三坊十五・十六町跡	溝 111 上層	図 27-77	椀	ⅤＢ？		底部		右 2315b	
219	右京二条三坊十五・十六町跡	溝 110	図 27-78	椀	Ⅳ BA		底部		右 2315b	
220	右京二条三坊十五・十六町跡	溝 603	図 27-79	椀	Ⅳ BB		底部		右 2315b	
221	右京三条一坊三町（右京職）跡	SX283	図 15-89	椀	Ⅳ	細片	—		右 3103a	
222	右京三条一坊三・六・七町跡	SG24 新	図 25-155	椀	Ⅳ BAR		底部	2B	右 3103b	HKUI
223	右京三条一坊三・六・七町跡	SA11	図 27-82	椀	Ⅴ？		底部		右 3103b	
224	右京三条一坊六・七町	池 250	図版 48-499	椀	Ⅴ		体部		右 3106a	百花亭
225	右京三条二坊八町跡	層 98-2	81	椀	Ⅳ		—	2B	右 3208a	HKRI
226	右京三条二坊八町跡	層 7-1	88	椀	ⅤＢ		—	2B	右 3208a	HKRI
227	右京三条二坊八町跡	SK89	89	椀	Ⅳ BA		—	2B	右 3208a	HKRI
228	右京三条三坊三町跡	SX07	3-266	椀	Ⅳ BA		底部	2B	右 3303a	HKCF2
229	右京三条三坊三町跡	SX07	3-267	椀	Ⅳ BA		底部	2B	右 3303a	HKCF2
230	右京三条三坊三町跡	SX07	3-271	椀	Ⅳ R		19.8	2B	右 3303a	HKCF2
231	右京三条三坊三町跡	井戸 340	図 32-102	椀	Ⅳ		20.8	3A	右 3303b	
232	右京三条二坊十六町跡	SG82	指 326	椀	Ⅳ R		17.6	2C	右 3216	HKRA　斎宮
233	右京三条二坊十六町跡	SG82	指 327	椀	ⅤBR		底部	2C	右 3216	HKRA　斎宮
234	右京三条二坊十六町跡	SG82	指 551	椀	Ⅳ R		18	2C	右 3216	HKRA　斎宮
235	右京三条二坊十六町跡	SG82	723	椀	Ⅳ R		—	2C	右 3216	HKRA　斎宮
236	右京三条二坊十六町跡	層	667	椀	Ⅳ BA		底部		右 3216	HKRA　斎宮
237	右京三条二坊十六町跡	層	668	椀	Ⅳ BA		底部		右 3216	HKRA　斎宮
238	右京三条二坊十六町跡	層	670	椀	Ⅳ BA		底部		右 3216	HKRA　斎宮
239	右京三条二坊十六町跡	層	688	椀	Ⅳ R		—		右 3216	HKRA　斎宮
240	右京三条二坊十六町跡	層	725	椀	Ⅳ R		—		右 3216	HKRA　斎宮
241	右京四条二坊十三町跡（淳和院）	層	図 16-409	椀	Ⅳ BA	細片	底部		右 4213	
242	右京四条二坊十三町跡（淳和院）	層	図 16-411	椀	Ⅳ R	細片	18.6		右 4213	

表７　出土資料一覧表（４）

№	遺跡名	出土地点	掲載番号	器形	分類	備考	口径	時期	報告書索引	調査記号等
243	右京四条二坊十六町	不明　未報告	26-4	椀	Ⅳ BA		—		右 4216	88HK-RM
244	右京六条一坊五・六町跡	層	図 34-43	椀	—	体部細片	体部		右 6105	HKXF002
245	右京六条一坊十三町跡	SX1	図 41-35	椀	Ⅳ BA		底部		右 6113a	
246	右京六条一坊十四町跡	層	未報告　P13	椀	Ⅳ R		16.8		右 6114a	XF010
247	右京六条一坊十四町跡	SD34	図 95-322	椀	Ⅳ BA		底部		右 6114b	
248	右京七条一坊十五町跡	流路 1	図 17-24	椀	Ⅳ BA		底部	—	右 7115	
249	右京七条一坊十五町跡	溝 5	図 18-37	椀	Ⅳ BA		底部		右 7115	
250	右京七条二坊十二町・西市外町跡	SE574	図 106-10	椀	ＶＢＲ		底部	3AB	右 7212	HKYJ
251	仁和寺旧境内	SD30	50　図版 34	椀	—	細片	—	3AB	仁和寺	
252	仁和寺旧境内	SK25	図 19-105	椀	ＶＢ		底部		仁和寺	
253	仁和寺旧境内	層	118　図版 34	椀	Ⅳ？	細片	—		仁和寺	
254	仁和寺旧境内	層	図 18-119	椀	Ⅳ？		底部		仁和寺	
255	仁和寺旧境内	層	図 18-120	椀	？		底部		仁和寺	
256	右京二条三坊八町跡	SD02	図 46-71	椀	—		—	3BC	右 2308	花大
257	左京三条一坊五町（勧学院）跡	層	第 28 図 -31	椀	—	細片	—		右 3105	
258	左京四条一坊跡	22	図版 22・25-P 151 158744-5	皿	Ⅰ B1		11.2		左 41XX	壬生車庫
259	左京四条二坊十四町跡	層他　未報告	13	皿	Ⅰ B1		—		左 4214	
260	左京四条二坊十四町跡	層他　未報告	14	皿？	Ⅰ	細片	—		左 4214	
261	左京四条二坊十四町跡	層他　未報告	21	皿	Ⅰ		—		左 4214	
262	左京四条三坊五町跡	SE21	2-37	皿	Ⅰ		12.4		左 4305	
263	右京二条二坊三町跡	SX1	図 32-4	皿	Ⅰ B		—	3B	右 2203	HKIA
264	右京二条三坊十五町跡	SE10 堀形	158・160	皿	Ⅰ B1		14.4		右 2315a	HKIM
265	右京二条三坊十五町跡	SD14	159	皿	Ⅰ B		底部	3A	右 2315a	HKIM
266	右京二条三坊十五・十六町跡	溝 402	図 27-81	皿	Ⅰ B		底部		右 2315b	
267	右京三条二坊二町跡	SE4	図 45-4	皿	Ⅰ B1		—		右 3202	ＨＫＲＢ
268	右京三条二坊八町跡	未	13	皿	Ⅰ R		12		右 3208b	HKRP
269	右京四条二坊四町跡	層	図 19-93	皿	Ⅰ		15.5		右 4204	
270	右京四条二坊十三町跡（淳和院）	SD78	図版 12-219	皿	Ⅰ B		底部		右 4213	
271	右京六条一坊五・六町跡	層	図 34-31	皿	Ⅰ	細片	15.6		右 6105	HKXF002
272	右京六条一坊五・六町跡	溝 Y018	図 34-40	皿	Ⅰ R?	細片	—		右 6105	HKXF002
273	右京六条一坊五・六町跡	層	図 34-41	皿？	Ⅰ	細片	—		右 6105	HKXF002
274	右京六条一坊十三町跡	SG21	未報告　110	皿	Ⅰ B1R		15.1		右 6113b	XF12
275	右京六条一坊十三町跡	SD20	図 63-21	皿	Ⅰ		—		右 6113b	XF12
276	右京六条一坊十四町跡	層	未報告　Ｐ８	皿	Ⅰ		16		右 6114a	XF010
277	右京六条二坊三町跡	池 239	図 22-107	皿	Ⅰ		15.2		右 6203	
278	右京九条二坊四町跡	整地層	図 4-6　163525-4	皿	Ⅰ B1R		14.6		右 9204	ＨＫＲＫ 02
279	右京九条一坊十二・十三町（西寺）跡	層	第 18 図 -18	皿	Ⅰ B1		15.2		右 9112a	
280	広隆寺旧境内	層	第 33 図 -3	皿	Ⅰ B1		14.2		広隆寺	
281	右京三条二坊八町跡	SK8	72	皿	Ⅱ		14.2	2B	右 3208a	HKRI
282	左京八条三坊七町跡	SD29B	図 12　89	皿	Ⅲ		15.2		右 8307	
283	右京三条一坊三町（右京職）跡	SX283	図 15-85	段皿	—		19.2		右 3103a	
284	左京四条一坊二町跡	層	図 49-349	托	Ⅰ		—		左 4102	
285	右京九条一坊十四町・西寺跡	層	１３Z11-90	托	Ⅰ		—		右 9114	HKSG013
286	左京四条一坊二町跡	池 452	図 49-350	杯	Ⅰ		—		左 4102	
287	左京四条二坊十四町跡	層　未報告	37	杯	Ⅰ		—		左 4214	
288	右京三条一坊三・六・七町跡	SG24 新	図 25-156	杯	Ⅰ		—	2B	右 3103b	HKUI
289	右京三条二坊八町跡	SK8	73	杯	Ⅰ		—		右 3208a	HKRI
290	左京四条三坊五町跡	ＳＥ 21	2-36	杯	Ⅱ		14.4		左 4305	
291	左京五条一坊十四町跡	SD162	図 19-56	杯	Ⅱ		16.6	3A 新	左 5114	HKVK
292	右京二条三坊八町跡	SD01	図 45-59	杯	Ⅱ		15	3B	右 2308	花大
293	太秦仲之町遺跡	層	未報告	杯	Ⅱ		12.2		太秦	UZJK
294	右京二条二坊三町跡	SX1	図 32-8	椀	Ⅲ Bb	細輪高台	—	3B	右 2203	HKIA
295	右京三条二坊八町跡	層	平尾 10	椀？	Ⅲ Bb	蓮弁文	底部		右 3208a	HKRP
296	左京一条三坊九町（土御門烏丸内裏）跡	溝 6	第 44 図	皿	Ⅰ Bb	花文	—		左 1309	KBS 京都
297	右京三条二坊八町跡	SD73	92	皿	Ⅰ Bb		—	2B	右 3208a	HKRI
298	左京四条二坊十四町跡	層他　未報告	24	—	—	内面に文様	新		左 4214	ＨＫＨＸ
299	左京四条二坊十四町跡	層他　未報告	25	—	—	文様	体部		左 4214	ＨＫＨＸ
300	左京四条二坊十四町跡	層他　未報告	26	—	—	文様	体部		左 4214	ＨＫＨＸ
301	左京四条二坊十四町跡	層他　未報告	27	—	—	文様	体部		左 4214	ＨＫＨＸ
302	左京四条二坊十四町跡	層他　未報告	28	—	—	文様	体部		左 4214	ＨＫＨＸ
303	左京四条二坊十四町跡	層他　未報告	29	—	—	文様	体部		左 4214	ＨＫＨＸ
304	左京四条二坊十四町跡	層他　未報告	30	—	—	文様	高台		左 4214	ＨＫＨＸ
305	左京四条二坊十四町跡	層他　未報告	31	—	—	文様	高台		左 4214	ＨＫＨＸ
306	右京二条三坊十五・十六町跡		図 27-88	香炉	—	細片	—		右 2315b	
307	右京三条一坊三・六・七町跡	SA11	図 27-83	香炉	—	細片	—		右 3103b	
308	右京六条一坊十三町跡	SG21	未報告　112	香炉	蓋		—	2C	右 6113b	XF12
309	仁和寺旧境内	層	図 18-121	香炉	身		—		仁和寺	
310	右京九条一坊十二・十三町（西寺）跡	層	第 18 図 -20	灯明皿			—		右 9112a	
311	右京二条三坊十五町跡	SX25	153	合子	蓋		—	2C3A	右 2315a	HKIM
312	右京二条三坊十五町跡	包含層	154	合子	身		—		右 2315a	HKIM
313	右京二条三坊十五町跡	SX25	155	合子	身		—	2C3A	右 2315a	HKIM
314	右京三条一坊六・七町跡	池 250	図版 48-500	合子	蓋	線刻	—	2B	右 3106a	百花亭
315	右京三条一坊六・七町跡	池 250	図版 48-501	合子	蓋		—	2B	右 3106a	百花亭
316	右京三条一坊六・七町跡	池 250	図版 48-502	合子	身	輪高台	—	2B	右 3106a	百花亭
317	右京三条二坊八町跡	SK8	71	合子	身		—	2B	右 3208a	HKRI
318	右京三条二坊十六町跡	SG82	555	合子	身		—	2C	右 3216	HKRA　斎宮
319	右京三条三坊三町跡	SX07	3-273	合子	身		—	2B	右 3303a	HKCF2
320	右京四条二坊十六町	不明　未報告	19-4	合子	身		—		右 4216	88HK-RM
321	右京六条一坊五・六町跡	層	図 34-32	合子	蓋		—		右 6105	HKXF002

表８　出土資料一覧表（５）

№	遺跡名	出土地点	掲載番号	器形	分類	備考	口径	時期	報告書索引	調査記号等
322	右京六条一坊五・六町跡	層	図 34-33	合子	身		—		右 6105	HKXF002
323	右京六条一坊十四町跡	層	未報告　P14	合子	身		—		右 6114a	XF010
324	南春日町遺跡	—	158744-11	合子	身		—		南春日	85MK-HO007
325	左京四条二坊十四町跡	層他　未報告	50	水注	取手		—		右 4214	
326	左京四条二坊十四町跡	層他　未報告	51	水注	取手		—		右 4214	
327	右京二条二坊三町跡	SX1	図 32-2	水注	取手		—	3B	右 2203	HKIA
328	右京三条一坊三町（右京職）跡	SX283	図 15-92	水注	注口		—		右 3103a	
329	右京三条二坊十六町跡	井戸２	図版 29-421	水注	壺部口縁		10		右 3216	HKRA　斎宮
330	右京三条二坊十六町跡	層	図版 29-422	水注	注口		—		右 3216	HKRA　斎宮
331	右京二条三坊十五町跡	包含層	167	水注			—		右 2315a	HKIM
332	右京三条二坊十六町跡	SG82	552	水注	注口		—		右 3216	HKRA　斎宮
333	右京三条二坊十六町跡	SG82	553	水注	取手		—		右 3216	HKRA　斎宮
334	右京三条二坊八町跡	—	未報告 14	水注	取手		—		右 3208b	HKRP
335	右京九条一坊十二・十三町（西寺）跡	層	第 18 図 -19	水注			—		右 9112a	
336	左京四条一坊二町跡	層	図 49-348	唾壺			—		左 4102	
337	右京北辺三坊六町跡	柱穴 396	図 34-18	唾壺			—		右北 306	
338	右京六条一坊十三町跡	SX1	図 41-34	唾壺	口縁か	同一個体か	—		右 6113a	
339	右京六条一坊十三町跡	SX1	図 41-37	唾壺	体部		—		右 6113a	
340	右京二条三坊十五町跡	SD14	156	鉢	Ⅱ		11.7	3A	右 2315a	HKIM
341	右京五条三坊三町跡	溝２	図 18-88	鉢	Ⅱ	細片	13.9	3A	右 5303	HKQP
342	右京六条一坊五・六町跡	層	図 34-35	鉢	Ⅱ	細片	14.4		右 6105	HKXF002
343	右京六条一坊五・六町跡	建物 R002	図 34-38	鉢			—		右 6105	HKXF002
344	左京四条二坊十四町跡	層他　未報告	47	壺			—		左 4214	
345	左京四条二坊十四町跡	層他　未報告	48	壺			—		左 4214	
346	左京四条二坊十四町跡	層他　未報告	49	壺			—		左 4214	
347	左京四条二坊十四町跡	層他　未報告	52	壺	長頸瓶		—		左 4214	
348	左京四条二坊十四町跡	層他　未報告	53	壺	短頸壺		—		左 4214	
349	左京四条二坊十四町跡	層他　未報告	54	壺	底部輪高台		—		左 4214	
350	左京四条二坊十四町跡	層他　未報告	55	壺	底部輪高台		—		左 4214	
351	左京四条二坊十四町跡	層他　未報告	56	壺	底部輪高台		—		左 4214	
352	左京四条二坊十四町跡	層他　未報告	57	壺	底部平底		—		左 4214	
353	右京二条三坊八町跡	SD02	図 46-77	壺			—	3BC	右 2308	花大
354	右京二条三坊八町跡	層	図 77-200	壺	四耳壺		—		右 2308	花大
355	右京二条三坊十五町跡	SE10 上層	166	壺	四耳壺		—		右 2315a	HKIM
356	右京二条三坊十五・十六町跡	溝 111 上層	図 27-87	壺			—		右 2315b	
357	右京三条二坊十六町跡	SG82	329	壺	小壺		—	2C	右 3216	HKRA　斎宮
358	右京三条二坊十六町跡	SG82	556	壺	体部		—	2C	右 3216	HKRA　斎宮
359	右京三条二坊十六町跡	SG82	557	壺	底部		—	2C	右 3216	HKRA　斎宮
360	右京四条二坊四町跡	層	図 19-90	蓋		剡花	—		右 4204	
361	右京六条一坊五・六町跡	北湿地	図 34-39	壺蓋			—		右 6105	HKXF002
362	仁和寺旧境内	層	図 18-114	壺？			—		仁和寺	
363	仁和寺旧境内	層	122　図 21	壺		線刻	—		仁和寺	
364	北野廃寺	—	163525-5	壺			—		北野廃寺	79RH-KG007
365	右京三条一坊六・七町跡	池 250	図版 48-511	壺	底部	下半部露胎	—		右 3106a	百花亭
366	右京六条一坊五・六町跡	建物 R002	図 34-38	鉢			—		右 6105	HKXF002

白磁

№	遺跡名	出土地点	掲載番号	器形	分類	備考	口径	時期	報告書索引	調査記号等
1	右京五条三坊三町跡	溝２	図 18-80	小椀か	Ⅰ？	細片	—	3A	右 5303	HKQP
2	右京五条三坊三町跡	溝２	図 18-81	小椀か	Ⅰ？	細片	—	3A	右 5303	HKQP
3	左京四条二坊十四町跡	層他	未報告２	椀	Ⅱ１		—		左 4214	HKXF002
4	右京二条三坊十五・十六町跡	溝 411	図 27-89	椀	Ⅱ１	細片	—		右 2315	道路拡幅
5	右京三条二坊十六町跡	SG82	538	小椀	Ⅱ１	細片	—		右 3216	HKRA　斎宮
6	右京四条二坊四町跡	層	図 19-94	椀	Ⅱ１	細片	—		右 4204	
7	右京四条二坊四町跡	層	図 19-95	椀	Ⅱ１		16.6		右 4204	
8	右京七条一坊七町跡	皇嘉門大路内溝	図 17-18	椀	Ⅱ２		18.3		右 7107	
9	右京九条一坊十二・十三町　西寺	SD09	考古資料館　12	椀	Ⅱ B1		18	1C	右 9112b	HKSG
10	左京二条四坊十五町跡・東京極大路	路面Ⅲ	図 21-104	椀	Ⅲ A2		144	3B	左 2415	東京極大路
11	左京二条四坊十五町跡・東京極大路	路面Ⅲ	図 21-103・105	椀	Ⅲ２		14.9	3B	左 2415	東京極大路
12	左京四条一坊二町跡	層	図 49-352	椀	Ⅲ B		底部		左 4102	
13	左京四条二坊十四町跡	層他	未報告３	椀	Ⅲ２		—		左 4214	
14	左京四条二坊十四町跡	層他	未報告６	椀	Ⅲ２		—		左 4214	
15	左京四条二坊十四町跡	層他	未報告７	椀	Ⅲ２		—		左 4214	
16	左京四条二坊十四町跡	層他	未報告８	椀	Ⅲ２		—		左 4214	
17	左京四条三坊五町跡	SE21	34	椀	Ⅱ２？	細片	—		左 4305	
18	左京七条二坊	—	考古資料館　11	椀	Ⅲ A2		14.6		左 72 ＸＸ	下・柿本町
19	右京一条三坊十二町跡	層	図 18-169	椀	Ⅲ２		—		右 1312	
20	右京一条三坊十三町・二条三坊十六町跡	層	図 7-45	椀	ⅢＡ？		底部		右 1316	
21	右京一条三坊十三町・二条三坊十六町跡	層	図 7-46	椀	ⅢＡ？		底部		右 1316	
22	右京二条三坊七町	層	31	椀	Ⅲ２？	細片	—		右 2307	HKNR
23	右京二条三坊七町	礫層	32	椀	Ⅲ２		14.4		右 2307	HKNR
24	右京二条三坊十五町跡	SD14	168	椀	Ⅲ２		14.1	2C3A	右 2315a	HKIM
25	右京二条三坊十五町跡	SD14	169	椀	Ⅲ B		底部	2C3A	右 2315a	HKIM
26	右京二条三坊十五・十六町跡	溝 613	図 27-91	椀	Ⅲ A		底部		右 2315b	道路拡幅
27	右京三条一坊三町（右京職）跡	SX283	図 15-81	椀	Ⅲ B		底部		右 3103a	
28	右京三条一坊三・六・七町跡	SG24 新	図 25-156	椀	Ⅲ A	細片	—		右 3103 b	
29	右京三条一坊六・七町	池 250	図版 48-503	椀	Ⅲ B2		14.6	2B	右 3106a	百花亭
30	右京三条一坊六・七町	池 250	図版 48-504	椀	Ⅲ A2		15.2	2B	右 3106a	百花亭
31	右京三条一坊六・七町	池 250	図版 48-505	椀	Ⅲ A2		15.4	2B	右 3106a	百花亭
32	右京三条一坊六・七町	池 250	図版 48-506	椀	Ⅲ２		15	2B	右 3106a	百花亭
33	右京三条一坊六町	池１	図 13-178	椀	Ⅲ A2		15	2B	右 3106b	西三条第（百花亭）

表９　出土資料一覧表（６）

№	遺跡名	出土地点	掲載番号	器形	分類	備考	口径	時期	報告書索引	調査記号等
34	右京三条二坊八町跡	SK8	65	椀	Ⅲ B		底部	2B	右 3208	HKRI
35	右京三条二坊八町跡	SK8	66	椀	Ⅲ B		底部	2B	右 3208	HKRI
36	右京三条二坊八町跡	SK8	67	椀	Ⅲ A		底部	2B	右 3208	HKRI
37	右京三条二坊八町跡	SK6・7	76	椀	Ⅲ 2		14.8	2B	右 3208	HKRI
38	右京三条二坊八町跡	SK83	77	椀	Ⅲ 2		13.9	2B	右 3208	HKRI
39	右京三条二坊八町跡	層 40-1	78	椀	Ⅲ 2	細片	—	2B	右 3208	HKRI
40	右京三条二坊八町跡	ＳＥ 87	80	椀	Ⅲ B		底部	2B	右 3208	HKRI
41	右京三条二坊八町跡	—	未報告 03	椀	Ⅲ A		底部		右 3208	HKRP
42	右京三条二坊八町跡	—	未報告 04	椀	Ⅲ 2	細片	—		右 3208	HKRP
43	右京三条二坊八町跡	—	未報告 05	椀	Ⅲ 2	細片	—		右 3208	HKRP
44	右京三条二坊八町跡	—	未報告 06	椀	Ⅲ 2	細片	—		右 3208	HKRP
45	右京三条二坊十六町跡	SG82	指 320	椀	Ⅲ A2		14.7	2C	右 3216	HKRA　斎宮
46	右京三条二坊十六町跡	SG82	541	椀	—		—	2C	右 3216	HKRA　斎宮
47	右京三条二坊十六町跡	SG82	545	椀	Ⅲ A		底部	2C	右 3216	HKRA　斎宮
48	右京三条二坊十六町跡	SG82	546	椀	—	細片	—	2C	右 3216	HKRA　斎宮
49	右京三条二坊十六町跡	SG82	547	椀	Ⅲ A		底部	2C	右 3216	HKRA　斎宮
50	右京三条二坊十六町跡	SG82	539	椀	Ⅲ 2	細片	—	2C	右 3216	HKRA　斎宮
51	右京三条二坊十六町跡	SG82	536	椀	Ⅲ 2	細片	—	2C	右 3216	HKRA　斎宮
52	右京三条二坊十六町跡	SG82	未報告 37	椀	Ⅲ 2		13.6	2C	右 3216	HKRA　斎宮
53	右京三条二坊十六町跡	SD01	62	椀	Ⅲ 2		—		右 3216	HKRA　斎宮
54	右京三条二坊十六町跡	SX404	28	椀	Ⅲ B		底部		右 3216	HKRA　斎宮
55	右京三条二坊十六町跡	SG449	1	椀	Ⅲ A		底部		右 3216	HKRA　斎宮
56	右京三条二坊十六町跡	層	109	椀	Ⅲ 2	細片	—		右 3216	HKRA　斎宮
57	右京三条二坊十六町跡	層	8	椀	Ⅲ A		—		右 3216	HKRA　斎宮
58	右京三条三坊三町跡	SX07	3-275	椀	Ⅲ 2		13.8	2B	右 3303a	HKCF2
59	右京三条三坊三町跡	SX07	3-277	椀	Ⅲ 2		15.6	2B	右 3303a	HKCF2
60	右京三条三坊三町跡	SX07	3-278	椀	Ⅲ A		底 6.2	2B	右 3303a	HKCF2
61	右京三条三坊三町跡	SX07	3-279	椀	Ⅲ A		底 6.6	2B	右 3303a	HKCF2
62	右京三条三坊三町跡	溝 90	図 32-76	椀	Ⅲ 2		12.8	3A	右 3303b	
63	右京四条二坊十三町跡（淳和院）	SX640	図版 7-45	椀	Ⅲ B		底部	2A	右 4213	
64	右京四条二坊十三町跡（淳和院）	SD78	図版 12-220	椀	Ⅲ A		底部		右 4213	
65	右京四条二坊十三町跡（淳和院）	SD196	図版 14-293	椀	Ⅲ 2	細片	—		右 4213	
66	右京四条二坊十三町跡（淳和院）	層	図 16-405	椀	Ⅲ A		底部		右 4213	
67	右京四条二坊十六町	層	未報告　37	椀	Ⅲ 2		—		右 4216	88HK-RM
68	右京五条三坊三町跡	溝 2	図 18-82	椀	Ⅲ A2		14.5	3A	右 5303	HKQP
69	右京五条三坊三町跡	溝 2	図 18-83	椀	Ⅲ 2		14.8	3A	右 5303	HKQP
70	右京六条一坊五・六町跡	井戸 E005	図 34-30	椀	Ⅲ A1	直口	15.6	2B	右 6105	HKXF002
71	右京六条一坊十三町跡	SG19	未報告　104	椀	Ⅲ 2		15.4	2C	右 6113b	XF12
72	右京六条一坊十三町跡	SG19	未報告　105	椀	Ⅲ A		底部	2C	右 6113b	(遺構報告文Ⅱ新)
73	右京六条一坊十四町跡	SK47	未報告　P16	椀	Ⅲ 2	細片	—		右 6114a	XF010
74	右京六条一坊十四町跡	層	未報告　P17	椀	Ⅲ 2	細片	—		右 6114a	XF010
75	右京七条一坊十四町	SE56	(1)-10 132	椀	Ⅲ 2		15.2	3A ?	右 7114a	97HKNJ2
76	右京九条一坊十二・十三町（西寺）跡	層	第 18 図 -1	椀	Ⅲ A2		15		右 9112a	
77	右京九条一坊十二・十三町（西寺）跡	層	第 18 図 -2	椀	Ⅲ A2		15.4		右 9112a	
78	右京九条一坊十二・十三町（西寺）跡	層	第 18 図 -3	椀	Ⅲ A2		14.8		右 9112a	
79	右京九条一坊十二・十三町（西寺）跡	層	第 18 図 -4	椀	Ⅲ A2		14.6		右 9112a	
80	右京九条一坊十二・十三町（西寺）跡	層	第 18 図 -5	椀	Ⅲ 2		16.8		右 9112a	
81	右京九条一坊十二・十三町（西寺）跡	層	第 18 図 -6	椀	Ⅲ 2		—		右 9112a	
82	右京九条一坊十二・十三町（西寺）跡	層	第 18 図 -7	椀	Ⅲ B		底部		右 9112a	
83	右京九条一坊十二・十三町（西寺）跡	層	第 18 図 -8	椀	Ⅲ 2		14.8		右 9112a	
84	右京九条一坊十二・十三町（西寺）跡	層	第 18 図 -9	椀	Ⅲ 2		14.6		右 9112a	
85	右京九条一坊十二・十三町（西寺）跡	層	第 18 図 -10	椀	Ⅲ B		底部		右 9112a	
86	右京九条一坊十二・十三町（西寺）跡	層	第 18 図 -11	椀	Ⅲ A		—		右 9112a	
87	右京九条一坊十二・十三町（西寺）跡	層	第 18 図 -12	椀	Ⅲ 2	細片	—		右 9112a	
88	右京九条一坊十二・十三町（西寺）跡	層	第 18 図 -14	椀	Ⅲ 2	細片	—		右 9112a	
89	右京九条一坊十二・十三町（西寺）跡	層	第 18 図 -15	椀	Ⅲ 2	細片	—		右 9112a	
90	蜂岡寺跡	—	163525-8	椀	Ⅲ A2		15		蜂岡寺	80UZ-HF
91	仁和寺旧境内	SD30	52　図版 34	椀	Ⅲ 2	細片	—	3AB	仁和寺	
92	仁和寺旧境内	SD30	53　図版 34	椀	Ⅲ 2	細片	—	3AB	仁和寺	
93	仁和寺旧境内	SD30	図 18-54	椀	Ⅲ A	細片	底部	3AB	仁和寺	
94	仁和寺旧境内	SK47	91　図版 34	椀	—	細片	底部		仁和寺	
95	仁和寺旧境内	層	図 18-126	椀	Ⅲ 2	細片	—		仁和寺	
96	仁和寺旧境内	層	127　図版 34	椀	Ⅲ 2	細片	—		仁和寺	
97	平安宮跡内裏蘭林坊跡	層	第 25 図 -5	椀	Ⅳ	細片	—		宮 b	
98	左京四条一坊二町跡	層	図 49-353	椀	Ⅳ B R		底部		左 4102	
99	左京四条二坊十四町跡	SE3444	図 50-57	椀	Ⅴ B		底部	2C	左 4214	
100	右京二条三坊十五町跡	SX25	170	椀	Ⅴ B R		底部	2C 3A	右 2315a	HKIM
101	右京二条三坊十五・十六町跡	溝 206	図 27-90	椀	Ⅳ B?	薄	底部		右 2315b	道路拡幅
102	右京二条三坊八町	層	図 77-195	椀	Ⅳ B R		底部		右 2308	花園大学構内
103	右京三条二坊八町跡	SK8	68	椀	Ⅴ B		底部	2B	右 3208	HKRI
104	右京三条二坊八町跡	層 33-1	79	椀	Ⅴ B		底部	2B	右 3208	HKRI
105	右京三条二坊八町跡	SK6・7	95	椀	Ⅳ R	薄	底部	2B	右 3208	HKRI
106	右京三条二坊八町跡	—	1	椀	Ⅴ B		底部		右 3208	HKRP
107	右京三条二坊八町跡	—	2	椀	Ⅴ B		底部		右 3208	HKRP
108	右京三条一坊六・七町	池 250	図版 48-507	椀	Ⅳ 1 R		14.5	2B	右 3106a	百花亭
109	右京三条一坊六・七町	池 250	図版 48-508	椀	Ⅳ B 1 R		13.9	2B	右 3106a	百花亭
110	右京三条二坊一町跡	池跡	図 15-74	椀	Ⅴ B 1 R		22.5	2B ?	右 3201	96H0125
111	右京三条二坊十六町跡	SG82	図版 27-337 指 321	椀	Ⅳ B 1 R		18.6	2C	右 3216	HKRA　斎宮
112	右京三条二坊十六町跡	SG82	540	椀	Ⅳ		—	2C	右 3216	HKRA　斎宮
113	右京三条二坊十六町跡	SG82	542	椀	-	体部細片	—	2C	右 3216	HKRA　斎宮

表10　出土資料一覧表（7）

№	遺跡名	出土地点	掲載番号	器形	分類	備考	口径	時期	報告書索引	調査記号等
114	右京三条二坊十六町跡	SG82	548	椀	ⅤB		底部	2C	右 3216	HKRA　斎宮
115	右京三条二坊十六町跡	SG82	549	椀	-		—	2C	右 3216	HKRA　斎宮
116	右京三条二坊十六町跡	SG82	537	椀	Ⅴ1		18.4	2C	右 3216	HKRA　斎宮
117	右京三条二坊十六町跡	SD01	10	椀	ⅣB？		底部		右 3216	HKRA　斎宮
118	右京三条二坊十六町跡	SD01	11	椀	ⅤB？		底部		右 3216	HKRA　斎宮
119	右京三条二坊十六町跡	層	図 43-438	椀	ⅤB 1R	細片	19.4		右 3216	HKRA　斎宮
120	右京三条三坊三町跡	SX07	3-280	椀	ⅣB		底部	2B	右 3303	HKCF2
121	右京四条二坊十三町跡（淳和院）	層	図 16-406	椀か	ⅤB？	細片	底部		右 4213	
122	右京六条一坊五・六町跡	土器溜 O019	図 34-29	椀	ⅣB	底部細片	底部	1C	右 6105	HKXF002
123	仁和寺旧境内	SD30	55　図版 34	椀	-	体部	—		仁和寺	
124	仁和寺旧境内	SD30	図 18-56	椀	ⅣB		底部		仁和寺	
125	右京四条二坊十三町跡（淳和院）	層	図 16-407	椀	ⅥB	細片	14.2		右 4213	
126	右京五条三坊三町跡	溝 2	図 18-84	椀か	Ⅵ	細片	—	3A	右 5303	HKQP
128	左京北辺四坊五町跡	土坑 B1013	54-41	椀	Ⅷ		—		左北 405	迎賓館
127	左京北辺四坊五町跡	土坑 B1013	54-40	椀	ⅡB2		—		左北 405	迎賓館
129	左京三条三坊十二町跡	灰色粘質土	第 8 図 -12	椀	Ⅱ2		—		左 3312	三条西殿跡
130	左京四条一坊		p394158696-7	椀	ⅡB 1R		16	4	左 41 XX	壬生車庫
131	左京四条二坊十四町跡	SD3330	図 52-117	椀	Ⅱ2	細片	—	3A	左 4214	
132	左京四条三坊五町跡	SE21	35	椀	Ⅱ1		14.8		左 4305	
133	左京五条三坊九町跡	SE805　下層	図 36-35	椀	Ⅱ1		—	3B	左 5309	HKPS
134	右京三条一坊六・七町	溝 43	図版 38-186	椀	Ⅱ1		—		右 3106a	百花亭
135	右京三条二坊十六町跡	層	59	椀	Ⅱ2		—		右 3216	HKRA　斎宮
136	常盤仲之町遺跡・広隆寺旧境内	土坑 183	図 14-33	椀	Ⅱ2		—	3C	常盤	UZSY
137	常盤仲之町遺跡・広隆寺旧境内	土坑 22	図 17-97	椀	Ⅱ2		—	3C	常盤	UZSY
138	常盤仲之町遺跡・広隆寺旧境内	土坑 189	図 15-47	椀	Ⅱ1		—	4A	常盤	UZSY
139	仁和寺旧境内	層	124　図版 34	椀	Ⅱ2？	細片　貫入	—		仁和寺	
140	仁和寺旧境内	層	128　図版 34	椀	Ⅱ2？	玉縁太　貫入	—		仁和寺	
141	右京三条二坊十六町跡	SG82	544	椀	—	不明細片	—	2C	右 3126	HKRA　斎宮
142	右京三条二坊十六町跡	SG82	543	椀	—	細片	—	2C	右 3216	HKRA　斎宮
143	右京四条二坊十六町	層	未報告 22-8	不明体部	—		—		右 4216	88HK-RM
144	右京四条二坊十六町	層	未報告 22-8	不明体部	—		—		右 4216	88HK-RM
145	右京四条二坊十六町	層	未報告 22-8	不明体部	—		—		右 4216	88HK-RM
146	右京六条一坊六町跡	SX68 北掘形	未報告 P18	椀	—		—		右 6106	XF019
147	右京九条一坊十二・十三町（西寺）跡	層	第 18 図 -13	椀	—		底部		右 9112a	
148	左京四条二坊十四町跡	層他　未報告	1	皿	ⅠC 1R	平高台	—		左 4214	
149	左京四条二坊十四町跡	層他　未報告	4	皿	Ⅰ1		—		左 4214	
150	左京四条二坊十四町跡	層他　未報告	5	皿	Ⅰ？		—		左 4214	
151	右京三条一坊六・七町	池 250	図版 48-509	皿	ⅠB 1R		15.9	2B	右 3106a	百花亭
152	右京三条二坊二町	SE4	図 45-3	皿	ⅠB2			(2C)	右 3202	ＨＫＲＢ　山田鉄工所
153	右京三条二坊八町跡	層	未 96	皿	ⅠR			2B	右 3208	HKRI
154	右京五条三坊三町跡	溝 1・3	図 19-139	皿	ⅠB 1R		13	3A	右 5303	HKQP
155	右京六条一坊五・六町跡	層	図 34-31	皿？	Ⅰ2	細片	—		右 6105	HKXF002
156	右京六条一坊十三町跡	SX1	図 41-33	皿	ⅠB 1		15.2		右 6113a	XF006
157	右京六条一坊十三町跡	SD20	図 63-22	皿	ⅠB 2		16		右 6113b	XF12
158	右京三条二坊十六町跡	層	47	皿か	ⅠB？		底部		右 3216	HKRA　斎宮
159	右京三条三坊三町跡	SX07	3-276	皿	Ⅰ1		14.4	2B	右 3303	HKCF2
160	仁和寺旧境内	SD30	57　図版 34	皿	ⅠB？		底部		仁和寺	
161	仁和寺旧境内	SD30	図 18-58・59	皿	ⅠB	貫入	—		仁和寺	
162	右京三条二坊一町跡	池跡	図 15-73	托	Ⅰ		8		右 3201	96H0125
163	左京一条二坊十二町跡	土坑 2	図 9-28	托	Ⅱ		7.8	2BC	左 1212	
164	右京三条一坊六・七町	池 250	図版 48-510	托	Ⅱ		—	2C	右 3106a	百花亭
165	右京五条三坊三町跡	溝 1・3	図 19-140	托	Ⅱ	細片	8.1	3A	右 5303	HKQP
166	右京二条三坊八町	SK05	図 55-128	唾壺か			体部	3AB	右 2308	花園大学構内
167	右京二条三坊八町	層	図 77-196	小壺？	—		底部		右 2308	花園大学構内
168	右京三条三坊三町跡	SX07	3-274	壺蓋	—		4.9	2B	右 3303a	HKCF2
169	左京三条三坊十町跡	井戸 218	図 13-37	壺蓋	—	金属写し	—	3C	右 3310	
170	右京九条二坊四町	—	図 4-4	壺	—		—		右 9204	洛陽高校
171	仁和寺旧境内	SD30	図 18-60	壺蓋	—	細片	—	3AB	仁和寺	
172	仁和寺旧境内	SD34	図 18-68	壺	細頸壺？	細片	8.4	3AB	仁和寺	
173	左京四条二坊十四町跡	層	未報告 9	合子	—		13.2		左 4214	

唐三彩・絞胎陶器　長沙窯系

№	遺跡名	出土地点	掲載番号	器種	釉色等	器形	備考	時期	報告書索引	調査記号等
唐三 01	左京四条四坊跡	—	考古資料館 56 ～ 59	唐三彩	三彩	枕			左 44xx	中京区帯屋町
唐三 02	左京九条三坊跡	—	資料選Ⅱ 32a	唐三彩	三彩	枕			左 93XX	南区東九条西山王町
唐三 03	右京二条三坊二町跡	—	資料選Ⅱ 32 b	唐三彩	三彩	壺			右 2302	朱八小学校　西ノ京中御門西町
唐三 04	右京二条三坊二町跡	—	資料選 34	唐三彩	二彩	鉢	細片		右 2302	79HK-SE003　朱八小学校
唐三 05	右京八条二坊二町跡	—	資料選Ⅱ 32 d	唐三彩	二彩	水注			右 8202	七条小学校
唐三 06	小倉町別当町遺跡	—	図 83(161769 － 9)	唐三彩	二彩	小杯			小倉町	北白川小学校
唐三 07	常盤仲之町遺跡・広隆寺旧境内	土坑 224	図 15-77	唐三彩	二彩	稜椀			常盤	UZSY
絞 01	左京七条三坊跡	立会	資料選Ⅱ 32 c	絞胎陶器	—	壺			左 73XX	HKAV　立会
絞 02	左京八条三坊跡	—	資料選Ⅱ 32e	絞胎陶器	—	枕			左 83XX	
絞 03	右京二条三坊二町跡	—	資料選Ⅱ 32 b	絞胎陶器	—	枕			右 2302	朱八小学校　西ノ京中御門西町
長 01	平安宮跡内裏蘭林坊跡	—	第 25 図 -1	長沙	青釉	椀			宮 b	
長 02	左京四条一坊二町跡	層	図 49-354	長沙	黄釉	椀			左 4102	
長 03	右京二条三坊跡	SK05	考古資料館　10	長沙	黄釉	椀			右 23 XX	75HKSE
長 04	右京二条三坊十五・十六町跡	溝 111 上層	図 27-92	長沙	—	椀			右 2315b	道路拡幅

表11　出土資料一覧表（8）

№	遺跡名	出土地点	掲載番号	器種	釉色等	器形	備考	時期	報告書索引	調査記号等
長 05	右京三条二坊八町跡	層	87	長沙	黄釉	椀			右 3208	HKRI
長 06	右京六条一坊十四町跡	層	未報告　P15	長沙	黄釉	椀			右 6114a	XF010
長 07	右京九条二坊四町跡	—		長沙？	—	椀	外面下半露胎		右 9204	洛陽高校　ＨＫＲＫ 02
長 08	仁和寺旧境内	SK47	図 18-89	長沙	青磁	椀	東口		仁和寺	
長 09	史跡・名勝　嵐山	池状遺構	308	長沙	黄釉	椀		2A	嵐山	UZYA
長 10	史跡・名勝　嵐山	池状遺構	309	長沙	黄釉	皿		2A	嵐山	UZYA
長 10	平安宮西限跡	不明	資料選 32-j	長沙	黄釉褐彩	水注			宮 d	
長 11	左京四条一坊二町跡	層	図 49-355	長沙	黄釉	水注			左 4102	
長 13	右京二条三坊二町跡	SD11	資料選Ⅱ 38	長沙	褐釉蝶文	壺			右 2302	79HK-SE003　朱八小学校
長 14	右京二条三坊二町跡	—	資料選Ⅱ 32 b	長沙	黄釉褐彩	水注			右 2302	朱八小学校　西ノ京中御門西町
長 15	右京二条三坊二町跡	SD11	図 160　写真	長沙	—	水注			右 2302	朱雀第八小
長 16	右京二条三坊十五町跡	SX25	171	長沙？	褐釉	壺		2C3A	右 2315a	HKIM
長 18	右京二条三坊十五町跡	包含層	172	長沙？	褐釉	壺			右 2315a	HKIM
長 19	右京二条三坊十五・十六町跡	溝 111 上層	図 27-93	長沙	—	壺			右 2315b	道路拡幅
長 20	右京三条一坊三町（右京職）跡	SF150	図 22-193	長沙	黄釉	水注	底部	2C	右 3103	
長 21	右京三条一坊六・七町跡	池 250	図版 48-513	長沙	二彩	壺か	粗	2B	右 3106	百花亭
長 22	右京三条一坊六・七町跡	池 250	図版 48-512	長沙	白釉緑彩	壺か	細片	2B	右 3106	百花亭
長 23	右京三条二坊十六町跡	SG82	554	長沙？	—	壺・水注？		2C	右 3216	HKRA　斎宮
長 24	右京三条二坊十六町跡	SG82	558	長沙	—	壺・水注？		2C	右 3216	HKRA　斎宮
長 25	右京三条二坊十六町跡	SG82	559	長沙	黄釉	水注	取手	2C	右 3216	HKRA　斎宮
長 26	右京三条二坊十六町跡	SG82	560	長沙	黄釉	水注	取手	2C	右 3216	HKRA　斎宮
長 27	右京三条二坊十六町跡	SG82	561	長沙	褐釉	壺・水注？	褐釉体部	2C	右 3216	HKRA　斎宮
長 28	右京三条二坊十六町跡	SG82	562	長沙	褐釉	壺・水注？	褐釉体部	2C	右 3216	HKRA　斎宮
長 29	右京三条二坊十六町跡	SG82	563	長沙	褐釉	壺・水注？	褐釉体部	2C	右 3216	HKRA　斎宮
長 30	右京三条二坊十六町跡	SG82	564	長沙	黄釉	壺・水注？	体部	2C	右 3216	HKRA　斎宮
長 31	右京三条二坊十六町跡	SG82	566	長沙	黄釉	壺・水注？	肩部	2C	右 3216	HKRA　斎宮
長 32	右京三条二坊十六町跡	SG82	566	長沙？	壺	壺	底部	2C	右 3216	HKRA　斎宮
長 33	右京四条二坊跡	—	資料選Ⅱ 32f	長沙	黄釉褐彩	水注			右 42 ＸＸ	立会か
長 34	右京六条二坊三町跡	層	図 26-154 ～ 156	長沙	貼花文	水注			右 6203	
長 35	右京七条一坊跡	—	資料選Ⅱ 32i	長沙	黄釉褐彩	水注			右 71 ＸＸ	中央市場か
長 36	右京八条二坊二町跡	—	資料選Ⅱ 32d	長沙	黄釉褐彩	水注			右 8202	85HK-YC002
長 37	成勝寺跡	—	図 53	長沙	黄釉褐彩	壺			成勝寺	161767 － 2
長 38	南春日町遺跡	—	資料選 32 g	長沙	黄釉褐彩	水注			南春日	
長 39	左京二条四坊十五町跡	溝 290	図 20-51	長沙？	黄釉	合子蓋？		3C	左 2415	東京極大路

表12　引用報告書一覧（1）

参考・引用　報告書

索引　報告書名

宮 a　平田　泰「Ｉ平安宮　中和院跡」『平安京跡発掘調査概要』京都市埋蔵文化財研究所概要集 1978　京都市文化市民局　財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1986

宮 b　山田邦和「第４章　平安宮内裏蘭林坊跡出土の土器・陶磁器」『平安京出土土器の研究』古代学研究所研究報告第４集　山田邦和編　財団法人古代学協会 1994

宮 c　辻裕司・丸川義弘・大立目一「１　平安宮内酒殿・釜所・侍従所跡」『平成７年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人　京都市埋蔵文化財研究所 1997

宮 d　梅川光隆「Ｖ平安宮西限」『平安京跡発掘調査概報』昭和 60 年度　財団法人京都市埋蔵文化財研究所

左北 405　丸川義広・小松武彦ほか『平安京左京北辺四坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第 22 冊　財団法人埋蔵文化財研究所　2004

左 1212　網伸也『平安京左京一条二坊十二町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2003-18　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2004

左 1309　山田邦和「第７章　平安京土御門烏丸内裏跡出土の土器・陶磁器」『平安京出土土器の研究』古代学研究所研究報告第４集　山田邦和編　財団法人古代学協会　1994

左 1310　京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅲ』198 1

左 23XX　未報告

左 2415　柏田有香・持田　透『平安京左京二条四坊十五町跡・東京極大路跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2015-5　公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2015

左 3304　赤松佳奈「左京三条三坊四町跡」『令和元年度京都市試掘調査報告』京都市文化市民局　2020

左 3312　下條信行・植山茂・定森秀夫・朧谷寿『三條西殿跡』平安京跡研究調査報告　第７集　財団法人古代学協会　1983

左 4102　丸山真司・南孝雄『平安京左京四条一坊二町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2014-10 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2015

左 41XX　『平安京跡発掘調査報告』　平安京調査会 1975

左 4214　平尾政幸・山口真『平安京左京四条二坊十四町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2003-5　財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

左 4305　吉川義彦・平田　泰「１章 09 左京四条三坊」『昭和 57 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所

左 5114　津々池惣一・高橋潔・能芝勉『平安京左京五条一坊十四町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-4　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2008

左 52XX　考古資料館に展示

左 5305　平田　泰『平安京左京五条三坊五町跡・烏丸綾小路遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-9 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2008

左 5309　網伸也・柏田有香『平安京左京五条三坊九町跡・烏丸綾小路遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2008-10　財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2008

左 5311　伊藤　潔『平安京左京五条三坊十一町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2007-7　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2007

左 6101　平尾政幸「８　平安京左京六条一坊」『平成３年度京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1995

左 6103　「22　平安京左京六条一坊三・六町」『昭和 53 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2011

左 6106　「24　平安京左京六条一坊六町」昭和 54 年度　京都市埋蔵文化財調査概要　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2012

左 72XX　考古資料館に展示

左 8307　鈴木廣司・吉川義彦・永田信一・岡田文男『平安京左京八条三坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第６冊　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1982

右北 306　柏田有香『平安京右京北辺三坊六町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2013-14　公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2014

右 1204　吉川義彦『西大宮大路跡発掘調査報告　右京一条二坊四町』　関西文化財調査会　2011

右 1312　吉川義彦『平安京跡発掘調査報告　右京一条三坊二町』　関西文化財調査会　1997

右 1313　東　洋一『平安京右京一条三坊十三町・二条三坊十六町跡』京都市埋蔵文化財発掘調査報告 2011-4　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2012

右 1316　東　洋一『平安京右京一条三坊十三町・二条三坊十六町跡』京都市埋蔵文化財発掘調査報告 2011-4　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2012

右 2203　辻　裕司「２章６右京二条二坊 (2)」『平安京跡発掘調査概報』昭和 56 年度　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1982

表13　引用報告書一覧（2）

索引	報告書名
右 2211	高橋　潔・モンペティ恭代『平安京右京二条二坊十一町・西堀川小路跡・御土居跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2012-25　公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2014
右 2301	堀内明博・吉崎　伸「1 章 11 平安京右京二条三坊 1 」『昭和 60 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1988
右 2307	百瀬　網伸也「1 章 30 平安京右京二条三坊七町」『昭和 53 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2011
右 2308	花園大学考古学研究室　花園大学考古学研究報告第 15 冊『平安京右京二条三坊八町』－花園大学構内調査報告Ⅶ -（附平安京右京一条四坊一・二町）花園大学考古学研究室　2010
右 2315a	平尾政幸「Ⅲ　平安宮右京二条三坊」『平安京跡発掘調査概報　昭和 61 年度』京都市文化市民局・財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1987
右 2315b	東洋一『平安京右京二条三坊十五・十六町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2012-14　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2013
右 3103a	平尾政幸・山口真・上村和直『平安京右京三条一坊三町（右京職）跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2001-3　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2002
右 3103b	本弥八郎・平尾政幸・山口真『平安京右京三条一坊三・六・七町跡』京都市埋蔵文化財研究所概報 2002-5　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2002
右 3105	山田邦和「第 5 章　平安京勧学院出土の土器・陶磁器」『平安京出土土器の研究』古代学研究所研究報告第 4 集　山田邦和編　財団法人古代学協会　1994
右 3106a	丸川義広・網伸也・近藤奈『平安京右京三条一坊六・七町跡　西三条第（百花亭）跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告書 2011-9　財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2013
右 3106b	水谷明子・上村憲章・家崎孝治『平安京右京三条一坊六町・壬生遺跡 - 西三条第（百花亭）-』古代文化調査会　2009
右 3110	大立目一『平安京右京三条一坊十・十五町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2001-2　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2011
右 3201	馬瀬　智光「Ⅲ平安京右京三条二坊一町跡　№ 40」『京都市内遺跡試掘調査概報　平成 8 年度』京都市文化市民局　1997
右 3202	平尾政幸「2 章 8　右京三条二坊」『平安京跡発掘調査概報　』昭和 56 年度　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1983
右 3208a	堀内明博・木下保明「1 章 11 平安京右京三条二坊」『昭和 61 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1989
右 3208b	辻　裕司「1 章 19　平安京右京三条二坊 1 」『平成元年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1994
右 3214	布川豊治『平安京右京三条二坊十四町跡』　京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-1　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2006
右 3216	網伸也・清藤玲子・鈴木廣司・辻裕司『平安京右京三条二坊十五・十六町　－「齋宮」の邸宅跡－』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第 21 冊　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2002
右 3303a	平尾政幸『平安京右京三条三坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第 10 冊　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1990
右 3303b	南孝雄『平安京右京三条三坊三町跡・西ノ京遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2012-23　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2013
右 3305	山本雅和・末次由紀恵　京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2017-15『平安京右京三条三坊五町跡』公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所 2018
右 3310	山本雅和『平安京左京三条三坊十町跡』京都市埋蔵文化財研究所調査概報 2002-7 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2002
右 4109	未報告
右 4204	金島恵一・小檜山一良『平安京右京四条二坊四町跡・壬生遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2013-5　公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2013
右 4213	吉川義彦『淳和院跡発掘調査報告　平安京右京四条二坊』　関西文化財調査会 1997
右 4216	辻　裕司「1 章 20 平安京右京四条二坊」『昭和 63 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1993
右 42XX	考古資料館に展示
右 5302	伊藤　潔「1 章 21 平安京右京五条三坊」『昭和 63 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1993
右 5303	東洋一・小森俊寛・北野信彦・竜子正彦『平安京右京五条三坊三町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2005-2　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2005
右 6103	平尾政幸・山口真・永田宗秀『平安京右京六条一坊・左京六条一坊跡』京都市埋蔵文化財研究所調査概報 2002-6　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2002
右 6105	梅川光隆・木下保明・丸川義広『平安京右京六条一坊　－平安時代前期邸宅跡の調査－』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第 11 冊　1992
右 6106	平尾政幸・山口真・永田宗秀『平安京右京六条一坊・左京六条一坊跡』京都市埋蔵文化財研究所調査概報 2002-6　財団法人　京都市埋蔵文化財研究所　2002
右 6111a	平尾政幸・山口真・永田宗秀『平安京右京六条一坊・左京六条一坊跡』京都市埋蔵文化財研究所調査概報 2002-6　財団法人　京都市埋蔵文化財研究所　2002
右 6111b	平尾政幸「7　平安京右京六条一坊」『平成 7 年度京都市埋蔵文化財調査概要』　財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1997
右 6113a	平尾政幸「11　平安京右京六条一坊」『平成 3 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人　京都市埋蔵文化財研究所 1995
右 6113b	平尾政幸「14 平安京右京六条一坊」『平成 8 年度京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1998
右 6114a	平尾政幸「11　平安京右京六条一坊」『平成 6 年度京都市埋蔵文化財調査概要』　財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996
右 6114b	平尾政幸・山口真・永田宗秀『平安京右京六条一坊・左京六条一坊跡』京都市埋蔵文化財研究所調査概報 2002-6　財団法人　京都市埋蔵文化財研究所　2002
右 6203	小檜山一良『平安京右京六条二坊三町跡』　京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-25　財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2007
右 6302	水谷明子『平安京右京六条三坊二町　西院遺跡』古代文化調査会　2016
右 7107	東洋一『平安京右京七条一坊七町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2016-2　公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2016
右 7114a	『平成 29 年度　重要遺跡出土文化財整理報告』京都市文化市民局 2018 桜井みどり「18　右京七条一坊」『平成 9 年度京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1999
右 7114b	「1 章 31 平安京右京七条一坊十四町・衣田町遺跡」『昭和 55 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2011
右 7115	津々池惣一・小檜山一良『平安京右京七条一坊十五町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-19　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2009
右 7212	南出俊彦「19　右七条二坊」『平成 9 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1999
右 72XX	考古資料館に展示
右 9112a	寺升初代「第 3 章　平安京西寺跡出土の土器・陶磁器」『平安京出土土器の研究』古代学研究所研究報告第 4 集　山田邦和編　財団法人古代学協会 1994
右 9112b	長宗繁一・鈴木久男「西寺東僧房跡」『平安京跡発掘調査概報』財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1977
右 9114	堀内明博「Ⅱ西寺第 13 次調査」『平安京跡発掘調査概報』昭和 61 年度　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1989
右 9204	堀内明博・梅川光隆「1 章 18 平安京右京九条二坊」『昭和 60 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1988
南春日	未報告
一条寺	平尾政幸・本　弥八郎『一乗寺向畑町遺跡発掘調査概報』昭和 61 年度　財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1989
太秦	東・南出・尾藤『平安京右京二条三坊十五・十六町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2012-14　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2013
北野廃寺	「1 章 71 北野廃寺 2 」『昭和 54 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2012
広隆寺	山田邦和「第 6 章　広隆寺旧境内出土の土器・陶磁器」『平安京出土土器の研究』古代学研究所研究報告第 4 集　山田邦和編　財団法人古代学協会 1994
常盤	加納敬二『常盤仲之町遺跡・広隆寺旧境内』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2010-4　財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2010
仁和寺	百瀬正恒『仁和寺境内発掘調査報告 - 御室会館建築に伴う調査－』京都市埋蔵文化財調査報告第 9 冊　財団法人　京都市埋蔵文化財研究所 1990
蜂岡寺	平田『広隆寺跡』右京検察庁庁舎改築に伴なう発掘調査の概要　昭和 55 年度 (1980), 「1 章 78 広隆寺旧境内」『昭和 55 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2011

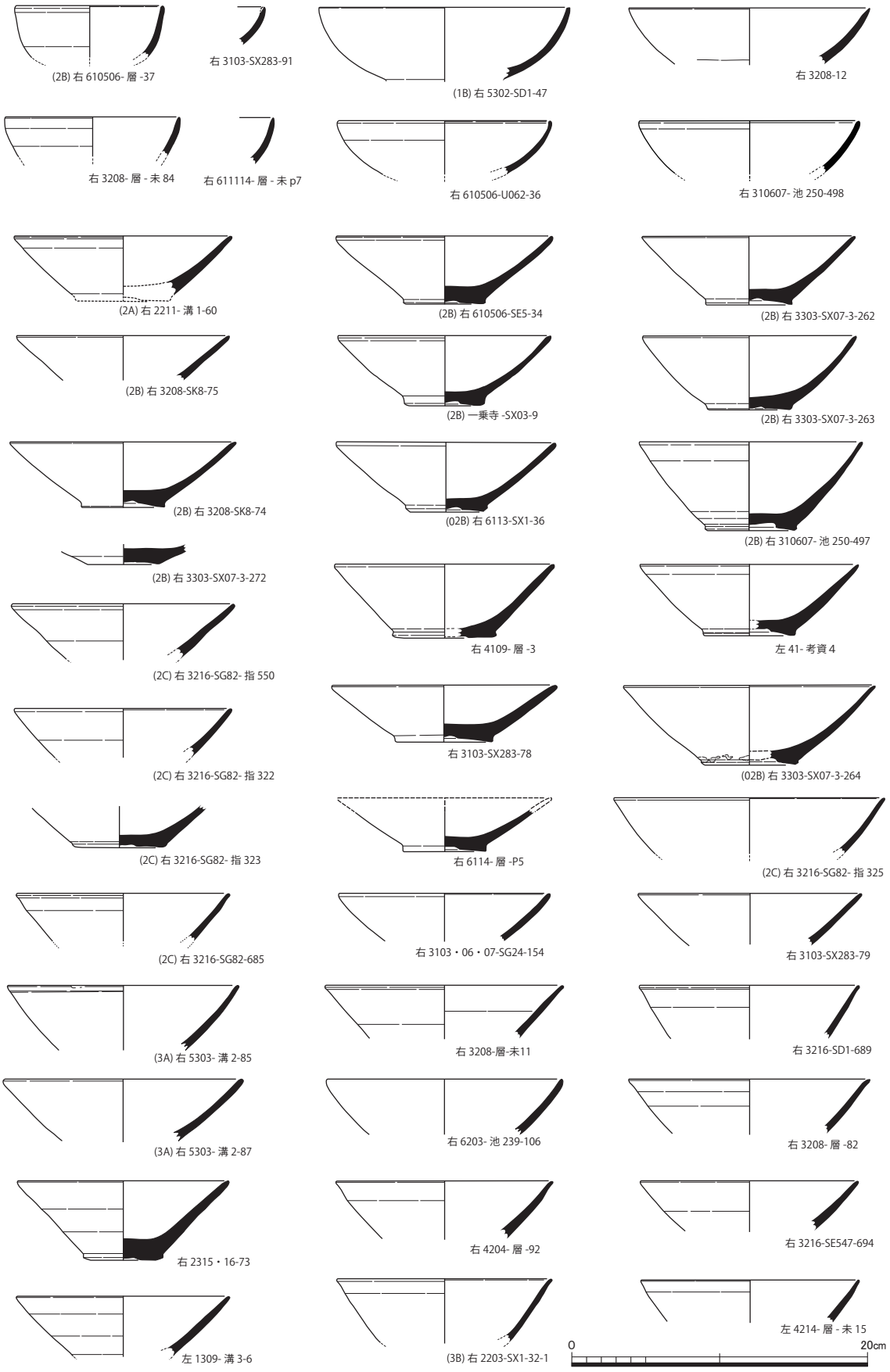


図21　京都出土遺物（1）　青磁（椀Ⅰ・Ⅱ・ⅢA）

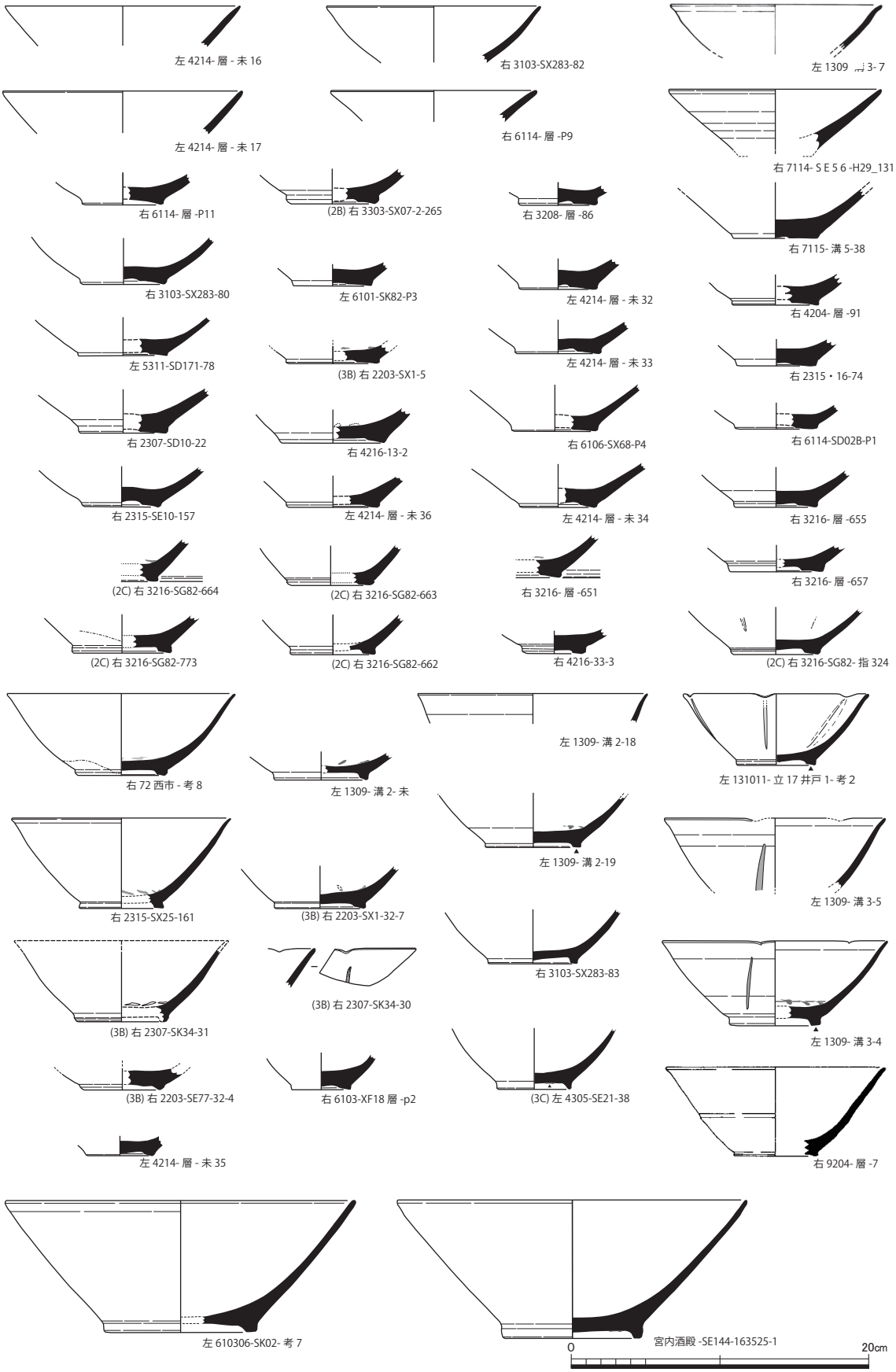


図22　京都出土遺物（2）　青磁（椀Ⅲ・ⅢB・大椀）

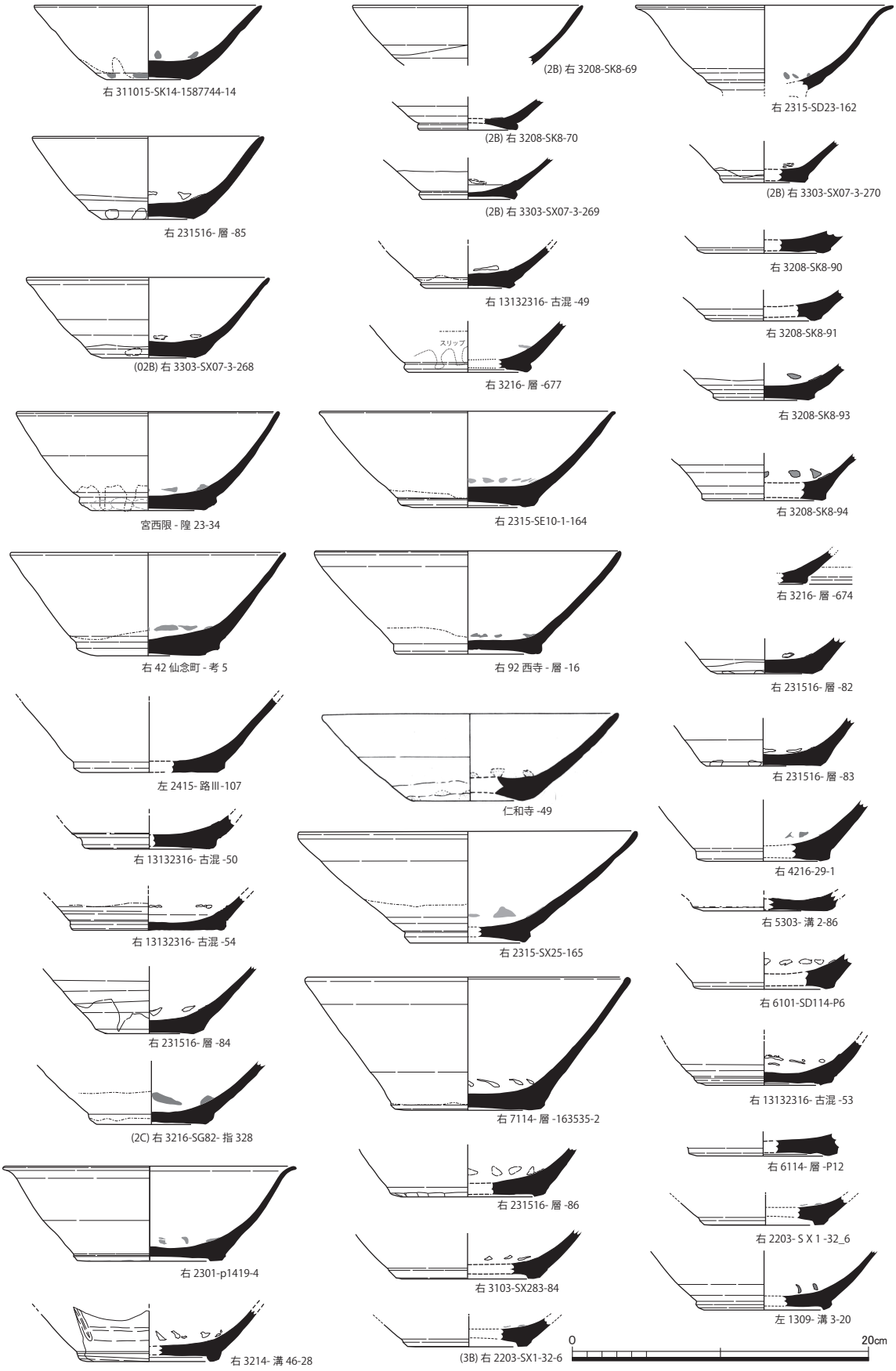


図23　京都出土遺物（3）　青磁（粗製品　椀ⅢC・Ⅶ）

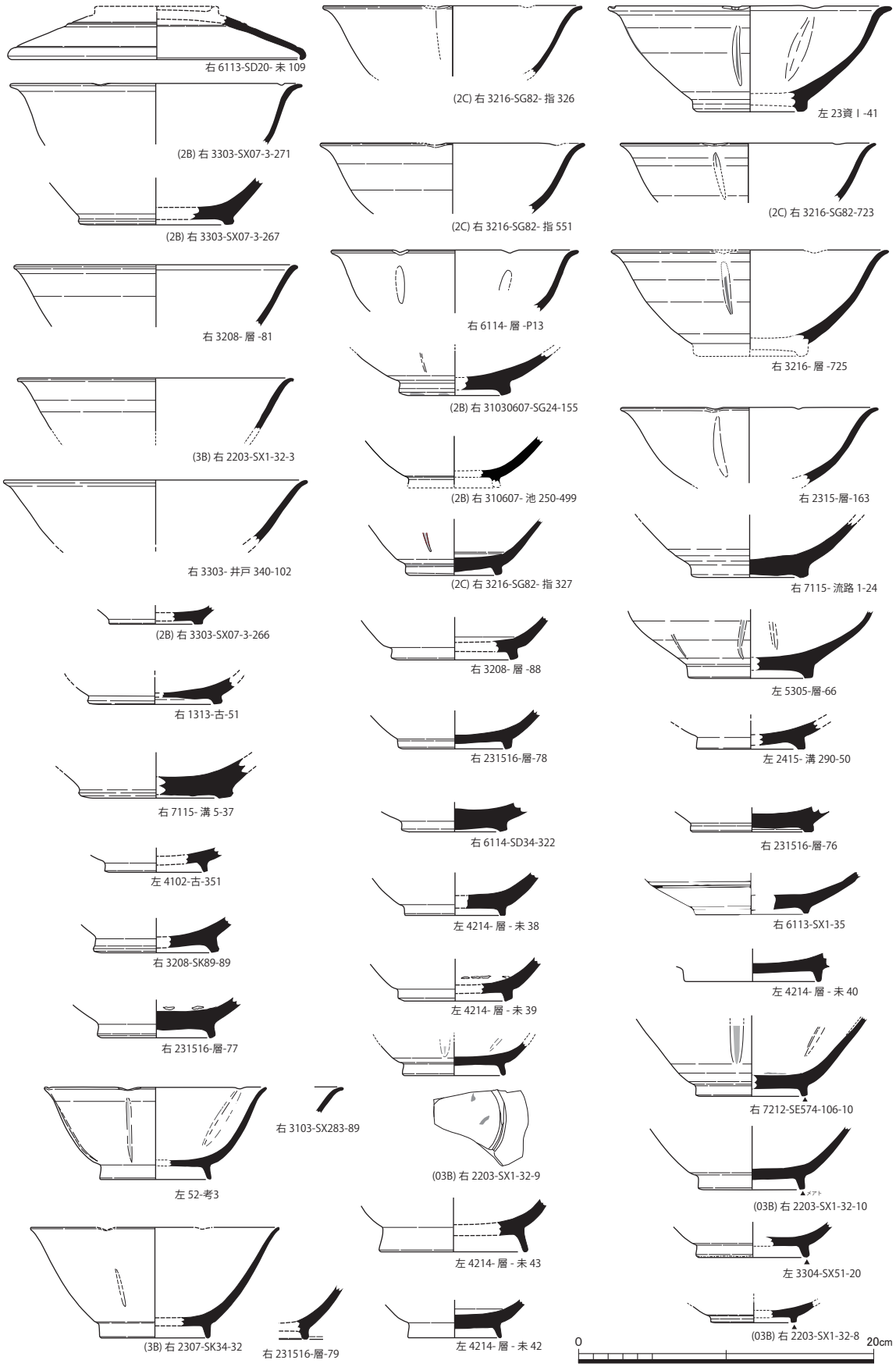


図24　京都出土遺物（4）　青磁（椀Ⅳ・Ⅴ）

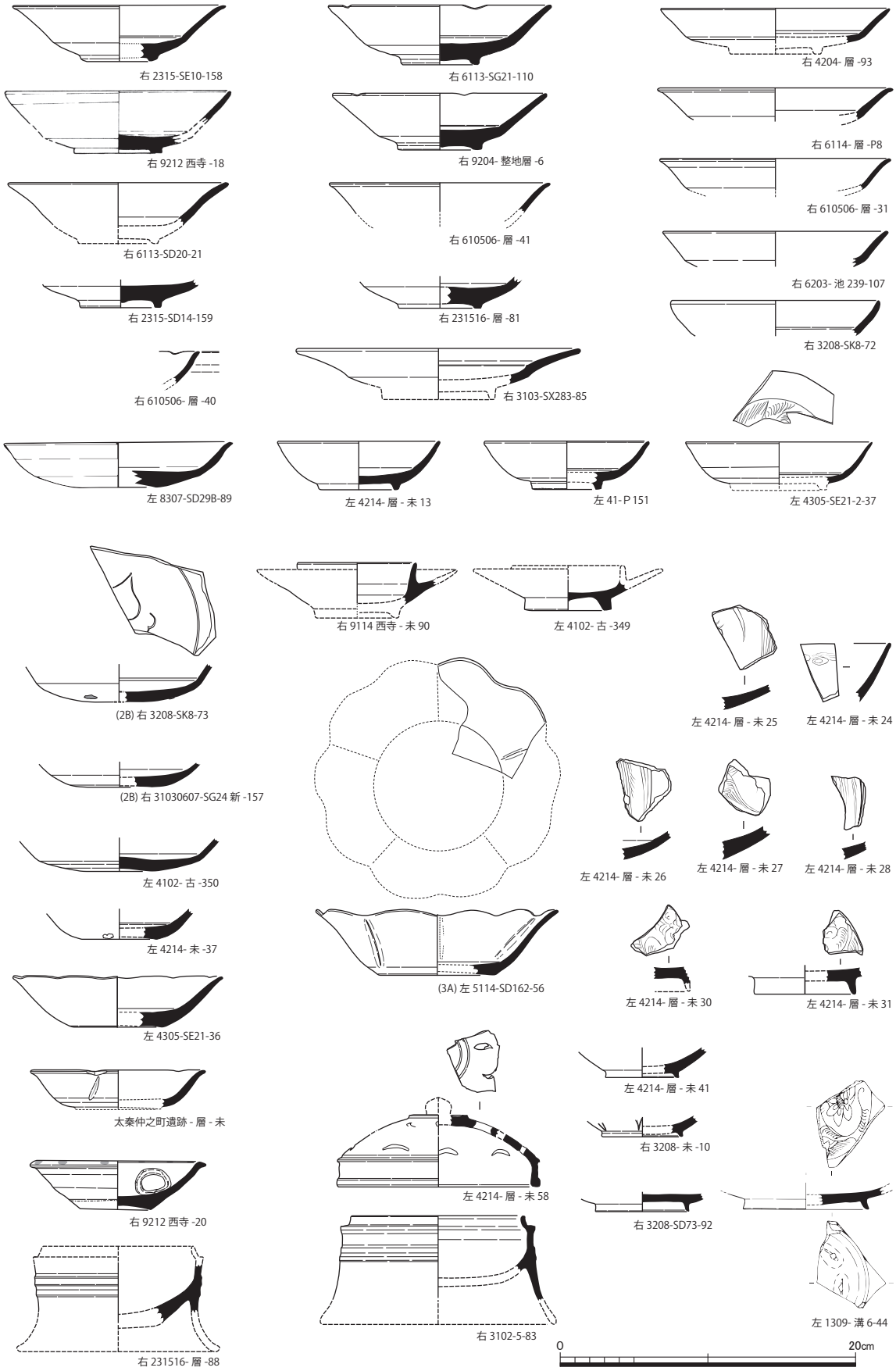


図25　京都出土遺物（5）　青磁（皿，杯，托，灯明皿，香炉，11世紀前葉の椀・皿）

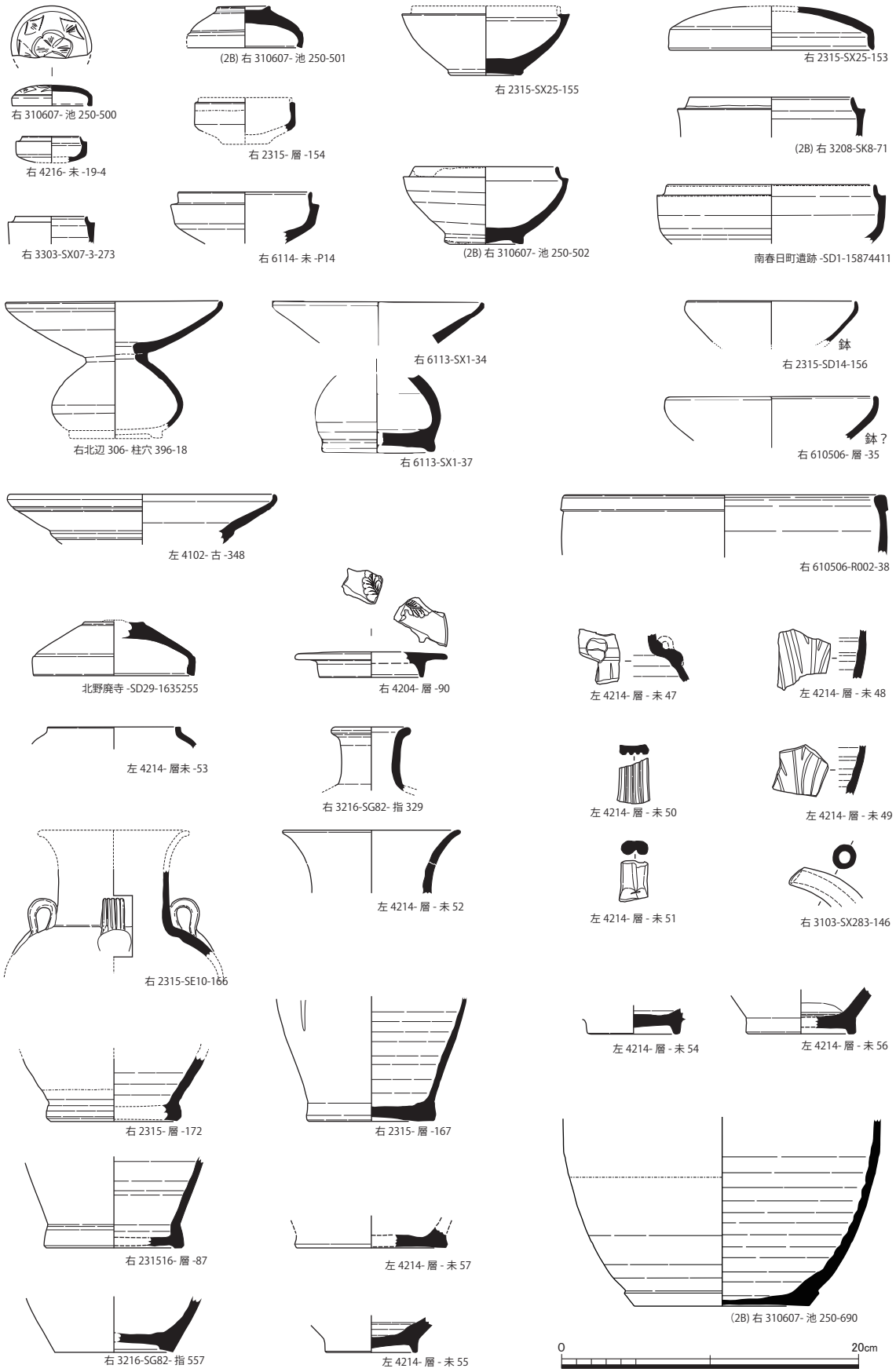


図26　京都出土遺物（6）　青磁（鉢，合子，唾壺，水注，壺）

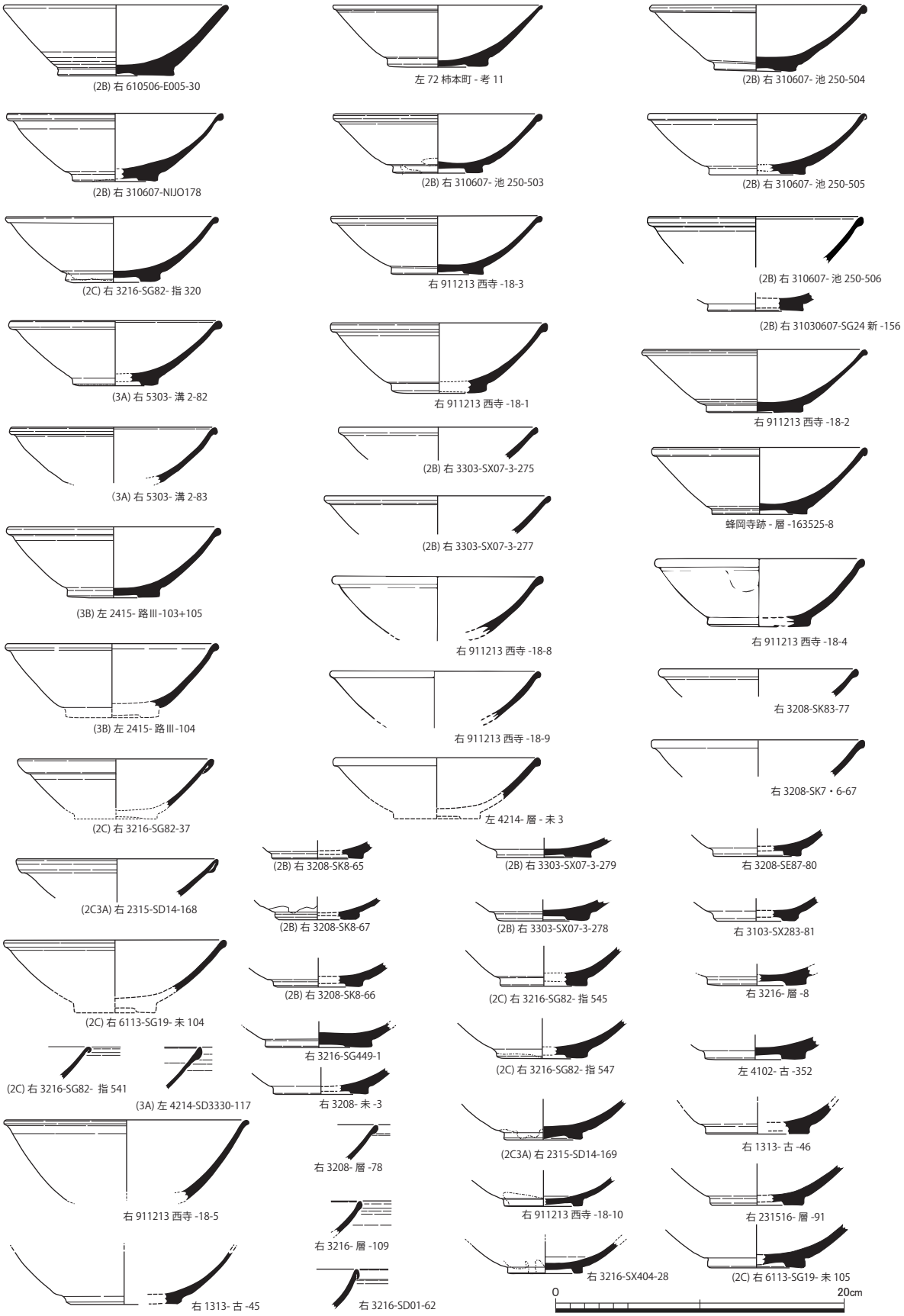


図27　京都出土遺物（7）　白磁（椀Ⅲ）

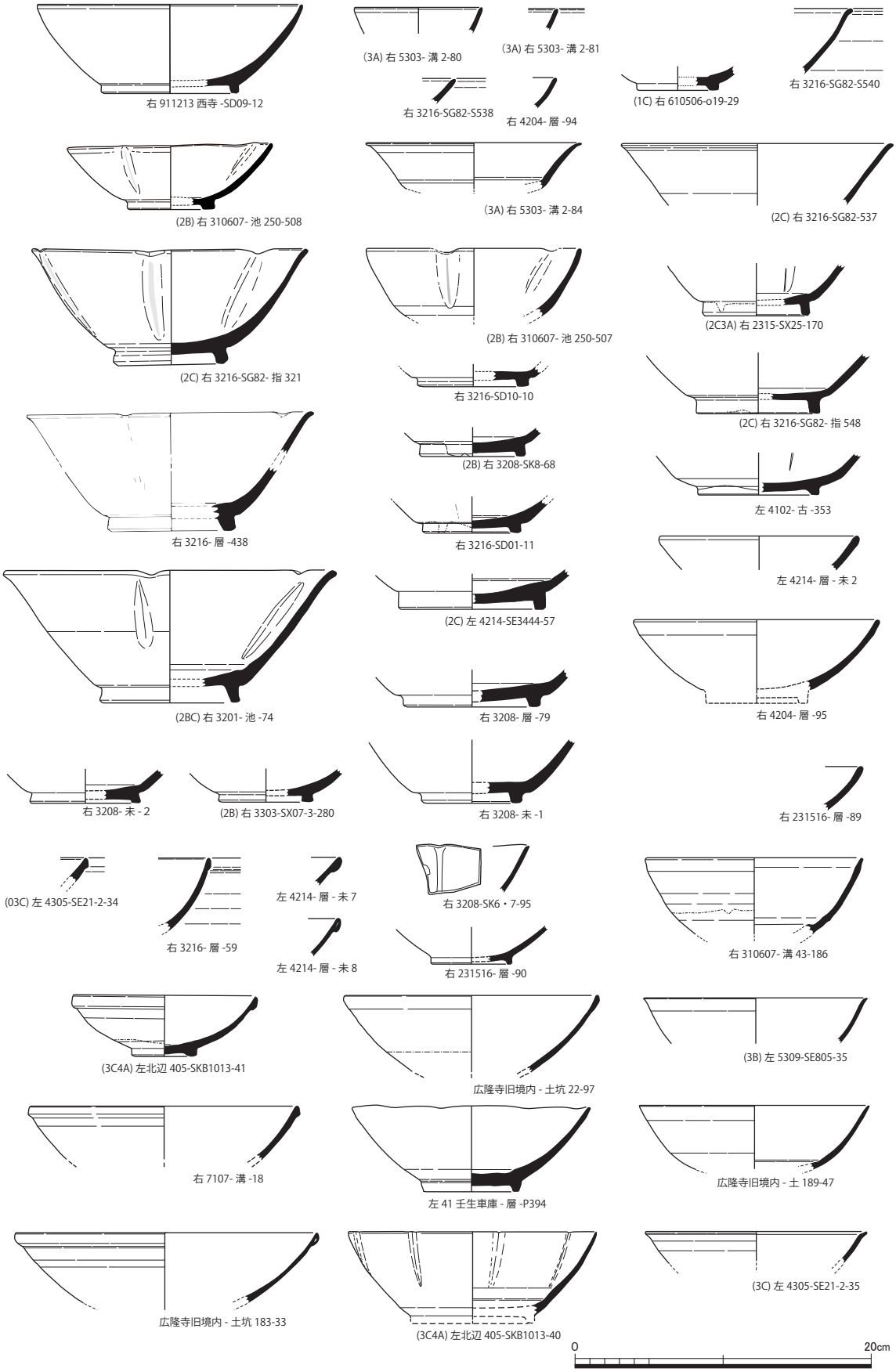


図28　京都出土遺物（8）　白磁（椀Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅷ）

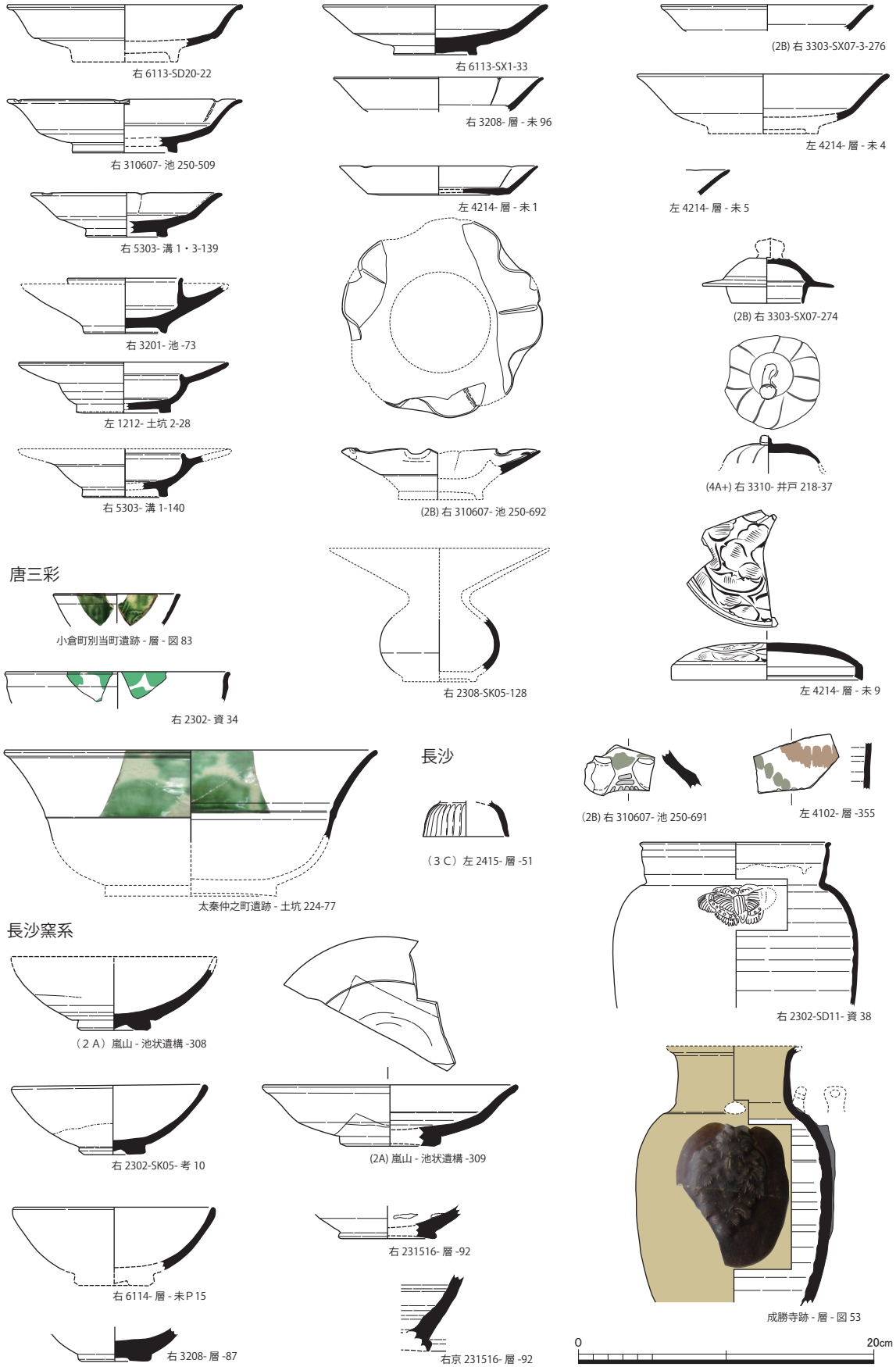


図29　京都市出土遺物（9）　白磁（皿・托・その他）唐三彩・長沙窯系